

劣等生は"阿修羅  
"

ふぼっ！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔法と武が混ざり一人の男は進化する。

劣等生の兄、司波達也。優等生の妹、司波深雪。

そしてもう一人、修羅道を辿る、十鬼蛇王馬。

これは本来交わることのなかった者達の物語…

仲間との出会い、強敵との死闘。…そして、別れ。

絶望を乗り越え、男は拳を握る。

『アンタも闘るのかい?』

# 目次

## 第一章 入学編

第1話	入学	1
第2話	下校	31
第3話	理由	62
第4話	挑戦	99
第5話	操流	133
第6話	禁句	157
第7話	本部	174
第8話	会議	194
第9話	剣技	215
第10話	金剛	232
第11話	超人	255



# 第一章 入学編

## 第1話 入学

夢を見ていました。

内容はシンプルかつ波乱で：私は鳥籠に閉じ込められたかのようなお姫様なんです。辺りを見渡せば、発展した技術と主に備わった高層ビル等が並んでいて、現代にしては普通すぎるもの。

でも：一つ違ったのはその全てが壊れていた事：

ビルは欠陥していて直す気配もありません。

それに雰囲気は重苦しく昼間からネオン街のような：

私は囚われの身であって周りには強面をした男達が複数。

女の子なら誰も一度夢を見ます。

ピンチ的な状況から王子様が救いに来てくれて、そこから始まる恋：お姫様になる夢が：

私の夢にも王子様は現れます：

最悪という言葉を表して良い王子様が…

その王子様は刃物を両手に持っていて覗かせた犬歯は今にも噛み殺されてしまいうなほど尖っていて、その瞳は殺意に満ちあふれていました。

王子様は男達を一蹴すると私の方に顔を向けると何も言わずそのまま振り返って立ち去って行きます。

深雪「待って下さい！あなたは！あなたの名前は！！」

私の問いかけにも応じずひたすら歩いて行く姿は追い付けなくらいに小さくなっ  
ていきます。

手を伸ばしても、どれだけ走っても彼に届く事はありません。

深雪「…ん……また、…この夢…」

そういえばいつからでしょうか。

この夢を見る様になったのは。

これは一体悪夢なのでしようか。

…でも私は、この続きが知りたい。

この続きを待ち受けるのが現実だろうとなんだろうと貴方を知りたい。

たとえば…この世界中の全てを崩してでも…

深雪「いつか…探しにいきます…」

—————

二十一世紀―西暦二〇九五年を迎えても未だ統一される気配すら見せぬ世界の各国は、魔法技能師の育成に競って取り組んでいる。

―国立魔法大学付属第一高校―

毎年、国立魔法大学へ最も多くの卒業生を送り込んでいる高等魔法教育機関として知られている。

それは同時に、優秀な『魔法技能師』（魔法師）を多く輩出しているエリート校ということでもある。

魔法教育に、教育機会の均等などという建前は存在しない。この国にそんな余裕は無い。

それ以上に、使える者と使えない者の間に存在する歴然とした差が、甘ったれた理想論の介在を許さない。

徹底した才能主義。

残酷なまでの実力主義。

それが、魔法の世界。

この学校に入学を許されたということ自体がエリートということであり、入学の時点から既に優等生と劣等生が存在する。

—————

深雪「納得できません。」

達也「まだ言っているのか：？」

第一高校の入学式の日、新生活とそれがもたらす未来予想図に胸躍らせる新入生も、彼ら以上に舞い上がっている父兄の姿も、さすがに疎らだ。

深雪「何故お兄様が補欠なのですか？入学の成績はトップだったじゃありませんか！本来ならば私ではなく、お兄様が新入生総代を務めるべきですのに！」

達也「お前が何処から入試結果を手に入れたのかは横に置いておくとして：魔法科高校なんだから、ペーパーテストより魔法実技が優先されるのは当然じゃないか。」

激しい口調で食って掛かる女子生徒を、男子生徒がなんとか宥めようとしている構図だった。

よく見ると二人の制服は微妙に、しかし明確に異なる。



女子生徒の胸には八枚の花弁をデザインした第一高校のエンブレム。男子生徒にはそれが無い。

先程「お兄様」と呼んでいたことから察すると兄妹なのだろう。しかし兄妹というには似ているところは無いと言つてもいい。

妹の方は人の目を惹かずにはおかない、十人が十人、百人が百人認めるに違いない可憐な美少女。

一方で兄は、ピンと伸びた背筋と鋭い目つき以外、取り立てて言い及ぶところのない平凡な容姿をしている。

朝から兄妹喧嘩をしている状況に、周囲は困惑と嫉妬の感情が混ざつたようなドロドロな気持ちを兄妹にぶつける。

主に達也。

コツコツコツ：

深雪「！」

達也「ッ！」

兄妹喧嘩に目もくれず一人の男が通り過ぎていった。

それに引かれ兄妹も男の方を一瞬見る。

その男は、とてもガタイが良く制服ごしからでも分かる厚い胸板にはち切れんばかり

に肥大した腕。

おまけに達也をも上回る長身に男前と言つていい程に整つた顔。振り返る女子達、いや男子達もその男に釘付けになつていた。

ならばこの兄妹もそうなのか、というところという事では無かつた。ただ一人堂々と歩く男から感じ取られるオーラ：ブワツとしたような：まるで噴火する前の火山のようなオーラが男からは感じ取られた。

兄、『司波達也』は直ぐに我に帰るが妹、『司波深雪』は：

達也「何だつたんだ……………深雪？……………深雪？」

深雪「…へ？あ、はい！どうされましたか？」

達也「いや、不思議な生徒も居るものだなと思つて。」

深雪「え、ええ！そうですね。確かに、この魔法科高校ですもの。それに私達は新入生ですから様々な新しい発見があるのは当然の事ですから。」

達也「……………ああ……………そうだな。」

一旦その場は静かになり兄妹喧嘩は既に終わつていた。

兄、達也は名もしれないその男に密かに感謝をし、妹、深雪は：

深雪「…何故でしょう…何処かで見覚えが…」

達也と離れた場所、一人で呟くのだった。

――――  
当校は本当に良い整備が行われていると改めて思う。

本棟、実技棟、実験棟の三校舎。

司波達也は三人がけのベンチに腰を落ち着け、携帯端末を開いてお気に入りの書籍サイトをアクセスしながらそう思う。この中庭は準備棟から講堂へ通じる近道のようなだ。

在校生が達也の前を少し距離をとって横切っていく。

彼ら、彼女たちの左胸には一様に、八枚花弁のエンブレム。通り過ぎていったその背中から、無邪気な悪意が溢れる

「あの子、”ウイード”じゃない？」

「こんなに早くから……補欠なのに張り切っちゃって。」

「所詮、スベアなのにな。」

聞きたくもない会話が達也の耳に流れる。

”ウイード”とは、二科生徒を指す言葉だ。

左胸に八枚花弁を持つ生徒、一科生をそのエンブレムの意匠から、”ブルーム”と呼ばれる。

その逆である”ウイード”は『花の咲かない雑草』と比喻している。

結局、才能を持った者が上に立ち、そうでない者達は下に居る存在だ。

良く『平等』という言葉を聞く事があるが世の中そんな甘くは無い。

達也（…余計なお世話だ…）

苛立ちすら覚ええないものの、あまり良く思わないという気持ちをしまい書籍データへと意識を向けた。

??? 「…」スツ…

あれからかなり時間が経ち、開いていた端末に時計が表示されると入学式まであと三十分。

達也（熱中しすぎたか…気づかなかったな。）

書籍サイトからログアウトし、端末を閉じてベンチから立とうとしたちようどその時、頭上から声が降ってきた。

??? 「新入生ですね？開場の時間ですよ。」

まず目についたのは制服のスカート。

それから左腕に巻かれた幅広のプレスレット。

普及型より大幅に薄型化され、ファッション性も考慮された最新式のCADだ。

（ice）  
CAD | 術式補助演算機（Casting Assistant Dev

デバイス、アシスタントとも呼ばれている。

魔法を発動する為の起動式を、呪文や呪符、印契、魔法陣、魔法書などの伝統的な手芸、道具に代わり提供する現代の魔法技師に必須のツール

CADが無ければ魔法を発動出来ないというわけでは無いが、魔法発動を飛躍的に高速化したCADを使わない魔法技師は皆無に等しい。

達也の記憶によれば生徒で学内におけるCADの常時携行が認められているのは、生徒会の役員と特定の委員会のメンバーのみ。

達也「ありがとうございます。すぐに行きます。」

相手の左胸には当然のエンブレム。

胸の膨らみがあり、普通の男ならばイチコロだろうが、達也はそういう気は一切無い。???「感心ですね、スクリーン型ですか。」

達也の手で三つ折りに畳まれる携帯情報端末のフィルムスクリーンに目を遣りながらニコニコ微笑んでいる。

達也はベンチから立ち上がると相手の確認をする。

達也の身長が一七五センチに対すると相手は二十センチ程低い。

相手の瞳は曇りなく二科生徒に対しても対等に接するという無邪気な感嘆が感じられた。

??? 「当校では仮想型ディスプレイ端末の持込を認めていません。ですが、残念なことに、仮想型を使用する生徒が大勢います。でもあなたは入学前からスクリーン型を使っているんですね。」

達也 「仮想型は読書に不向きですので。」

達也はあまり素っ気ない態度でそう返す。

だが、相手はその事を気にしていない。

??? 「動画では無く読書ですか。ますます珍しいです。私も資料映像より書籍資料が好きな方だから、何だか嬉しいわね。」

達也 「…そうですね。」

??? 「あつ、申し遅れました。私は第一高校の生徒会長を務めています。『七草真由美さえくさ』です。ななくさ、と書いて、さえぐさ、と読みます。よろしくね。」

小柄ながら均整の取れたプロポーションと相まって、高校生になったばかりの男子生徒が勘違いしてもおかしくない蠱惑的な雰囲気醸し出していた。

達也（数字付きナンバース…しかも「七草」か…）

魔法師としての資質に家系が大きな意味を持つ。

この国において、魔法に優れた血を持つ者は数字を含む苗字を持つ。  
数字付きナンバースとは優れた遺伝子的素質をもつ魔法師の家系のことである。

七草家はその中でも、現在この国において最有力と見なされている二つの家のうちの  
一つだった。

そんな眩きを心の中き押し留め、何とか愛想笑いを浮かべ名乗りだす。  
達也「俺、いえ、自分は、司波達也です。」

真由美「司波達也くん…そう、あなたがあの司波くんね…」

目を大きくし驚いたあと何やら意味ありげに頷く生徒会長。

きつと新入生総代の妹、司波深雪の事であろう、と心の中でおもう。

真由美「ありがとう。それで？そちらの方は？」

達也はそちらの方と言って指した方を見ると…

達也「ツ…!!」

ただ驚くしかなかった。

最初に言っておくが達也の實力はそうとうな物だ。

それこそ七草真由美にも引けを取らないほどの。

だが、その達也自身が気がつけなかった。

確かに書籍サイトに熱中していたため気づかないのも無理は無いだろう。

それだとしても先ず気配を感じなかった事に対し、達也は驚いていた。

真由美「ご友人？」

達也「い、いえ…面識はありません。」

男はぐっすりと寝ていた。

達也は確信した。

今朝の“彼”だという事に気がついた。

筋骨隆々の体に整った顔立ち…それに誰もが見て分かるワカメヘア。腕を組んで

一人眠りに落ちていた。

真由美「そろそろ起きないと始まつちやうんだけど…」

達也「…自分が起こすので良いですよ。」

達也自身の興味なのかなんなのか分からない。

しかし、少なくとも只者では無いという事は視野に入れておきたいと思ったのか。同

じく二科生だからなのか…

真由美「そう。助かるわ。それじゃ頑張つてね。」

達也「失礼します。」

軽く会釈をすると真由美は立ち去っていった。

そしてベンチに視線を移すがそこに彼は居なかった。

達也「ッ!?!」

こんな短時間で、またも何も気がつく事は出来なかった。



だがそう遠くには行っていないなかつたため直ぐに見つける事が出来た。

眠たそうにしながら会場の方へと歩いていく彼を見ていと達也はもう既にわかつた事がある。

達也（この男：一切の隙が無い：）

もうこの頃から穏やかな生活を送れるとは思っていないなかつた。

—————

講堂に入った時何やら騒ぎが起きていた。

途中で男を見失うと、なにやら騒ぎが男の原因である事が分かつていた。

座席でどこに座ろうが指定は無いが、最前列が一科生。

最後列が二科生と別けられていた。

補欠的な扱いを受ける二科生は肩身の狭い者がほとんど。

だがそこに：お構いなく場の空気も読まぬ者が：

―おいあいつ二科生じゃねえか。なんであんなところに座ってんだよ。

―ちよつと顔が良いからつて調子乗ってんじやないの？

―しかも寝てやがる：ここを何だと思つてんだ：？

向けられる痛々しい視線にもお構いなく一人堂々とぐつすりと眠っている。

その者は言わなくても分かるだろう。

達也「あいつは…あんな所にいたのか。」

そう呟きながらもまた違った視線を彼に送る。

だが、面倒事に巻き込まれるのはごめんなので直様席につく。

講堂は未だにザワザワとしている。

男は全く起きる気配が無い、周囲も起こそうとはするが見えない壁でも貼られているかのように近づこうとはしない。

そんな時…

???「あの…違う場所に座られていますよ？」

女子が彼を起こそうとしていた。

最初こそ声だけで起こそうとしたが次第に上げていき揺さぶる等をした。

すると男はやつと目を覚ます…

男「……………違うのか…」

気だるそうな視線を送り若干不満だったのかその瞳は鋭かった。女子生徒は少しぎこちない喋り方になるがなんとか彼を注目の的から外す事が出来た。

達也（はあ…ヒヤヒヤさせるな…やはり監視が必要か？…俺達に万が一があつてはならない。…たしかにまだ素性も分からない奴だが……………俺達の生活に干渉するならばその場合…）

達也は万が一の事を考えていた。自分と深雪に害を及ぼす様な者ならば即刻始末しようと考えていた。

普段の達也ならばそんな事は考えはしなかった。

だが、彼に対して…あの男に対しては異常なまでの警戒心を抱いていた。

??? 「あの、お隣は空いていますか？」

達也 「ッ！…どうぞ。」

まだ空席は少ないのになぜ見知らぬ生徒の横に座りたがるのか、訝しむ気持ちともう一つ。

まるで銃弾に貫かれたかのように心臓が一瞬止まる。

相手は細身の体型をした少女…ともう一人。

注目的になつていた、先程自身が警戒心を剥き出しにしていた当の男。

近くに来るだけでこんなにも大きさが違うのか、と生唾を呑む。

しかし、これは好機。少しの間だけでもこの男に対して自分は好奇心を抱いているのだと驚く。

ほんの少しで良い、なにか情報が知りたい。それが危険なものであろうとそうでも無かろうと。

ありがとうございます、と少女は頭を下げ、腰掛けると男は既に腰掛けていた。

男に話を切り出そうとしていたがその横に次々と三人の少女が腰を下ろす。

??? 「あの。」

達也はなるほど、男以外は友人なのであろう。という思考に少し遅れるが相手が話か  
けてきていたことに気がつく。

??? 「私、『柴田美月』って言います、よろしくおねがいます。」

突然の自己紹介に驚くが直ぐに自分を名乗る事にした、

達也「司波達也です。こちらこそよろしく。」

なるべく柔らかな表情を浮かべ自己紹介をする。

彼女がメガネを掛けていた事に珍しいと思えた。

二十一世紀中葉から視力矯正治療が普及した結果、この国で近視という病は過去のも  
のとなりつつある。

達也（靈子放射光過敏症か…）

少し意識を向けただけで、レンズに度が入っていないことがわかる。

『靈子放射光過敏症』とは見えすぎ病とも呼ばれている。

「体質」のことで、意図せずに靈子放射光が見えるという事だ。

一種の知覚制御不全病だ。

靈子と、ブシオンサイオン、サイオン想子。どちらも「超心理現象」魔法もこれに含まれる、において観測される粒

子で、物質を構成しているフェルミオン（フェルミ粒子）には該当せず、物質間に相互作用をもたらすボソン（ボース粒子）とも異なる非物理的存在だ。

想子サイオンは意思や思考を形にする粒子、フシオン霊子は意思や思考を産み出す情動を形作っている粒子と考えられている。

通常、魔法に用いられるのは想子の方で、現代魔法の技術体系は想子の制御に力点が置かれている。

魔法師はまず、想子を操作する技能から覚える。

ところが霊子放射光過敏症者は、先天的に霊子放射光：霊子の活動によって生じる非物理的な光に過敏な反応を示してしまう。

霊子放射光は、それを見ている者こ情動に影響を及ぼす。

それ故に霊子は情動を形成する粒子である、という仮説が立てられているわけだが、その為に精神の均衡を崩しやすい傾向にある。

これを予防する為の手立ては根本的に霊子感受性をコントロールすることだがそれが出来ない者には『オーラ カット コーティング レンズ』と呼ばれる特殊なレンズを使ったメガネを使用する事が心掛けられている。

??? 「あたしは『千葉エリカ』。よろしくね、司波くん。」

達也「こちらこそ。」

ショートトの髪型や明るい髪色、ハッキリとした目鼻立ちが、活発的と思わせる。

エリカ「うん。…んで？その寝ている人は？」

二人はえっ？と首を傾げると男は寝ていた。

美月に關してはあまり良く知らないが、達也に關しては、

「( )いつ…また寝ているのか…」と、内心呆れてはいる。

美月「いや、それが良く分からなくて。」

達也「自分も。…特に知った事は…」

エリカ「へえ。こんな所で寝れるなんて凄い度胸してるわね。周りなんか騒ぎすぎてうるさいっていうのに。」

男「…」

三人が間近で話しているにも関わらず起きる気配が全く無い。よつほど眠たかったのか…と三人は同じ顔をして思う。

達也（それにしても千葉ね…また数字付きか？あの千葉家に「エリカ」という名前の娘はいなかったと思うが、傍系という可能性もあるしな…）

彼がそんなことを考えている傍らで、二人の笑声が放たれたが、周りから白い目を向けられる程ではない。

エリカの向こう側に座っている残り二人の自己紹介が終わる。そこから達也はもつ

と好奇心を満たしたくなつたのか色々と言つてみる事にした。特にこれといって面白いものなどは無かつたが、悪いものでは無かつた。

しかし未だに男が起きる気配は無い。

深雪の答辞は、予想した通り見事なものだつた。

「皆等しく」「一丸となつて」「魔法以外にも」「総合的に」かなり際どいワードが多々盛り込まれていたが、深雪自身の美貌でそれを打ち消している。明日からは深雪の周りが騒がしいだろう。

すぐにでも妹を労つてやりたいところだが、式の終了に続いてIDカードの交付がある。

エリカ「司波君何組？」

達也「E組だ。」

エリカ「やたつ！同じクラスね。」

何が嬉しいのか良く分からないが、それでいいなら別にいいだろう。オーバーリアクション過ぎると思うが。

美月「私も同じクラスです。」

美月も同じ組のようだ。

エリカの様には言わないが同じ顔をしているため、嬉しいのだろう。

残る女子二人は別々のクラスだったためテンションは低かった。だが、達也はそんな事はどうでもいい。

達也が知りたいのは深雪のクラス、そして…そちらよりも好奇心が抑えられないあの男のクラスだ。

達也（少し目を離せば居なくなるのか…見た目こそ目立つ方だと思うが…意図を読まれて無ければいいが…）

エリカ「どうする？あたしらもホームルームへ行つてみる？」

エリカが達也の顔を見上げてそう訊ねた。美月へ訊ねなかったのは彼女も達也の顔を見上げているからだろう。

達也は男を追おうとする意識が高かったためエリカの声が聞こえていなかった。

エリカ「ちよつと、聞いている？」

ジト目で訊ねるエリカに意識を戻されると、妹と待ちあわせをしていると伝える。そこで深雪の事についてある程度話す事にした。双子では無いこと。新入生総代である事。

深雪「お兄様、お待たせしました。」



講堂の出口に近い隅っこで話をしていた達也の背後から、深雪の声が聞こえた。人垣に囲まれていたが抜け出して来たのだ。

達也「早かったね。」

と応えた、つもりだったが、言葉は予定通りでもイントネーションが疑問形になってしまった。

真由美「こんにちは、司波くん。また会いましたね。」

ここでまた生徒会長の七草真由美と出会う。

相変わらず微笑みは崩さず、その分注目を浴びる。

それがポーカーフェイスなのかどうかは分からない。

深雪「お兄様、その方たちは…?」

達也「こちらが柴田美月さん。そしてこちらが千葉エリカさん。同じクラスなんだ。」

深雪「そうですか：早速、クラスメイトとデートですか?」

可愛らしく首を傾げ、含むところなんてまるでありませんよ、という表情で深雪が問いを重ねる。唇には淑女の微笑み。

達也「そんな訳ないだろ、深雪。お前を待っている間、話をしていただけだって。そういう言い方は二人に対して失礼だよ。」

深雪「そうですか。はじめまして、柴田さん、千葉さん。司波深雪です。私も新入生

ですので、お兄様同様、よろしくお願いしますね。」

美月「柴田美月です。こちらこそよろしくおねがいます。」

エリカ「よろしく。あたしのことはエリカでいいわ。貴女のことも深雪って呼ばせてもらっていい？」

深雪「ええ、どうぞ。苗字では、お兄様と区別がつきにくいですものね。」

そこから三人は達也が思っていたよりも意気投合しており、妹の深雪に友達が増える事については嬉しいと思つている。そこまで気に掛ける必要は無いのかもしれないが、一応のためだ。

深雪は生徒会の者達とも関係を持ち、挨拶だけであつたが流石は総代なだけはあるだろう。

コツコツコツ…

達也と深雪は一斉に同じ方向へ振り返る。

今朝と同じ感覚…二人の肌に寒気が走る。

相変わらずエリカと美月は二人して仲良く話している。

真由美は生徒会の者と話しているようだ、真由美の後ろに居る男が先程から自分と深

雪を見ており、深雪に対しては良い印象かもしれないが、自分に対しては良いものではないだろう：

だが、そんな事はどうでも良い。

この気配は間違いなく例の男である事以外考えられない。

殺気なんかでは無い、だがそれに似たようなものである。

二人はキョロキョロと辺りを見渡しているが見つからない

達也（今確かに居た筈だ：こんな人混みの中では探しにくいか……クソっ……自分自身へと向けられる視線が邪魔だ。）

自分に向けられる視線は悪意に零れるもの：きつと生徒会の者とも接し、自身の妹深雪とも接している事が原因だろう。だが、それはどうでも良い。邪魔にしかならない。

達也「：気の所為なのか……？」

エリカ「あれ？深雪何処行った？」

美月「そういえば少し目を離れた隙に……」

達也「ッ!？」

達也は冷や汗をかく：それと同時に後悔をする。

自分があの男の事を察知しようとしすぎたせいで深雪が居なくなつたのだ。

きつと深雪も奴について気づいている：ならば。

真由美「深雪さんならあちらに行つたわよ？」

達也「ッ!…すみません。失礼します!」

少し急ぎながら…早足で向かう事にした。

あの男は危険だ…本能がそう伝えている。

エリカ「つて、ちよ…!何処行くの!?!」

美月「早…!」

人混みを掻き分け一心不乱に走り出す。

まだそう遠くはない筈だ…視線が痛い…

だが、関係無い。

エリカ「はっやっ…」

美月「行つちやいましたね…」

真由美（あら…もう少しお話したかったんだけどな。…それにしても深雪さんは

何かを感じ取つたのかしら…司波くんもなんだけど…そういえば深雪さんが追

かけていった人つて…

入学試験、どちらも最下位の子じゃない。

地図がある訳ではありませんが私には分かります。

周りからも視線を浴びますがそんな事はどうでも良い事です。あの人さえ…あの人と話す事さえ出来れば…

自分でも何故かは分かりません。

あの人に何を感じているのか…恋でも無ければ懐かしの友人という訳でもありません。

でも、似てるんです…夢の中の王子様に！

深雪「はあ…はあ…：…：…：いた！」

後ろ姿なのにこちらを見られているような感覚がしてとても不気味だった。

でも、それは嫌な気では無かった。

その人の周りにはオーラが出ているような…

深雪「あ、あの！」

声をかけるとこちらを睨むようにして目を向ける。

その瞳には、何か言葉では表せない者が宿っていました。やがてこちらを振り返ると私は息が詰まったような感覚に陥る……

深雪「え……あ、そ……の……」

ただこちらを見ているだけなのに……まるで蛇に睨まれた蛙のように体が動かない。

私はこの日、これ以上にならない恐怖を浴びたかもしれない。

振り絞った私の言葉はとても良いように表せない……

深雪「な、名前ッ……！お名前をッ……！」

聞きたい事はあるのに咄嗟の言葉でしか無かった。

支配されているような状況なのに、まだ会って間もないのに敬意を抱いていた。

やがてゆっくりと男は口を開いた……

十鬼蛇 王馬。

深雪「トキ…タ…オウ…マ…さん…」

トキダオウマ  
十鬼蛇王馬「…？」

逢魔が時「…？…名前まで凄い…」

王馬「…？…で？」

深雪「へ…？」

王馬「アンタは？」

突然の事で次の事を考えていなかった。

まさか質問をされるとは…でも、最初に質問をしたのは私…当然の事だと思う。

深雪「…私の…名前…です…か…？」

王馬「…」

深雪「…や…その…」ハアハア…」

深雪「…深雪ですッ！…司波深雪といえますッ！」

少し声が大きかったかもしれない…でもそれほどに言葉をひねり出すのが難しくくて

…仕方ない…

王馬「シバミユキ…だな…わかった。」





きっと男の意識が解除されたのだろう。

王馬「そりゃあ残念だ。」

やがて背中が小さくなっていく。

去り際の彼はとても虚しいような顔をして、期待に応えれなかった自分が悔しい……でも期待に応えていても……

この出会いが、私達の物語を大きく揺るがすのかもしれない。十鬼蛇王馬……さん……夢の中に出てくる王子様に酷似している男性……

達也「ここにいたのか……深雪。」

深雪「……は……へ……？お兄様？」

達也「突然居なくなるから驚いたぞ。あまりヒヤヒヤさせないでくれ。」

深雪「あ……はい。申し訳ありません。」

達也「さあ……帰ろう。」

深雪「……はい。」

司波達也に司波深雪…そして謎の男、十鬼蛇王馬…  
この出会いが彼等を狂わせる。

王馬「シバミュキ…にもうひとり居たな…」  
この男、一体…？

## 第2話 下校

高校生活の二日目、司波兄妹の朝は早い。

起きるのもそうだが、行動力。

深雪はローラーブレードで、達也は自慢の体力で魔法を使いながら60km並の速度で移動するなり着いた場所は「寺」。

だが、そこに集う者たちの面構えは「僧侶」や「和尚」、

あるいは「(小)坊主」にさえ、到底見えない。

そこで達也は中学一年生の頃から体術の稽古を受けていた。

もちろん一人で行うものではない。

最初は一人ずつの掛かり稽古だったのが、今では中級以下の門人約二十人による総掛かり。

達也はこう見えてある程度の体術は得意であった。

深雪によると敵う者は居ないらしい。

そして達也に体術を教える「師」でもあるこの男。

実年齢はともかく見た目と雰囲気は、まだそれほど老いていない。きれいに髪を剃り

あげ細身の身体に悪戯が好きそうな顔をしている、名を『九重八雲』と言う。

自称で言うには「忍び」と言うが、一般的な呼称は「忍術使い」。身体的な技能が優れているだけの前近代こ謀報員とは一線を画する、古い魔法を伝える者の一人だった。

達也の朝稽古が終わり三人は深雪の持参していた朝食を摂る事になっていた。

達也「師匠。折り入って話があります。」

八雲「うん？珍しいね。君がそこまでかしまった態度をとるだなんて。なんだい？聞かせてご覧？もしかして深雪ちゃんが関係するのかい？大丈夫！深雪ちゃんの身の安全は僕が守るッ！」

達也「普段の俺はどんな態度なんですか。それと深雪に関係するものですがそこまでしなくて大丈夫です。興奮しないでください。」

一瞬、達也の中には怒気が感じられ八雲は「失敬、失敬」と軽いノリで反省を促していた。

達也「入学して気になる生徒が。」

八雲「えっ!?あの達也くんが!?伝説のシスコンが!?気になる生徒だって!？」

達也「いい加減話を進めさせてください。」

またも達也の中に怒気が入り混じり八雲は今度こそ反省したのか少し大袈裟に反省する態度を見せる。

そしてここで本題に入るのだが：

深雪「お兄様、それについては私の方からお伝えさせていただきます。」

深雪本人が話を持ち出すことにした。

そして八雲が茶を一口啜り本題に入る。

深雪「はい。先程お兄様が述べた通り少し気になる生徒が居まして：『トキタオウマ』

という人物はご存知でしょうか？」

八雲は深雪の話を聞くとときもところどころ茶を啜り、たまに湯呑を揺らしたり中の茶を楽しんでいた。

八雲「トキタオウマ：ねえ：ふうん。」

二人は八雲の顔に穴が空くほど見つめ、それに対して八雲は気にしていなかった。：が、少し眉が歪んでいた。

八雲「名前だけ聞いてみても分からないなあ：字は分かるかい？それなら近づけるかもしれないから。」

深雪「すみません。流石にそこまでは分かりません。」

八雲「あちやく：そつか。まあ、本当に困った時は頼んでおいで、それ以前に達也君が解決するだろうけど。」

達也「なるべくそうさせていただくおつもりです。」

八雲「あ、やつぱりそうなんだ。」

二人は朝食を済ませたあとと通学するため達也は着替、八雲に軽く会釈をして門をくぐり抜けていく。

深雪も軽く会釈をし、兄、達也と同じく通学する。

八雲（いや、それにしてもあの二人も高校生かあ……僕も爺さんになつちやうなく。こんなナリだけど。）

去つていく二人の背を見ながら懐かしく思う。

中学一年生の頃に達也が来て、早3年。短いようだがとても長く。達也の日々の腕のこなしは達人の才の如く上達していった。今では八雲のほうが少ないかもしれないが、もうじきすれば達也は余裕で八雲を越えるだろう。

八雲（トキタオウマかあ……結構カツコいい名前だなく、じゃなくて……うくん……思い当たらないなあ……）

二人の言うトキタオウマという人物について首を傾げる。

司波兄妹が注意？する謎の人物。確かに入学したたなので謎は多い訳なのだが、どうにも腑に落ちない。

八雲（トキタ……トキタ……いや、まさか……そんなはずがあるわけ無いか……

あの区域の人間が高校に入れるなんて…無いよね

九重八雲の推理は如何に…？

登校したばかりの一年E組の教室は雑然とした雰囲気にも包まれていた。多分、他の教室も似たようなものだろう。

エリカ「オハヨ〜」

声の主は相変わらず陽気な活力に満ちたエリカだった。

美月「おはようございます。」

その隣では、美月が控えめながら打ち解けた笑みを向けてきている。すっかり仲が良くなったようで、エリカは美月の机に浅く腰掛けているような格好で手を振っている。

シバとシバタ、偶然というより五十音順という要因が働いたのだろうか、達也の席は、美月の隣だった。

達也「また隣だが、よろしくな。」

美月「こちらこそ、よろしくおねがいます。」

達也の言葉に美月が笑みを返す。と、その隣でエリカが不満そうな顔をしていた。……多分、わざとだが。

エリカ「何だか仲間はずれ？」

声もどこか、からかっているような響きがある。

達也「千葉さんを仲間はずれにするのはとても難しそうだ。」

エリカ「……………どういう意味かな？」

達也「社交性に富んでいるって意味だよ。」

エリカ「…司波くんって、実は性格悪いでしょ。」

こらえ切れずに美月が笑いをこぼしているのを横目に、達也は端末にIDカードをセツトし、インフォメーションのチェックを始めた。

達也「……………別に見られても困りはしないが。」

「あつ？ああ、すまん。珍しいもんで見入っちゃった。」

達也が話している生徒は男性であり、それなりに体格は良いような気はする。長身で



いかにもスポーツ得意としたような爽やかな感じがする。

彼の名は『西城レオンハルト』。父親がハーフで、母親がクォーター。外見は純日本風だが名前は洋風。

得意な術式は収束系の硬化魔法、志望コースは身体を動かす系、警察等の機動隊、山岳警備隊。

レオ「レオでいいぜ。」

達也「司波達也だ。俺のことも達也でいい。」

二人で得意な分野は、など談笑を交えながらお互いの事を探っていく。…と、横からやりを入れてくる者が一人。

エリカ「え、なになに？司波くん魔工師志望なの？」

レオ「達也、コイツ、誰？」

エリカ「うわっ、いきなりコイツ呼びわり？しかも指差し？失礼なヤツ、失礼なヤツ！失礼な奴っ！モテない男はこれだから。」

レオ「なっ!?!失礼なのはテメーだろうがよ！少しくらいツラがいいからって、調子こいてんじゃねーぞっ！」

エリカ「ルックスは大事ななのよ？だらしなさとワイルドを取り違えているむさ男には分からないかもしれないけど。それになく、その時代を一世紀間違えたみたいなスラ

ングは。今時そんなの流行らないわよ」

レオ「なっ、なっ、なっ……」

とりすました嘲笑を浮かべて斜に見下ろすエリカと、絶句が今にも唸り声へと移行しそうなレオ。

達也はそれを見ながら「意外に合うかもしれないな。」と心の中でつぶやく。

エリカ「ほんつとうむさ苦しいわ。達也くんやあの人を見習ってご覧なさい？」

エリカが指す方向を見ると達也は驚く。

居るじゃないか……彼が。

今朝、相談していた内容の人物が……

達也「……トキタ……オウマ……」

エリカ「あれ？『トキタオウマ』くんって言うんだ。へえ、それにしても良い顔してると思わない？男っていうのはああやって寡黙な方がモテるって言うのにな」

レオ「~~~~~ツ!!」

美月「……エリカちゃん、もう止めて。少し言い過ぎよ。」

二人を制止する美月の横に目を見開きながら彼を見つめる達也。まさか、同じクラスだとは思ひもしなかつただろう。昨日、深雪が彼に近づき、名前を聞き出した。

それと同時に人間とは思えない程のプレッシャーを感じた。と、深雪が言っていた。

そんな彼は今眠っている。

こんな騒がしくなってきた教室で一人熟睡出来るのは流石だな……と思いながらまた前を向く。

次第に予冷が鳴り、皆々が蜘蛛の子を散らすように席二着く。

王馬（……………あいつは昨日の…）

深淵を覗く時、深淵もまたコチラを覗いている。

—————

達也はカウンセラーの『小野遥』について頭を抱えながら、一人 考えの海に浸っていた。

…が、レオの一声で現実に戻される。

内容はこの後についてだ。

教室で食事をする、という習慣は、今の中学、高校にはない。耐水、耐塵性が向上したとはいえ、情報端末は精密機器だ。うっかり汁物でもこぼさうものなら、結構悲惨な羽目に陥らないとも限らない。

食堂へ行くか、中庭とか屋上とか部室とか、何処か適当な場所を見つけるか。

そして食堂が開くまで、まだ一時間以上ある。

達也「……………」

ターゲットの彼の席を見るともぬけの殻。

既に居なくなっていた。

まあ、彼が何処に行こうが勝手だが出来るだけ距離を詰めておきたい。それは決して良い意味では無いが。

達也「ここで資料の目録を眺めているつもりだったんだが…OK、付き合うよ。」

楽しそうに輝いていた目が達也のセリフで落胆に曇る。

実に分かりやすいレオの表情に、達也は苦笑していた。

入学して二日目、早くも行動を共にするメンバーが固まりつつあった。皆、自分とは違つて明るく前向きな性格で十中八九のアタリだった。しかし完璧なものでは無いが…

達也「謝つたりするなよ、深雪。一厘一毛たりとも、お前の所為じゃないんだから。」

深雪「はい、しかし…止めますか?」

達也「……………逆効果だろうなあ。」

深雪「…そうですね。それにしてもエリカはともかく、美月があんな性格とは…予想

外でした。」

達也「：同感だ。」

一歩引いた所から眺める兄妹の視線の先には、二手に分かれて一触即発の雰囲気で見合う新入生の一団がいた。

その片方は深雪のクラスメイト、もう一方の構成メンバーは、言うまでもなく、美月、エリカ、レオだった。

昼食時の食堂、何も知らぬ新入生が勝手知らずという事情から、この時期は例年混雑する。

だが見学を切り上げ食堂に來た達也たち四人は、それほど苦勞することも無く四人がけのテーブルを確保した。

半分ほど食べ終わった頃、男子女子両方のクラスメイトに囲まれて食堂に到着した深雪が、達也を見つけて急ぎ足で寄ってきた。

そこで一悶着あった。

達也と一緒に食べようとする深雪、クラスメイトの交流を拒むような偏屈な性格ではないが、深雪にとって最優先すべき相手は達也だった。

このテーブルに座れるのはあと一人。クラスメイトと達也とどっちを選ぶか、深雪は考えることすらしなかった。

しかし、深雪のクラスメイト、特に男子生徒は、当然、彼女と相席を狙っていた。

最初は狭いとか邪魔しちや悪いとかそれなりにオブラートに包んだ表現だったが、深雪の執着が意外に強いと見るや、二科生と相對するのは相応しくないだの一科と二科のけじめだの、果ては食べ終わっていたレオに席を空けるだの言い出す始末。

身勝手に傲慢な一科生の言い種にレオとエリカはそろそろ爆発しかけていた。達也は急いで食べ終わると、レオに声を掛けまだ食べている最中のエリカと美月に断りを入れて席を立った。深雪は達也たち四人に目で謝罪して、片側が空いたテーブルには座らず、達也と逆方向へ歩み去った。

王馬（……………肉はどこにあるんだ…？）

深雪「！」

深雪が王馬を見つけるが、クラスメイトの男子と女子に質問攻めであったり、一科は一科で居るべきだ、などと理想論を述べて声を掛ける暇も無かった。その時深雪の周りが少し寒かったとか何とか…

そして次に午後の専門課程見学中の出来事だった。

通称「射撃場」と呼ばれる遠隔魔法用実習室では、3年A組の実技が行われていた。

生徒会長、七草真由美の所属するクラスだ。

生徒会は必ずしも成績で選ばれるものではないが、今期の生徒会長は遠隔精密魔法の

分野で十年に一人の英才と呼ばれ、それを裏付けるように数多くのトロフィーを第一高校にもたらしていた。

その噂は新入生も耳にしている。そして噂以上にコケティッシュだった容姿も、入学式で見ている。

彼女の実技を見ようと、大勢の新入生が射撃場に詰め掛けたが、見学できる人数は限られている。こうなると、一科生に二科生が多い中で、達也たちは堂々と最前列に陣取ったのだった。当然のように、悪目立ちした。

王馬（なんでこいつらこんなに並んでんだ……？）

そして現在、美月が啖呵を切っている最中だった。

美月「いい加減に諦めたらどうなんですか？ 深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挿むことじゃないでしょう！」

相手は一年A組の生徒。昼休みに食堂で見た面子だ。

つまりどういう状況かという、放課後、深雪を待っていた達也に、深雪にくつついて来たクラスメイトが難癖を付けたというのが発端だ。ちなみにそのクラスメイトは女子。男子生徒はさすがに周囲の（あるいは深雪の）目が気になったなか最初の内は黙っていたが、既にそんな遠慮、あるいは良識はこの場から立ち去っていた。

美月「別に深雪さんはあなたたちを邪魔者扱いなんてしていないじゃないですか。一緒に帰りましたかったら、ついてくればいいんです。何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか！」

達也「引き裂くとか言われてもなあ……」

深雪「美月は何を勘違いしているのでしょうか……」

司波兄妹は美月の言う二人の仲について少し困惑する。

別にただの兄妹関係であり、それ以上でもそれ以下でもない。健全な関係だ。

「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」

深雪のクラスメイト、その一。

「そうよ……司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらおうだけなんだから……」

深雪のクラスメイト、女子生徒その二。

彼らの勝手な言い分をレオは威勢良く笑い飛ばした。

レオ「ハン！そういうのは自活（自治活動）中にやれよ。ちゃんと時間がとつてあるだろうが。」

エリカも皮肉成分たっぷり笑顔と口調で言い返す。

エリカ「相談だつたら予め本人の同意をとつてからにしたら？ 深雪の意思を無視して相談も何もあつたもんじゃないの。それがルールなの。高校生にもなつて、そんなこと



も知らないの?」

相手を怒らせることが目的のようなエリカのセリフと態度に、注文通り、男子生徒その一が切れた。

「うるさい!他のクラス、ましてやウイードごときが僕たちブルームに口出しするな!」差別的ニュアンスである「ウイード」といつ単語の使用は校則で禁止されている。半ば以上有名無実化しているルールだが、それでもこれだけ多くの耳目を集めている状況で使用される言葉ではない。

この暴言に真正面から反応したのは意外であった美月だった。

美月「同じ新入生じゃないですか!あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですかっ!」

達也「…あらら。」

まずいことになった、という思考が達也の口から短い呟きとなって漏れた。  
「…どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ。」

美月の主張は校内のルールに沿った正当なものだが、同時に、ある意味でこの学校のシステムを否定するものだ。

レオ「ハッ、おもしれえ!是非とも教えてもらおうじゃねえか。」

一科生の威嚇に対しレオは挑戦的な態度をとる。

「だったら教えてやる！」

学校内でCADの携行が認められている生徒は生徒会の役員と一部の委員のみ。

学外における魔法の使用は、法令で細かく規制されている。だが、CADの所持が校内で制限されているわけではない。CADは今や魔法師の必携ツールだが、魔法の行使に必要不可欠、ではない。CADが無くても魔法は使える。だから、CADの所持そのものを、法令は禁じていない。

故に、CADを所持している生徒は、授業開始前に事務室へ預け、下校時に返却を受ける、という手続きになっている。またそれ故に、下校途中である生徒がCADを持っているのは、別におかしなことではない。

達也「特化型っ？」

だが、それが同じ生徒に向けられるとなれば、非常事態だ。向けられたCADが、攻撃力重視の特化型なら尚のことだ。

深雪「お兄様！」

深雪が達也に対してこの場を収めてほしいように言葉を上げる。それを目で感じ取った達也は右手を付きだそうとしたが：

王馬「楽しそうな事やってるねえ：俺も混ぜてくれよ。」

その場の誰もが彼の声に反応した。

先程までレオは銃口を突きつけられていたが、即座に声の主の方向を見る。

達也は驚く、よりにもよってこの場でこの男が現れる事に。深雪は驚きと少しの希望を抱いていた。もしかしたら収めてくれるんじゃないかって。

王馬「お、シバミユキじゃん。」

深雪「王馬さん。」

エリカは伸縮性の警棒を出そうとしていたが、彼の声によって懐に戻す。

「な、なんだお前は?!いきなり出てきて司波さんと話てんじゃねえよ!」

そうだそうだと、言わんばかりに外野からヤジが飛ぶがそんな事お構いなしに彼は知らんふりをする、深雪の顔を見る。

王馬「知ってるのか?」

深雪「え…え、ええまあ…」

エリカ「知ってるっていうか、あたし達二科生と一科生の違いがあーだこーだ〜!と  
か言ってるよ!」

王馬「ふん…」

エリカの発言に対し、特に興味の素振りすら見せない王馬。関心が無いのか、どうでも良いのか。

「邪魔するならお前に見せてやるよ！一科と二科の違いをなっ！」

今度は王馬に対して銃口が向けられる。

それに対して一同はまたピリツした空気になる。

今度はレオよりも近い距離、一メートルも無いくらいの距離で先ず避けきるのは不可能だろう。

達也はジツと観察するような眼差しを送るが、深雪は焦っている。まさか巻き込んでしまったんじゃないかと思うと、額に汗が落ちる。

だが、そんな心配も杞憂に終わる…

何故なら…

ガンツ！

「ヒッ！」

先ず攻撃などさせないからだ。

特化型のデバイスは宙を舞う、良く見ると元の綺麗だった形が一瞬にして脆く、ボロボロに成り果てていた。

そう、男はCADを蹴り上げたのだ。

これには一同も驚く。

達也「ッ!？」

達也（あんな距離で蹴り上げた!?!それに一撃でボロボロに……あの距離で迷いなく蹴り上げるだ……あいつ、相当な腕前だな……）

普通CADを向けられると湧いてくる感情はなにか、答えは恐怖と焦りだ。達也からするとそんな事はないかもしれないが、普通の者なら確実に怯む。

だが、男は一切の迷い無く、しかも余裕の表情でノールックで蹴り上げたのだ。

深雪「…え、ええ!？」

驚いてあたり前か、普通そんな強引に対処するものでは無いからな。

このおかげで周りの一科生は彼から少しづつ距離を空けていく。CADを構えていた生徒も腰から崩れ落ちれ、ジリジリと後ろに引き下がっていく。

王馬「…で、どうすんだい?」

王馬の視線は後ろに居る一科生達に向けられる、全員ポカンとした顔になり、一瞬理解出来なかった。

アンタ等も鬨るのかい？

全員「!？」

深雪はこれに対して二度目だったか、殺気に似たような感覚に陥る。これに対して達也ですら頬に汗が伝っている。

美月はこの圧迫感に耐えられなかったのか尻餅をついて、目尻に涙を浮かべていた。

一科生達は顔を横にブンブンつと音が出そうなくらいに振る。

王馬「……そうかい。」

男はまた残念な気持ちになった。

「止めなさい！自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行為ですよ！」

その後、生徒会長の七草真由美と風紀委員長である『渡辺摩利』という三年生が駆けつけてきた。

早速、一のAと一のEは事情聴取を受けることになってしまった。これには一言言葉

なく硬直している。

王馬「∴」

彼一人を除いて。

傲然と虚勢に胸を張ることもなく、悄然と萎縮し項垂れることもなく、達也は泰然とした足取りで、摩利の前へ歩み出た。

達也「すみません、悪ふざけが過ぎました。」

摩利「悪ふざけ？」

達也「はい。森崎一門のクイツクドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったんですが、あんまり真に迫っていたもので。」

王馬にCADを蹴り壊された男子生徒が目を大きく見開いた。

摩利は視線を巡らせ、拳銃携帯のデバイスを一瞥する。

痛々しく、凹むというかえぐられているような、言葉に出来ない程に壊れていた。

摩利「ほう∴ではなぜ、このCADはここまで破損しているのか聞かせてもらおうか？」

達也は次の事に対してどう伝えようか困っていた。

彼の気が動転してCADを蹴り壊しました、と言っているのだろうか、時間にして2秒。達也の頭に思考が駆け巡る。

王馬「俺が壊しといたぜ。」

今度は摩利が王馬に対して冷たい視線を送る。

それを浴びている訳ではないがエリカはゾツとし、達也はしまった、と声に出そうになつていた。

摩利「…壊したか…そうか…何故そうする必要があつた？」

王馬「…何故…？…ハッ、そんな事に一々理由があるのかい？」

摩利「…そんな事か…つまり、お前は防衛目的では無く、故意的にやった、という訳だな？」

この状況に耐えられる者が居るだろうか。

一年生にして、ここまで三年生に突つかかつていく者など見たことは無いだろう。

深雪もアワアワとなつて焦っている、レオに関しては「おいバカっ！よせっ！」と、言つてしまつている。

美月はもう意識がシャットダウンされそうな状況だ。

真由美「摩利、もういいんじゃない？こんな所で長々としても、ねえ？」

突如真由美が割つて入る。

真由美「きつと達也くんが言つてる事は本当よ。昨日喋つた時、この人嘘つかないだろうなあつて私、思つてたから。」



一同はそんな事で、と思ったと同時に早く開放してくれ、という気持ちでごつちや混ぜになっていた。

王馬「ネエちゃん分かってんじやねえか。」

摩利「貴様！会長に対して、いや、上級生に対しての態度は何だ！」

またもや二人は噴火する前の火山のようにヒートアップしていた。皆「やめてくれよ」という顔になり、青く染まっていた。だが、達也は「ええ、その通りです。」と返す。摩利「：ハア：会長がこう仰っているんだ、今回は不問にする。以後このようなことのないようにな。」

慌てて姿勢を直し、呉越同舟ながら一斉に頭を下げる（王馬を除く）一同に見向きもせず、摩利は踵を返す、が、一步踏み出したところで足を止め、背中を向けたまま問いかけを發した。

摩利「：お前、名前はなんだ。」

首だけで振り向いた切れ長の目は、その端にいる王馬の姿を映している。

王馬「十鬼蛇王馬。」

摩利「：トキタ：王馬、か。覚えておこう。」

王馬「ああ、覚えといてくれよ。ネエちゃん達。」

達也は余計だ、と心で呟く。

王馬「ふくん…モリサキシユン、か。」

最初に手を出した、つまり達也たちに庇われた形になったA組の男子生徒が、棘のあの視線を向け、同じく棘のある口調で、達也達に向けて自己紹介をした。

王馬はカタコトになっているが、実際は『森崎駿』だ。

森崎「僕はお前を認めないぞ、司波達也。そして十鬼蛇王馬！特にお前は、だ！兄妹でも無い癖して男なのにズカズカと司波さんに言い寄って！しかも面識があるみたいじゃないか！司波さんは、僕たちと一緒にいるべきなんだ！」

王馬「シバミユキ、腹減らねえか？」

深雪「いえ、私は減っておりません。」

森崎「人の話を聞けっ!!」

まるで漫才でもしているかのような空間に一同は先程とは違って笑みが溢れる。

達也「いきなりフルネームで呼び捨てか。」

森崎「僕も」そいつ”に言われてたけどな！」

深雪「…そう言えば私も。」

三人は一斉に王馬を見るが、一人欠伸をしてどうでも良さそうだった。

王馬「…終わったか？なら帰ろうぜ。」

お前はいつの間にもこの輪の中に入ったんだと、皆が思う。

出会う方は最悪で、無愛想な様にも見えだが、意外にも気さくで積極的な方で皆、困惑する。

達也「……そ、そうだな。深雪、レオ、千葉さん、柴田さん、帰ろう。」

とにかく精神的に疲れた、という実感を共有していた二人は、どちらからともなく頷きあつて、その場を離れることにした。

行く手を遮るように、事態を悪化させかけたあのA組の女子生徒が立っていた。

王馬「てめえは？」

『光井ほのか』です。さっきは失礼なことを言つてすみませんでした。」

いきなり頭を下げられて、正直なところ、皆が面食らっていた。先程までは控え目に言つてもエリート意識を隠しきれていなかった少女のこの態度は豹変と言えた。

ほのか「庇つてくれて、ありがとうございます。森崎君はああ言いましたけど、大事にならなかつたのは十鬼蛇さん達のおかげです。」

王馬「…王馬で良い。」

ほのか「分かりました。それで、その…」

ほのかはもじもじとして王馬に対して上目遣いを使う。

普通の男ならイチコロだが、そうじゃないのがこの男。

ほのか「…駅までご一緒してもいいですか？」

恐る恐る、だが何かある種の決意を秘めた顔で、同行を請うほのか。一瞬だけ深雪の方へと向いたのは間違いない。

王馬「ああ、良いぜ。」

だからお前はいつから指揮を取るようになったんだ、と改めて思う、達也であった。

深雪「…」グツ

別に拒む理由など無いだろう、王馬にも達也にもレオにも、美月にもエリカにも………深雪は何故か、何処か決意をした様な顔になり拳を握る。

深雪（何ででしょう……このモヤツとした気持ち……別に彼に対してそんな………だつて、出会って間もないのに………でも、似ている………あの人にそっくり………）

—————

駅までの帰り道は微妙な空気だった。

メンバーは先頭に王馬、そして後々に深雪、ほのか、達也、レオ、エリカ、と、ほのかと深雪に同じくA組の女子生徒『北山雫』。

ほのか「王馬さんは向けられた時怖くなかったんですか？…それも攻撃特化型を向けられるなんて早々無いことですし…」

王馬「別に怖くなんてねえよ…あんな玩具。」

ほのか（玩具つて…）

雫（ええ…）

エリカ（流石にそれは無いでしょ…）

美月（嘘でしょ…）

レオ（どんだけ肝据わってんだ…）

達也（そういう風にしか見てない……よっぽどの自信家か。）

深雪（…）

王馬「そっぴやお前、何か出してただろ。」

達也が後ろの方にいるエリカを見る。

事実、あの時レオに銃口が向けられていた時エリカは警棒のデバイスを出そうとしていた事は本当だ。

本当ならエリカはあそこで銃型のデバイスを打ち落とそうとしていた。

だが、突然の王馬の乱入でそれは免れたというか何というか、非常識者が蹴り壊したのだが…

エリカ「すっごー！良く気づいたわね！あつそれとあたしはお前じゃなくてエリカ。千葉エリカよ。」

王馬「チバエリカつて言うのか。」

達也（あの時エリカと王馬の距離はかなり離れていたはずだ。それに現れた角度からして、まともに目視出来ないはずだが：分からねえ。）

美月「えっ？その警棒、デバイスなの？」

美月が目を丸くしたのを見て、エリカは満足げに二度、ウンウンとばかり頷いた。

エリカ「そうそう、普通の反応をくれてありがとう、美月！」

レオ「：何処にシステムを組み込んでるんだ？さっきの感じじゃ、全部空洞ってわけじゃないんだろ？」

エリカ「ブーッ。柄以外は全部空洞よ。刻印型の術式で強度を上げてるの。硬化魔法は得意分野なんでしょ？」

レオ「：術式を幾何学紋様化してら感応性の合金に刻み、サイオンを注入することで発動するってアレか？」

そんなモン使ってたなら、並みのサイオン量じゃ済まされ無いぜ？よくガス欠にならねえな？

そもそも刻印型自体、燃費が悪過ぎってんで、今じゃあんまり使わてねえ術式のはズだぜ。」

エリカ「おつ、さすが二得意分野。でも残念、もう一步ね。強度が必要になるのは、振り出しと打ち込みの瞬間だけ。その刹那を捉まえてサイオンを流してやれば、そんなに

消耗しないわ。

兜割りの原理と同じよ。……って、みんなどうしたの？」

逆に感心と呆れ顔がブレンドされた空気にさらされて、居心地悪げに訊ねたエリカ、そして特に興味の無さそうな王馬に……

深雪「エリカ……兜割りって、それこそ秘伝とか奥義とかに分類される技術だと思っただけど。単純にサイオン量が多いより、余程すごいわよ。」

全員を代表して深雪が答えた。

だがエリカの強張った顔は、彼女が本気で焦っていることを示していた。

王馬「ふくん……そんなにすげえ事なんだな。」

深雪「ふくん……王馬さんは得意分野はあるんですか？」

ほのか「た、確かに気になります！」

エリカ「あ！あたしもあたしも！そういう王馬くんはどんなCADを使うの？」

美月「汎用方ですか？特化型ですか？」

目をキラキラさせながら質問する美月は、深雪、ほのか、エリカに負け劣らないくらいにグイグイと質問していく。

すると王馬が後ろに振り返り……

この後、ここにいる誰もが驚愕するだろう……

達也でさえも目を見開く事になるだろう…  
何故なら…

王馬「使った事ねえぞ。そんなもん。」

彼はCADの携行どころか、先ず手にすらしていなかったのだから…

深雪「…え。」

ほのか「…え？」

エリカ「…は？」

美月「…ふあ？」

雫「…嘘…」

レオ「はあ？」

達也「!？」





## 第3話 理由

第一高校が利用する駅の名前は「第一高校前」。

駅から学校まではほぼ一本道だ。

途中で同じ電車に乗り合う、ということとは、電車の形態が変わったことにより無くなってしまったが、駅から学校までの通学路で友達と一緒にいる、というイベントは、この学校に関して言えば頻繁に生じる。

入学二日目の昨日もそういう事例を数多く見たし、今朝も先程から、そういう実例を何度も目に見ている。

…だが、それでも今は腑に落ちない事がある。

王馬『使ったことねえぞ。そんなもん。』

十鬼蛇王馬：今年の新入生、そして同じくE組のクラスメイトだ。入学二日目、問題を起こしかけた張本人でもある。まあ、あれに関しては周りも悪かったと思うが、彼自身で上級生に、生徒会メンバーにも挑戦的な態度を取っていた。…そして『CAD』を携行どころか、手にすらしなかった事が無いという…

美月「今まで扱った事が無く、魔法科高校に入学出来るなんて…それに、マトモに

魔法は使えるのでしょいか？」

達也「それは自分にも分からない。真実を知るのはあいつのみ、だ。」

レオ「しつかしよお、変わった奴も居るもんだぜ。あいつCADに興味無えって言うしよお。」

エリカ「まあでも良いんじゃない？本人がそれで良いなら。あたしは別にとやかくは言わないかな。」

レオ「お？何だお前？あいつ自身の意見を尊重するって事はあいつに気があんのか？」

エリカ「ハア!?バカなの!?確かに顔は良いからってほとんど初対面の男に揺さぶられるほどあたしは甘くないっての!!」

達也（またか…）

美月（飽きないですね…）

レオとエリカはいつもどおりの漫才をやっている。

朝からこんな展開に、達也はややテンションが下がっていた。それは美月も同様だ。

深雪「…」

達也「…」

昨日からずっとこうだ。最近のところ深雪の歯切れが悪い。何を話そうにも何処か



それもこいつのせいだ……せめて朝だけは清々しい気持ちになりたかったが、朝から焼肉をしている気分だ……

ムカムカするような……胃が気持ち悪い……

六人で校門までのそれ程長くない道をのんびりと歩んでいると背後から声が聞こえてくる。

真由美「達也くん。」

活気的な呼び声と共に、軽やかに駆けてくる小柄な人影が迫ってくる。今日も波乱の一日になるに違いない……

真由美「おはよう、達也くんに王馬くん、深雪さんもおはようございます。」

深雪に比べて随分扱いがぞんざいだ、と達也は感じたが、相手は三年生で生徒会長だ。

達也「おはようございます、会長。」

深雪「おはようございます。」

達也に続き、深雪も頭を下げる。

王馬「よう。昨日ぶりだな。」

この男は下げる頭なんてものを知らないため大きく出る。

本人は何とも思っていない懐の深い人物なので、特に気にして無さそうだった。だが、深雪は王馬に対して小声で注意する。

深雪「ちよつと！王馬さん！相手は生徒会長なんですから頭くらい下げたらどうなんですか！」

王馬「あ？やだよ。その”セートカイチョー”ってのが何なのか知らねえけど頭下げるなんてまっぴらごめんだね。」

深雪「ちよつと！」

真由美「大丈夫ですよ。そんなに気にしていませんので。（えっ？生徒会長を知らないって言ったの？どういう事？）」

王馬「らしいぜ？シバミユキ。」

深雪「…もう。（…そう言えば生徒会長を知らないとは…）」

王馬「で？あんたは今、一人なのかい？周りにうじゃうじゃと居ねえみてえだけど。」  
達也は見れば分かるだろう、と心の中で突っ込む。

その発言だとこのまま一緒に来るのか？と、言っているようなものだ。なるべくそれは避けたい。別に深い理由があるわけでは無いが、単純にめんどくさいからだ。

真由美「うじゃうじゃって…朝は特に待ちあわせはしないんだよ。」

この生徒会長はとも馴れ馴れしいが、それ以上に王馬が馴れ馴れしい。まるで彼女の方が霞んで見えてしまうくらいだ。

真由美「深雪さんと少しお話ししたいこともあるし……ご一緒しても構わないかしら？」  
やはりこの女そうだったか……馴れ馴れしい。

確かに一緒に行動をしても構わんが、少しは自分の立場を考えてほしいものだ。それにこんな状況を他の者が見たらどうするか。二科生が一科生、ましてや生徒会長と登校など考えられん……

王馬「ああ、良いぜ。」

達也「！」

だからお前は何時からこのメンバーで指揮を取るようになったんだ。突然現れたと思ったらこれだ、昨日もそうだった。一悶着あった後、『帰ろうぜ。』なんて言いやがる。こうやって自由奔放な奴はあまり好きじゃない……

これからも、となると我々も巻き込まれる可能性があるか……特に深雪を巻き込もうものなら、早速排除させてもらおうか。

王馬「へっ……そんなかつかすんなよ、シバタツヤ。こいつ、悪そうな奴じゃないし、良いだろ？」

達也「ツ……あ、ああ問題無い……」

真由美（こいつ呼ばわりはさすがに許そうとはおもわないなあ……）ピキツ

深雪「王馬さん！会長にこいつは無いですよ！謝ってください！」

王馬「あ？なんで謝んなきゃいけねえんだよ……ほら、さっさと行こうぜ。ガッコー。」  
深雪「ちよ、ちよつと王馬さん！」

真由美「君は一回生徒会室に来ようか？」

王馬「セートカイシツ？なんだそれ、楽しいのか？」

真由美「ええ、とつても楽しいところよ！とつつても……ね？」

王馬「へえ、それは楽しみだな。」

真由美「それは良かったわ……フフフ……」

真由美は顔でこそ笑っているが、目が死んでいる。

額に青筋を浮かべていることからかなり怒っている事が見られる。……それはそうと何故だろうか。あのとき顔に出ていたのか？あいつは直ぐに気づいた。

深雪「はあ………なんだか放っておけませんね。」

レオ「俺あいつと一緒に居る事が怖くなってきたよ。」

エリカ「こいつつて……三年生なら分かるけどさあ……あたし等と同じ一年生だよ？それと同じクラスだし。なんかもう頭痛くなってきた。」

まあ、全員そんな反応になるか……しかし、こいつは無いだろ……早速だが、俺はこの男が嫌いになりそうだ。

深雪「会長、お話というのは生徒会のことでしょうか？」



真由美「ええ。一度、ゆっくりご説明したいと思って。お昼はどうするご予定かしら？」

深雪「食堂でいただくことになると思います。」

真由美「達也さんと一緒に？」

深雪「いえ、兄とはクラスも違いますし……」

昨日のことを思い出したのだろう。

やや俯き加減で答えた深雪に何やら訳知り顔で真由美は何度も頷く。

真由美「変なことを気にする生徒が多いですね。」

チラッと横を見る達也。

案の定、美月がウンウンと頷いている。昨日の一件を、結構引きずっているようだ。

しかし会長、貴女が言うのと、それは問題発言なのでは？

と達也は心の中で呟いた。

真由美「じゃあ、生徒会室でお昼をご一緒にしない？ランチボックスでよければ、自配機があるし。」

深雪「……生徒会室にダイニングサーバーが置かれていますか？」

物に動じない深雪が、驚きを隠せず問い返す。

呆れ気味でもある。

空港の無人食堂や長距離列車の食堂車両に置かれている自動配膳機が、何故高校の生徒会室に置かれているのだろうか。

真由美「入ってもら前からこういうことは余り言いたくないんだけど、遅くまで仕事をすることもありますので。」

真由美はバツ悪気に照れ笑いを浮かべながら、深雪に対する勧誘を続けた。

真由美「生徒会室なら、達也くんが一緒でも問題ありませんし……それに王馬くんも。」

王馬「おう。じゃあそのセートカイシツつて所に行けばいいんだな？」

達也「問題ならあるでしょう。副会長と揉め事なんてゴメンですよ、俺は。……それに、こいつも同行するなら尚更問題ですよ。生徒会室に二科生が二人……バレれば貴女方の顔を潰す事になりますよ？」

入学式の日、真由美の背後から彼を睨みつけていた男子生徒は二年生の副会長だったはずだ。

あの視線は、誤解しようのないものだった。

彼が気安く生徒会室で昼食など摂っているようものなら、喧嘩を売りつけられること、ほぼ間違いないのである。

しかし、達也の言うことが、真由美にはすぐに思い当たらなかったようだ。

真由美「副会長……？」

真由美はちよこんと首を傾げ、すぐに芝居じみた仕草でパンツと手を打った。

真由美「はんぞーくんのことなら、気にしなくても大丈夫。」

達也「……それはもしかして、服部副会長のことですか？」

真由美「そうだけど？」

この瞬間、真由美にあだ名を付けられるような事態は絶対に避けよう、と達也は固く決心した。

真由美「はんぞーくんは、お昼はいつも部室だから。」

達也のそんな思いとは無関係に……当たり前だが……ニコニコと笑みを絶やさず真由美は勧誘を続ける。

真由美「何だったら、皆さんで来ていただいてもいいですよ。生徒会の活動を知っていただくのも、役員の務めですから。」

エリカ「せっかくですけど、あたしたちはご遠慮します。」

遠慮した、にしては、やけにキツパリとした返答、拒絶。

真由美「そうですか。」

王馬「なんでだよ、チバエリカも来りやいいのに。」

エリカ「いや、あたし等はちよつと……ね……？」

王馬「変な奴だな……」

その発言に、王馬以外の全員が『お前がそれを言うか。』やエリカに関しては『お前に言われたく無い。』と、心の中で呟いた。

達也「…分かりました。深雪と二人でお邪魔させていただきます。」

王馬「おいおい、俺も忘れんじゃねえぞ。」

真由美「そうですね。よかったです。じゃあ、詳しいお話はその時に。お待ちしてますね。」

何がそんなに楽しいのか、くるりと背を向けた真由美は、スキップでもしそうな足取りで立ち去った。

同じ校舎へ向かうというのに、見送った五人の足取りは重い。王馬は全くと言って表情を変えない。

王馬「何かあいつ変な奴だな。」

深雪「王馬さん！居なくなっただからといってそんな発言はいけません！」

達也の口からため息が漏れた。

—————

そして早くも昼休み。

足が重かった。

たかが二回分の階段を上ったくらいでへばってしまふような、やわな鍛え方はしていない。

本当に重いのは気分で、足が重いというのは比喻でしかないのだが、前に進みたくなくなるという意味では同じだ。

王馬「♪」

こいつは本当に緊張感という物が無いのだろうか。

足が軽いのかスラスラと上がっていく。

おまけに「早く行こうぜ。」などとほざく。

こいつは辛い、苦しいという感情が欠如しているのだろうか。前向きな性格が羨ましいよ。楽しそうな人生だな。

深雪「王馬さんはダイニングサーバーをご存知ですか？」

王馬「初めて聞いたな。で、そのダイニングサーバーってのは美味しいのかい？」

二人は達也の前を歩みながら楽しそうに会話をしている。

そういえば深雪が達也以外の男に興味を持つのは珍しい事だ。嫉妬では無いが警戒心とも言えない感情を王馬にぶつける達也。だが、本人は何も気づく事無く会話を繰り広げている。

四階の廊下、突き当りが目的地。

見た目は他の教室と同じ、合板の引き戸。

違いは中央に埋め込まれた木彫りのプレートと、壁のインターホン、そして巧妙にカムフラージュされているであろう数々のセキュリティ機器。

プレートには「生徒会室」と刻まれていた。

王馬「ここか。へえ〜」

招かれたのは深雪であって二人はオマケだ。

だが、それにも関わらず扉の前でドツと、仁王立ちで構えている。  
すると彼は引き戸の取手に指を掛け、何も考えてなさそうな表情で戸を開く。

真由美「いらつしやい。遠慮しないで入って。」

正面、奥の机から声が掛けられた。

何がそんなに楽しいのだろう、と訊きたくなるようなえがで、真由美が手招きしている。

王馬がズカズカと入り込み深雪が直ぐ後に続く。

達也は最後に入り、戸を閉める。

王馬「結構良いところじゃねーか、セートカイシツつてのは。」

真由美「ふふつ、気に入ってくれた？」

王馬「ああ、それより腹が減った。そのダイニングサーバーってやつを見せてもらおうか。」

司波兄妹は生徒会室に入るとすぐさま札をするのだが、王馬は生徒会室が気に入ったのかあちこちをウロウロとしている。中でもダイニングサーバーが気になるらしい。

真由美「もう王馬くんったら：深雪さんや達也くんを少し見習いなさいよ：」

王馬「う〜ん：そいつは：どうしようかね〜。」

未だにウロウロとする王馬。

達也と深雪は「申し訳無い。」と、一言だけ。

少し声を大きくして言ったのだが、当の本人は我が物顔で徘徊していた。

他にも二名の役員が同席していたが、いきなり入ってきたかと思えばの奇行にやや慌てている。

もうひとり、役員以外で唯一同席している風紀委員長は王馬の行動に対して喝を入れる。

真由美「どうぞ掛けて。ほら、王馬くんも。お話は、お食事をしながらにしましょう。」

王馬「やつとかよ。俺は待ち侘びてたぜ。」

達也は正直、今日の食事が楽しみでは無かった。

なぜならこいつ、王馬が居るからだ。

先ず彼は、先日見てもらったなら分かる通り、たとえ相手が上級生であろうと挑戦的な態度をとる。

煽りセンスはピカ一で、恐怖というのを知らない。

学校の備品としては珍しい重厚な木製の方卓に、椅子を引いて深雪を座らせ、自分はその隣、下座に腰掛ける。

そしてその横に王馬がドシツと腰掛ける。

そして二年生の書紀『中条あずさ』が昼食の種類について尋ねる。

あずさ「お肉とお魚と精進、どれがいいですか？」

王馬「俺は肉だ。」

達也が精進を選び、深雪は肉と精進で迷っていたようだが、ここは分をわきまえて精進にした。あとは待つだけだ。ホスト席に真由美、その隣、深雪の前に三年生の女子生徒、その隣、達也の前に風紀委員長、その隣ら王馬の前にあずさという順番で席につくと、真由美が話を切り出した。

真由美「入学式で紹介しましたけど、念の為、もう一度紹介しておきますね。私の隣が会計の『市原鈴音』、通称「リンちゃん」。」

鈴音「…私のことをそう呼ぶのは会長だけです。」

王馬「ふん…リンちゃんっていうのか。」



鈴音「…会長。」

真由美「ごめんなさいね。」

整つてはいるが顔の各パーツがきつめの印象で、背が高く手足も長い鈴音は、美少女というより美人と表現する方が相応しい容姿の女子だ。

確かに「リンちゃん」というより「鈴音さん」の方がイメージに合っているだろう。

真由美「その隣は知ってますよね？ 風紀委員長の渡辺摩利。」

王馬「おう、あんたか。よろしくな、ワタナベマリ。」

摩利「…フルネームで呼ぶのか？」

深雪「王馬さんはこれが普通なので。」

摩利「そ、そうか。」

確かに今考えて見ればこいつは人の名前をフルネームで呼ぶ癖がある。それにぎこちない。かなり棒読みで読んでいる事からあまり、学習能力は高くないのかもしれない。

真由美「それから書紀の中条あずさ、通称あーちゃん。」

あずさ「会長…お願いですから下級生の前で『あーちゃん』は止めてください。わたしにも立場というものがあるんです。」

王馬「へえ、かわいいじゃん、あーちゃん。」

あずさ「会長!!」

彼女は真由美よりも更に小柄な上に童顔で、本当にそのつもりが無くても上目遣いの潤んだ瞳は、拗ねて今にも泣き出しそうな子供に見える。なるほど、これは「あーちゃん」だろう、と達也は思った。

深雪「…」ジーツ…

王馬「あ? どうかしたのか? シバミュキ。」

深雪「な、なんでもありません!」

王馬「?」

何故か深雪は王馬の言葉に反応し、じーつと王馬の方を見つめていた。まあ、見つめていたというよりもジト目…

真由美「もうひとり、副会長のはんぞーくんを加えたメンバーが、今期の生徒会役員です。」

摩利「私は違うがな。」

真由美「そうね。摩利は別だけど。あつ、準備が出来たようです。」

ダイニングサーバーのパネルが開き、無個性ながら盛り付けられた料理がトレーに乗って出てきた。合計六つ。

一つ足りない…と思いつつ、自分が口を挟むことではない、どうするのかと達也が見

ている前で、摩利がおもむろに弁当箱を取り出した。

王馬「へえ、これがダイニングサーバーってやつか。結構、面白いんだな。」  
あずさ「気に入ってくれましたか？」

王馬「ああ。おもしろーよ、これ。」

王馬とあずさが立ち上がったのを見て、深雪も席を立つ。

自動配膳機はその名の通り、自動的に配膳する機能もついているのだが、自配機対応のテーブルで無ければ人の手を使った方が速い。

こうして、奇妙な会食が始まった。

王馬「うめーなコレ。」

肉をガツガツと食すこの男。この面子の中で良くも豪快に食す事が出来る。正直に言つてはしたくないであろう。

もしこの場に副会長が居れば何と言うか……いや、それ以前に、だったな。

達也「そのお弁当は渡辺先輩がご自分でお作りになられたのですか？」

摩利「そうだ……意外か？」

達也「いえ、少しも。」

王馬「あんた料理出来るんだな。」

またこいつは、とついつい言葉に出そうになつてしまう。

せつかく良い印象を与えられる機会にこの男は逆の事を行う。

摩利「意外で悪かったな。」

王馬「？怒ってんのか？」

摩利「うるさい！」

達也はもう話したくなくなってきた。

せめて、食事中くらいは黙っていてほしいものだ。

摩利「はあ：一週回ってお前には感心すら覚えるよ。」

王馬「ん、褒めてくれんのかい？そりや嬉しいな。」

もうこの場に居る全員が一斉に大きなため息をこぼした。

真由美「そろそろ本題に入りましょうか。」

唐突感があるいえ、高校の昼休みにそう時間的な余裕があるわけでもない。フォーマルな口調に直した真由美の言葉に、達也と深雪は揃って頷いた。

真由美「当校は生徒の自治を重視しておりら生徒会は学内で大きな権限を与えられています。これは当校だけでなく、公立高校では一般的な傾向です。」

相槌の意味で達也は頷いた。管理重視と自治重視は、寄せては返す渚の波のようなもので、大小の違いはあれ交互に訪ねる風潮だ。三年前の沖繩防衛戦における完勝とその後の国際的発言力の向上以来、それ以前の劣勢な外交環境に起因する内政動揺を反映し

た過度の管理重視風潮への反動から、過度に自治を重視する社会的な傾向がある。

更にその反動として、管理が厳格な一部の私立高校が父兄の人気を集めていたりするものだから、世の中は単純には計れない。

真由美「当校の生徒会は伝統に、生徒会長に権限が集められています。大統領型、一極集中型と言つていいかもしれません。」

真由美「生徒会長は選挙で選ばれますが、他の役員は生徒会長が選任します。解任も生徒会長の一存二委ねられています。各委員会の委員長も一部を除いて会長に任免権があります。」

摩利「私が務める風紀委員会はその例外の一つだ。生徒会、部活連、教職員会の三者が三名ずつ選任する風紀委員の互選で選ばれる。」

真由美「という訳で、摩利はある意味で私と同格の権限を持っているんですね。さて、この仕組み上、生徒会長には任期が定められています。他の役員には任期の定めがありません。生徒会長の任期は十月一日から翌年九月三十日まで。その期間中、生徒会長は役員を自由に任免できます。」

そろそろ話が見えてきたが、口を挿むことはせず、達也は理解の印に再度、頷いてみせた。

真由美「これは毎年の恒例なのですが、新入生総代を務めた一年生は生徒会の役員に

なってもらっています。趣旨としては後継者育成ですね。そうして役員になった一年生が全員生徒会長に選ばれる、というわけではありませんが、ここ五年間はこのパターンが続いています。」

達也「会長も主席入学だったんですね？さすがです。」

真由美「あ、まあ、そうです。」

王馬「ふうん、あんた、凄い奴だったんだな。」

あすさ「会長に向かって『奴』とは……」

真由美「慣れつこよ、あーちゃん。」

王馬の一言で全てが狂いかねないこの状況。

今のところはギリギリのラインである。

生徒会メンバーが懐の深い方々で本当に良かった。

真由美「コホン……深雪さん、私は、貴女が生徒会に入ってくださいることを希望します。引き受けていただけますか？」

一呼吸、深雪は手元に目を落とし、達也へと振り向いて眼差しで問い掛けた。達也はその背中を押す意思を込めて、小さく頷いた。再び俯き、顔を上げた深雪は、何故か、思ひ詰めた瞳をしていた。

深雪「会長は、兄の入試の成績をご存知ですか？」

達也「っ……！」

全く予想外の展開に、達也は危うく叫び声を漏らしそうになった。急に何を言い出すつもりだろうか、この妹は。

真由美「ええ、知ってますよ。すごいですよねえ……正直に言いますと、先生にこっそり答案を見せてもらった時は自身を無くしました。」

深雪「成績優秀者、有能の人材を生徒会に迎え入れるのなら、私よりも兄の方が相応しいと思います。」

達也「おいつ、み……」

王馬「へえ、シバタツヤは頭が良いのか。そりゃ凄いな。入れれば良いじゃねえか、そのセートカイってやつに。」

達也「お前まで……」

深雪「王馬さん……私を生徒会に加えていただけると言うお話については、とても光栄に思います。喜んで末席に加わらせていただきたいと存じますが、兄も一緒というわけには参りませんか？」

深雪の言った事は確かだ。達也は知識や判断力で言えば、この学園の中でもトップクラスなのは間違いないだろう。

だがそれと同時に異変も混じる。

それは「身鼻肩」だ。いくら兄妹といえど、いくら家族といえど、ここまで来ると不快感を憶えてしまう。

もはや盲目的な言葉でしか無かった。

鈴音「残念ながらそれは出来ません。」

回答は問われた生徒会長ではなく、隣の席からもたらされた。

鈴音「生徒会の役員は第一科の生徒から選ばれます。これは不文律ではなく、規則です。この規則は生徒会長に与えられた任免権に課せられる唯一の制限事項として、生徒会の制度が現在のものとなった時に定められたもので、これを覆す為には全校生徒の参加する生徒総会で制度の改定が決議される必要があります。決議に必要な票数は在校生生徒数の三分の二以上ですから、一科生と二科生がほぼ同数の現状では、制度改定は事実上不可能です。」

王馬「あんた話長えな。さっぱり分からねえよ。」

深雪「王馬さん、折角説明してくださったのに、それはいけませんよ。∴申し訳ありませんでした。分を弁えぬ差しし出口、お許してください。」

立ち上がり、深々と頭を下げる深雪を咎める者は居ない。

王馬は不思議そうな顔でそれを見ていた。

真由美「ええと、それでは、深雪さんには書紀として、今期の生徒会に加わっていた



だくということでもよろしいですね？」

深雪「はい、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願い致します。」

王馬「おう、なにか知らねえけど頑張りな。」

真由美（余計なお世話よ…）

摩利（お前は余計だ…）

鈴音（不躰な…余計です…）

あずさ（本当に一年生ですよね…？）

達也（余計だ、少し黙っている。）

しかしそんな王馬の返しにもニコツと笑みを返し、丁寧にお辞儀をする。

深雪「はい、頑張ります。」

そう一言だけ言うと深雪は再び席に着く。

摩利「さて、本題は終わったか…だが昼休みが終わるまでもう少しあるな。ちよつと

いいか？」

達也「ええ。」

王馬「あ？」

そう言い出すと摩利は達也と王馬の方へと向き直す。

達也は背筋を伸ばしとても作法の良い姿勢、対する王馬は机に肘をつき、少しはした

ない姿勢であるだろう。

摩利「風紀委員会の生徒会選任枠のうち、前年度卒業生の一枠がまだ埋まっている。いい。」

真由美「それは今、人選中だと言っているじゃない。まだ新年度が始まって一週間も経っていないでしょう？摩利、そんなに急かさないうで。」

摩利「確か、生徒会役員の選任規定は、生徒会長を除き第一生徒を任命しなければならぬ、だったよな？」

真由美「そうよ。」

しかたないわね、という顔で真由美が頷く。

摩利「第一科の縛りがあるのは、副会長、書記、会計だけだよな？」

真由美「そうね。役員は会長、副会長、書記、会計で構成されると決められているから。」

摩利「つまり、風紀委員の生徒会枠に、二科の生徒を選んでも規定違反にはならないわけだ。」

真由美「摩利、貴女……」

真由美が大きく目を見開き、鈴音、あずさも唾然とした顔をしている。この提案も、先の深雪の発言と同じく、随分突拍子も無いことらしい。

この渡辺摩利という三年生は、相当悪ふざけが好きで性格をしているようだ、と達也は思った。

…のだが。

真由美「ナイスよ！」

達也「はあ？」

王馬「何を話してんのか分かんねえな。」

深雪「王馬さん、つまりはですね…」

真由美の予想外な歓声に、思わず、達也の口から間の抜けた声漏れてしまった。そのことをよそに話の内容がよく分からない王馬は深雪に詳しく教えてもらっていた。

真由美「そうよ、風紀委員なら問題無いじゃない。摩利、生徒会は司波達也くんを風紀委員に指名します。」

いきなり過ぎる展開に動転したのは一瞬のこと。

達也「ちよつと待つてください…」

摩利「ああ、その事なんだが決定事項では無いんだ。一枠だからな？ならばここで決めてもらおうか。」

その摩利の一声に今度は真由美が間の抜けた声が漏れてしまう。「決めてもらおうか。」とは、何を決める必要があるのだろうか。……ああ、そういう事か、その考えは

遅れての事。もうひとり居るからだ：

摩利「司波達也。そして、……十鬼蛇王馬。」

真由美「摩利！何を言ってるの！」

摩利「ん？私はただ一枠を埋めるためだけの話をしているだけだろう？なあと、面白いやないか、ペーパーテストの最高と最低が居るんだ。どちらか迷うに決まっているだろう？」

少し皮肉成分が入った言い方は彼女らしい、いや、わざとらしい。本来ならば達也だけでよいのだが、摩利は少なからず王馬に対して興味を持っていた。

どれだけ威圧を浴びせようとも物ともしない、むしろ逆恨みの如く挑発をしてくる。こんなに面白い生徒は早々いないであろう。

真由美「摩利！」

深雪「最高と最低って…え、王馬さん？」

達也「まさかお前…」

ただどうしても引つ掛けるのが摩利の言った『最高と最低』だ。入学試験のときに行つたペーパーテストで達也は高得点を叩き出しそれに当てはまる。

対する王馬なのだが、言葉の通りだ。

最低得点、それ以上でもそれ以下でもない。

王馬「…なんだよ、ジロジロ見て。」

真由美「生徒会は達也くんを推薦すると言ったはずよ？それでも決める必要があると  
いうの？」

摩利「ああ。確かに司波達也の頭脳、知識が十分という点では風紀委員には欲しいものだな。しかし、それと同時に王馬も欲しくなったんだ。正直分かつているんじゃないか？心の何処かで。こいつは普通の生徒とは違う、というのが。上級生相手にも引かない、とても良いじゃないか。」

真由美「そう…だけど。」

鈴音「ちよつとよろしいでしょうか。」

綺麗、細く整えられたような左手を挙げ視線が彼女に集まる。それでも臆する事なく冷淡に話を進めようとする。

鈴音「それならば私は彼、十鬼蛇王馬には願ひ下げです。」

摩利「…理由は？」

鈴音「理由…そうですね。貴女が仰った事をそのまま押し付けますよ。上級生にも引かない態度をみせる、いや挑発的な態度を出すという事で当てはまっていますね。口の利き方、礼儀作法まで…ここに来るまではつきりと見させていただきました。」

淡々と発する言葉に普通の生徒ならこの場で涙を出していても可笑しくはない話だ

ろう。容姿端麗、クール系お姉さんだが、それが強く出すぎてしまっている。

鈴音「相応しくない…と、一言だけ。」

あずさ「確かに、私も…」

挙手こそしないものの小さな声で便乗するあずさ。

彼女とて立派な生徒会の一員だ、王馬の素行くらい見抜くことが出来る。

摩利「…困ったな、そこまで言われるとは。」

真由美「もう達也くんが決まりでいいじゃない…」

達也「いやだから俺の意思は…」

鈴音「風紀委員会は、校則違反者を取り締まる組織です。」

また話を遮られ撃沈する達也。もう自分の声はここには届いていないのだろう、風紀委員になるのも時間の問題だ、と悟りを開き始める。

鈴音「魔法使用に関する校則違反者の摘発、魔法を使用した争乱行為の取り締まり。風紀委員長は、違反者に対する罰則の決定にあたり、生徒側の代表として生徒会長と共に、いわば警察と検察を兼ねた組織です。」

風紀委員の主な仕事を一言も囁まず、視線を王馬から離さず語る鈴音。この少しピリツした空気に先程までの生易しい空気はもう無い。

鈴音「追い打ちを掛けるようで失礼ですが、あなたにその資格があるとは思えません。」

もし、あなたが任命されたのであれば、あなたはある意味学園中の生徒を敵に回すことになりかねません。」

深雪「!…:そ、それはどういふ…:」

鈴音「彼がこういつた態度を何時までも取り続けるのであれば恨みを買うのも時間の問題でしょう。実際私はあなたの素行が良いものとは認めてません…:それにあなたは一年生、しかも二科生…:…:あなた三年間をマトモに送れるとは思えませんよ。」

真由美「リンちゃん、そんな言い方!」

摩利「実際事実だが…:惜しいな。」

鈴音の言う事は事実だ。彼女は冷淡に述べていたがそれは彼の事を思つての事。実際王馬があゝの態度を取り続けるというのであれば彼は多方面から恨みを買われるのは間違いないだろう。口下手とは言えど彼女なりの優しさがそこにあつた。

鈴音「夢のためでしょうか?ここに來られたのは?あなたは明確な意思があつてここに來たのでしょうか?それならばもつと分を弁えた発言を推奨します。それにあなたは二科生でも最下位…:それがバレてしまえば余計にあなたの立場は無くな…:「ネエちゃん」…:はい?」

鈴音が話を続けていたが横槍、当の本人がやつと口を開く。それは急の事、皆目を大きく見開いて王馬を見る。

王馬「随分心配してくれるんだな。もしかして、俺に抱かれないのかい？ん？」  
その一言は突然だった。一瞬にして皆の思考を打ち砕いた。男はなぜそんな事を言い出したのかは不明。

誰も知る者は居ない。

深雪「…は？」

達也「は？」

真由美「え？」

摩利「は？」

あずさ「!？」

鈴音「……はい？……あの、そんな事を急に仰られても困ります……そうですね、別に心配してるわけではありません……私はあなたが何故、何のためにここ（魔法科高校）に来たのか、理由を知りたいわけですが。」

王馬「理由ねえ……そんな事に一々理由が必要かい？」

鈴音「そんな事、あなたは学園中を相手にまわしても構わないという事ですか？魔法というものは便利ですが、時にはより鋭利な物になる事ですよ？」

より見つめる瞳をきつくし、王馬に対して少し覇気に似たような物を植え付けるが、それでも動じない。周りはそれを傍観する事しか出来なくなっていた。



王馬「やれやれ……黙って聞いてりやあくだらねえことをペラペラと……まあいい答えてやるぜ。」

「誰が一番強いのかハッキリさせる」それだけだよ。

男は不適に笑い、それは微笑ましいではなく只々不気味で仕方ない。絶対的な自身と  
言えるのかくわつと、目を見開いた。

王馬「それ以外の理由なんざ全部後付けさ……嘘つばちだよ。」

鈴音「……？それだけの為に？その結果、あなたは怪我では済まされないことになる  
のかもしれないですよ？」

王馬「ありえねえな。俺が負けるなんざ未来永劫ありえねえ。」

鈴音「!?この男……ハツタリじゃない！自分が敗れる可能性などまるで想定していない  
！」

摩利「!!ッ……本当に私は凄い者を見つけたかもしれないな……交えてもいないの  
にこの”強さ”……本物だな……」

真由美「!ッ……傲慢を通り越して清々しいほどの自信への信頼……相当なのね。」

達也（ツ!!…この圧力、油断すれば押し潰されそうだ…）

深雪「ま、ま、まあ落ち着いてください！王馬さんも悪気があってこうしてるはずじゃないんです！なので先輩方もお静めください！」

深雪が無理矢理にでもこの空気を変えようと必死で仲裁に入る。その時の顔は無理に笑顔を作り目はぐるぐると渦を巻くほどになっていた。

鈴音「とはいえ、私は認めません、彼の風紀委員への加入は認めません！」

王馬「へっそうかい。俺は別にその『フーキイーン』つてのには興味無えんだ。…ただ居るよな、大した強さも持つてねえのに最強面する奴等が…俺はそれが許せねえだけだ。」

あずさ「そ、そんな理由で…」

真由美「随分と無茶な事ばかり考えるのねあなたは。」

達也「何を考えているんだお前は…」

深雪「もう喋らないでください王馬さん！」

摩利「そうか…：…ならば合格だな。」

真由美「え!?!」

鈴音「な!?!」

あずさ「ええ!?!」

摩利の合格ラインに達したのが驚きだったのか生徒会メンバーは姿には似合わない声を上げる。

これには達也も深雪も驚いたようで摩利と王馬をそれぞれ二度見する。

摩利「良いじゃないか。そういう理由だからこそ風紀委員としての仕事が当てはまっている。」

真由美「摩利：ほんつとうに貴女は：」

鈴音「大胆すぎます：解任するのも時間の問題ですよ：」

あずさ「私は知りませんからね!!」

それぞれ大きなため息をこぼす。そりやそうだろう、こんな滅茶苦茶な決め方は無い。達也は「これで俺は風紀委員になるはずは無い。」と心でつぶやいていた。

摩利「十鬼蛇王馬に”司波達也”、やってくれるな？」

ああ、逃れられない：

深雪「さすがはお兄様です。」

ニコツと笑う深雪を見て追い打ちをくらった達也。

自分は風紀委員として頑張るしかない、と覚悟を決めた。

王馬「あ？さつきあんた一梓とかどうとか言つて無かったか？」

摩利「生徒会梓の事か？それなら大丈夫だ。もう一梓ぐらい構わないだろう。」

真由美「構わないって…貴女ねえ…」

鈴音「生徒会への信頼度が右肩下がりですよ。」

あずさ「滅茶苦茶すぎますよ！」

達也もこれには同感だ、いくらなんでも無理がある。

再び渡辺摩利という女子生徒への呆れを感じてくる。

王馬「ふくん…そうかい。」

摩利「ただし、無条件で欲しい事は山々なのだが…我々も拝見させてもらわなければならない。特に王馬、お前をな。」

王馬「あん？」

摩利「簡単に言つてしまえば風紀委員とは喧嘩が起こつたらそれを力づくで止めなければならぬ、という事だ。司波達也も例外ではない、王馬、力比べといこうじゃないか。」

摩利のその発言に対し達也は自身が実技試験で成績が悪かったことを述べ反論しようとしていたが、横にいる王馬はその発言に耳をピクリとさせ、ニタアつと不気味な笑みを浮かべる。それを見た面子は一步下がりでさうになつてしまう。

王馬「へえ…テストかい？おもしれえ事考えるねえ…あんだ。」

摩利「力比べなら私がある…つと、そろそろ昼休みが終わるな。放課後に続きを話

したいんだが、構わないか？」

王馬「構わねえよ。」

達也「……分かりました。」

再度ここに出頭すると、もう外堀も内堀も埋められた必至の状態になつてしまふ気がしたが、達也には他の選択肢が無かつた。

摩利「では、またここに来てくれ。」

三人は生徒会室から出ると二人はお辞儀をし、王馬は笑みを浮かべたまま摩利と見つめ合っている。

その視線に入ろうものなら、今すぐ殺されてしまいそうだ。

深雪「風紀委員に入れるなんて、すごい事ですよ、お兄様、王馬さん。」

達也「それはありがたいが………王馬？」

未だにジツと扉を見つめる王馬が気になつたのか声を掛ける達也。

王馬「これから一体どうなるんだろうねえ……なあ、シバタツヤ？」

達也「…そう、だな…」

深雪「王馬さんも、頑張ってください！確かに力比べとなると相手が強い事は確かですが「わざわざ犠牲になってくれるって言うてんだ。」…王…馬…さん？」

王馬は二人に背を向け教室へと向かう、その背中はとても恐ろしくオーラが見えるほ

どに邪気を放っていた。

王馬「盛大にぶっ潰してやるぜ。」

男の笑みはより不気味になっていった。

## 第4話 挑戦

レオ「達也、生徒会室の居心地はどうだった？」

CADの順番待ちの列で、背中を突かれた、と思つたらレオがそんなことを訊いてきた。さの顔に含むところは見られない。単に興味津々といった様子だ。

達也「奇妙、かつ”最悪”な話になった。」

エリカ「奇妙…最悪…?」

達也の前に並んでいたエリカがクルリと振り返つて首を傾げた。

達也「風紀委員になれ、だど。いきなり何なんだろうな、あれは。」

達也もエリカと一緒に首を傾げる。本当に、「何なんだろうな」としか言いようがない気分だった。

レオ「確かにそりや、いきなりだな。」

レオも唐突に感じているようだ。

エリカ「んで、最悪、の方は……粗方想像出来るんだけど……」

エリカは席に座っている王馬の方を見る。

達也もそれに反応すると目を瞑ってコクリと頷く。

レオとエリカは、はあ…と大きなため息をついた。

美月「でもすごいじゃないですか、生徒会からスカウトされるなんて。」

しかし美月の感じ方は違ったようで、感じ入った目を達也に向けていた。左右の列で小さなざわめきが起こっているのは、多分、他のクラスメイトたちも同じように感じたのだろう。

達也「すごくなんかないさ…すごいのは深雪と”王馬”だよ。」

達也は美月の賞賛を素直に受け取れなかった。

だが、そんなことよりも驚くことがあった。

レオ「は?…すごいって、あいつももしかして…」

達也「まあ…そう…なるな。」

若干認めたくない気持ちを抑えつつ、王馬を賞賛するしかなかった。深雪のおまけ、といった感じだったが改めて考えてみると自分は王馬のおまけなのかもしれない、とつくづく思った。

エリカ「はあ!?!マジで!?!」

美月「エリカちゃん、もう少し声を抑えて、それに王馬さんに失礼ですよ。……まあ、意外でしたけど。」



左右のざわめきは大きいとまでは言わないが大きくなりつつある。そりやそうだ、入学二日で問題を起こし掛けていた人物だ。そんな人物が…と考えると、この高校は終わりなのかもしれない。

レオ「なんかあいつが怖えよ…」

エリカ「信じらんない…」

美月「まあまあ…そう言わず。」

口から魂が抜け出しているような二人、達也こそそうしていたいであろう、美月も驚いているのは言わずもがな。

エリカ「で、で？風紀委員って何をするの？」

エリカに問われ、達也が聞いた話をかいつまんで説明するにつれて、三人とも目が丸くなっていた。

レオ「そりやまた、面倒そうな仕事だな…」

嘆息するレオの横で、美月が打って変わって心配そうな表情を浮かべていた。

美月「危なくないですか、それって…エリカちゃん、どうしたの？」

エリカは不機嫌、と言うか、何故か怒っているような顔をしていた。

エリカ「…まったく、勝手なんだから…」

視線が微妙に外れている。虚空を睨みながら呟かれたセリフは、ここにいない誰かを

なじるものか。

エリカ「ほんとにひどい話よね。達也くんも王馬くんもそんな危ない仕事、断っちゃえ。」

王馬「断らねえよ。」

エリカ「そつか……………ん?……………ツ!？」

険しい表情を悪戯っぽい笑顔に変えると、次は王馬の乱入によつて驚きの顔に変わる。

そしてまたしても達也は気づく事が出来なかった。

王馬が現れて達也が気配に気付かずそれに悔いる、もはや恒例と化してきているかもしれない。

レオ「びつくりした!いきなり現れんじゃねえよ!」

王馬「悪いな。で?俺は断らねえよ。」

エリカ「…それはもう聞いたわよ。」

また険しい表情になって今度は俯く。普段ならレオがツツコミを入れておもしろ半分来接するのだが今回はそうではなかった。

王馬「なんだよ、心配してくれてんのかい?チバエリカはかわいいところがあるんだな。」

レオ「なっ!？」

美月「ふえっ!？」

エリカ「えっ!？」

達也「直球だな…」

王馬の言うかわいいはそういうかわいいでは無い。エリカは普段活発でどちらかというと男勝りなどところがある、渡辺摩利に似ている部分がある。そういった女性がしおらしい表情をする…ということを指しているため、なんの問題も無い。

エリカ「か、か、かわいいって、ちょ!／＼／＼」

まあ当然エリカは驚いたり、照れたり、と忙しい様子だ。

それに王馬が言ったから、かもしれない。

何度も言うが王馬はイケメン、男前だ。

そのため一科生の森崎連中から眼をつけられている、本人は満更でもないようだ。

レオ「ちょ…直球だな…」

達也「お前がそういう事を言うなんてな…」

王馬「あ?俺のことなんだと思ってるんだよ。」

レオも達也も驚いている。未だに掴みどころのないこの男を知れたと思つたら『かわいい』なんて事を思春期真っ只中の女子生徒に言うからだ。

美月「でも、喧嘩の仲裁に入るってことは、攻撃魔法のとぼちちりを受けるかもしれないですよ？」

エリカ「そ、そうよ。きつと、逆恨みする連中だつて出てくるし。」

そりやそうだ。こんな仕事、はつきり言つてクソみたいなものだ。ノーギャラで、こんな仕事をしたいと思う馬鹿は普通いない。

王馬「関係無えよ。」

エリカ「関係無いって、あんた！怪我しちゃうかもしれないのよ！」

王馬「そいつは……」

俺が敗けるって言つてんのかい？

放たれた威圧するような空気に教室中の人間に悪寒が襲う。たった一人の人間にこれほどの圧が放てるだろうか。

王馬「関係無えよ、最強面する奴は誰だろうとぶつ潰してやるよ。」

美月「そ、そ、それは駄目ですよ！王馬さんが悪者扱いされちゃうじゃないですか！」

王馬「あ？だから関係無えって言つてんだろ。」

美月「駄目です！」

王馬「関係無え。」

美月「駄目！」

王馬「無え。」

ワーワー、ギャーギャーと騒ぎ出す二人。

王馬はその二人を見たあと、レオとエリカの方を見る。

感じたのは…「似てる」それだけだ。

真面目気質な美月と自由奔放で傲慢な性格の王馬とでは、上手く釣り合わないだろう。

それに反応して周りの生徒達は引き気味になっている、いや、実際この場から距離をとって引いている。

達也（こんなのとまた、生徒会室に行かなければならんのか…）

呆れを通り越している。昼のあれは本当に生徒会メンバーに喧嘩を売ったとしか思えない。

普通そんな生徒が居ると思うか？居ないであろう。

生徒会に目をつけられると後々厄介になるのは承知なはずであろう。だが、それでも王馬は関係無い、といった態度で話を進めていた。

これを副会長が見たらどう思うだろうか、火の粉が降りかからない事を祈る達也であつた。

—————  
放課後、達也は足を引きずつていた。それは本当に昼休み以上に足が重かつた。あ、これは比喩だ。

また生徒会室へ行きさらなる問題沙汰になるのは間違いないであろう、なぜなら彼が居るから。

当の王馬は昼休み以上にご機嫌だつた。

スキップでもしているのか、いや若干スキップをしているがとても軽い足取りで生徒会室へと向かう。

こうなったのは全部お前のせいだからな、と少し威圧を向けるが気づく様子もなく鼻歌交じりにワクワクしていた。

深雪「王馬さん：決して無理はなさらないで下さいね。私だつてあなたの事が心配ですし：」

王馬「へっ：何しおらしくなつてんだよ。俺の事を心配する練習なんてしなくていいぜ。相手の事を考えときな。」

深雪「：分かりました。」

お前のような奴が妹と気安く話すな、と言いたいところだがここは抑えておこう。見た感じ深雪は王馬の事を気に入ってる？かもしれない。

だがそれは絶対に避けたい、あつてはならない、あつてたまるか。今ここでそんな事を言うとう刃先がこちらに来るかもしれない。…認めないぞ十鬼蛇王馬：

そんなシスコン気味な気持ちを抑えながらも生徒会室へと入る。

達也「失礼します。」

おつと、この手の視線にはもう慣れたようだ。

見覚えがあるし彼しか居ないであろう。

達也の方を見ると次は王馬の方を見る。王馬には敵意というよりも殺気を放たれていたが本人は欠伸をしている。

それに怒りつつあるが、目の前に居た深雪に視線を移すと嘘のように敵意と殺気が霧散した。

だがそれはどうでもいい。

目の前にいる彼は細身の体型で身長は達也と変わらないくらいだろう。整っているが特筆すべきものは無い容貌とこれといって特徴の無い体つき。肉体的にはそれほど強い印象を与えないが、身の周りの空気を侵食するサイオンの輝きは、この少年の魔法力が卓越したものであることを示している。

服部「副会長の『服部刑部』です。司波深雪さん、生徒会へようこそ。」  
……………完全なる無視である。

それには達也も王馬も気づいていた。『ああ、歓迎されていないんだな。』と。

服部はそれだけを言うと席に戻った。

達也は少し苛立ちを感じるものの動かされるものではない、いや、動くことはない。  
……………が……

王馬「おいおい。俺たちには歓迎してくれないっていうのかい？折角来てやったんだぜ？『ハンゾーくん』？」

この男…見事である…

服部「貴様！どこでその名を知った！」

見てわかる通り激昂している、そりやそんなあだ名は嫌に決まっている。

摩利「まあまあ落ち着け。…来てくれたな王馬。」

真由美「いらつしやい、深雪さん。それに王馬くんも…て言いたいところなんだけど本当にすごい神経してるわね。」

達也は自分も忘れていますよ、と言おうとしたがすぐに諦めた。もう目立つのはうんざりだ。この際トラブルに巻き込まれたくは無い。それなら火種は自分で消してもらうのが最善だ。



真由美「早速だけど、あーちゃん、お願いね。」

あずさ「……ハイ。」

こちらも諦めの境地なのだろう。一瞬、哀しそうに目を伏せ、ぎこちない笑顔で頷くと、あずさは深雪を壁際の端末へ誘導した。

摩利「あたしにも移動しようか。」

王馬「ああ、いいぜ。墓場くらいは選ばせてやるよ。」

深雪「王馬さん！だからそんな口の利き方は良くないと言っているでしょう！」

摩利「はあ……まったくこいつと来たら……」

服部「無礼者が！貴様のような奴が何故ここに！」

またまた点火して炎上しそうな状況だ。

だが、それをよそに達也は質問をした。

達也「どちらへ？」

摩利「風紀委員会本部だよ。色々見てもらいながらの方が分かりやすいだろうからね。この真下の部屋だ。といっても、中でつながっているんだけど。」

達也「……変わった造りですね。」

王馬「何処だつて良いぜ。線香上げる準備もしなきゃな。」

深雪「王馬さん!!」

もはや漫才と化してきているこれ。

達也はもうツッコまない、そう心に誓った。

服部「待つてください、渡辺先輩。」

呼び止めたのは服部副会長。摩利はその声に、今時耳慣れない名称で応じた。

摩利「何だ、『服部刑部少丞範蔵』副会長。」

服部「フルネームで呼ばないでください！」

達也は思わず真由美の顔を見てしまった。

彼の視線に真由美は「ん？」という感じで小首を傾げる。

まさか『はんぞー』が本名だったとは……完全に、予想外だった。

王馬「なんだよ、ハンゾーくんて合ってるじゃねえか。」

服部「だから呼ぶな！」

摩利「じゃあ服部範蔵副会長。」

服部「服部刑部です！」

摩利「そりや名前じゃなくて官職だろ。お前の家の。」

服部「今は官位なんてありません。学校には『服部刑部』で届けが受理されています

！……いえそんなことが言いたいわけではなく！」

王馬「ちっ、めんどくせえ奴だな。なあワタナベマリ、こいつ何なんだ？」

摩利「まあ…見てもらったらわかる通り、ザ・バカ真面目って奴だ。」

服部「貴様！目上の存在に対して何だ、その態度は！だいたいお前のような二科生ウイード如きがこの場に居るなよ！」

摩利「おい！その発言は…ッ！…」

その一言で少し空気がピリピリしたものに変わったのは明らかであった。

達也も深雪も少し腰を落として構えをとっていた。いわゆる戦闘態勢だ。二人には分かつていた。王馬の機嫌が悪くなったのを。

王馬「ああ？目上の奴だ？それは誰の事を言っただ？ああ？」

王馬はより挑発的な態度をとり服部の眼の前までやってくる。王馬の方が身長が高  
い為、見下ろすような感じになっているが、見下していた。

真由美「まあまあ王馬くん！そんなことは気にしなくていいじゃない！言わなくたって王馬くんが強いのは分かりきってることよ！それに摩利もいいじゃない！はんぞーくんにも色々譲れないものがあるんでしよう。」

その発言主、真由美に一斉に視線が突き刺さる。

お前が言うな、と。もちろん王馬はそう思うはずもなく、ジッと真由美の方を見ていた。

王馬「分かつてんじゃねえか……『マユミ』。」

真由美「えっ!？」

深雪「はっ…?？」

王馬は真由美の事を会長と呼ぶわけでもなく、七草先輩と呼ぶわけでもなく呼び捨てである。なんと下の名前の。

こんなこと距離の近い男女にしかありえない事だ。だが、王馬がそんなことを知るはずもない。

一同は驚愕し、真由美に至っては頬を赤く染め照れてしまっている。

真由美「こら！」

口ではこう言っているが嫌では無さそうだ。

王馬の胸をポコポコ叩いているが痛くなさそうだ。

少し落ち着き…

服部「渡辺先輩、お話したいのは風紀委員の補充の件です。」

顔に昇った血の気が一気に引いている。コマ落としの動画を見るように、服部は落ち着きを取り戻していた。

摩利「なんだ？」

服部「その一年生二人を風紀委員に任命するのは反対です。」

冷静に、感情を押し殺しながらも意見を述べる。

摩利は眉を顰める、あながち演技でも無さそうだ。

どんな感情を表しているのかはわからないが、概しているのは間違いないだろう。

摩利「おかしなことを言う。王馬と司波達也くんを生徒会選任枠で指名したのは七草会長だ。例えば口頭であつても、指名の効力に変わりはない。」

真由美「えつゝ達也くんは任命したけど王馬くんは：「指名されましたね？」え、いやだから：」

指名しましたね？

真由美「：はい。」

立場逆転か、それほど王馬を手放したくないのだろうか。

摩利は目から若干光を消し真由美の双目から一切離さなかつた。

服部「本人は受諾していないと聞いています。本人が受け容れるまで、正式な指名にはなりません。」

摩利「それは達也くんのみの問題だな。生徒会としての意思表示は、生徒会長によつて既にされている。決定権は彼にあるのであつて、君にあるのではないよ。」

摩利は達也と服部を交互に見ながら言う。

だが、服部は達也を一切見ようとしない、無視である。

そんな二人を、鈴音は冷静に、あずさはハラハラしながら、真由美は感情の読めないアルカイツクスマイルで見ている。王馬もおもしろそうに見ているが、隣にいる深雪は神妙な顔でいた。

服部「過去、二科生<sup>ウイード</sup>を風紀委員に任命した令はありません。」

摩利「先程から差別用語を連発しているようだが、禁止されているものだぞ？委員長である私の前で堂々と使用するのはいい度胸だな。」

摩利の叱責とも警告ともとれるセリフに服部は怯んだ様子を見せなかった。

服部「取り繕っても仕方ないでしょう。それとも、全校生徒の三分の一以上を摘発す

るつもりですか？

一科生<sup>ブルーム</sup>と二科生<sup>ウイード</sup>の間の区別は、学校制度に組み込まれた、学校が認めるものです。そして、一科生<sup>ブルーム</sup>と二科生<sup>ウイード</sup>には、区別を根拠付けるだけの実力差があります。

風紀委員は、ルールに従わない生徒を実力で取り締まる役職だ。実力に劣る二科生<sup>ウイード</sup>には務まらない。」

傲慢とも言える服部の断言口調に、摩利は冷ややかな笑みで応えた。

摩利「確かに風紀委員会は実力主義だが、実力にも色々あってな。力づくで抑え付けるだけなら、私がいる。」

相手が十人だろうが二十人だろうが、私一人で十分対処できる。この学校で私と対等に戦える生徒は七草会長と、『十文字』会頭だけだからな。

君の理屈に従うなら、実戦能力に劣る秀才は必要ない。

それとも、私と戦ってみるかい？服部副会長？」

王馬「へえ……あんたおもしれえな……」

摩利の言葉に感化されかけていた王馬は摩利の方をジツと見る。そしてニタリと笑う。それを見たあずさはほとんど泣いているような状態だった。いつこの男が爆発するのか、それも時間の問題だ。

服部「私のことを問題にしているではありません。彼等の適性の問題だ。」

摩利「実力にも色々ある、と言っただろう？達也くんには、展開中の起動式を読み取り発動される魔法を予測する目と頭脳がある、……王馬に関してはまだ分からないことだらけだが、いずれ……私達に並ぶかもな。」

服部「……なんですって？」

予想外の言葉を聞かされて、服部は反射的に問い返していた。予想外というよりも信じられないという方が正しいかもしれない。

摩利「つまり彼には、実際に魔法が発動されなくても、どんな魔法を使おうとしたかが分かる、王馬に関しては私が評価する。そのままの意味だ。」

摩利の答えは変わらなかった。

摩利「いやなに、達也くん自身に聞いたんだ。影でこつそりとな。王馬に至っては私も真由美もこの目で見ている。」

CADをいきなり向けられたが物ともしない。蹴り壊してしまったさ、盛大にな。それに、こちらとしても便利だ、わざわざ魔法同士での争いになるのなら体術で抑えてしまった方が速いだろう？」

服部「…しかし、実際に違反の現場で、魔法の発動を阻止出来ないのでは…」

摩利「私の話を聞いていなかったのか？達也くんは分かんが、実際王馬は阻止しているんだ。それに、そんなものは第一科の一年生でも同じだ。二年生でも同じ、魔法を後から起動して、相手の魔法発動を阻止できるスキルの持ち主が一体何人いるというんだ？凶器を向けられて臆せず立ち向かう人間が何人いるというんだ？それに、私が彼等を委員会に欲する理由はもう一つある。」

王馬「ふあゝ…まだかよ。」

深雪「……」

摩利「今まで二科生の生徒が風紀委員に任命されたことはなかった。それほつまり、二科の生徒による魔法使用違反も、一科の生徒が取り締まってきたということだ。」

君の言うとおり当校には、一科生と二科生の間に感情的な溝がある。一科の生徒が二



科の生徒を取り締まり、その逆は無いという構造は、この溝を深めることになっていた。私が指揮する委員会が、差別意識を助長するというのは、私の好むところではない。」

真由美「はあ……すごいですね、摩利。そんなことまで考えていたんですか？私はずきり、二人のことが、特に王馬くんのが気に入っただけかと。」

王馬「お、そうなのかい？俺もあんたのこと嫌いじゃないぜ。気の強い女もいいもんだな。」

鈴音「お二方、そんな話しないでください。」

二人によつて空気が壊れかかったが、鈴音によつて静止された。

しかし、それでも尚毒素が抜けることは無かった。

未だに真剣な眼差しを向け、威嚇するかのように歯を尖らせていた。

服部「会長……私は副会長として、司波達也、十鬼蛇王馬の風紀委員就任に反対します。」

渡辺委員長の主張に一理あることは認めますが、風紀委員の本来の任務はやはり、校則違反者の鎮圧と摘発です。

魔法力の乏しい二科生に、風紀委員は務まりません。

この誤った登用は必ずや、会長の体面を傷つけることになるでしょう。どうかご再考を。」

深雪「待つてくださ……王馬さん……？」

深雪が少し声を荒げ反論しようとしたがそれを王馬が遮るかのようにして前へ前へとズカズカと踏み込んでいった。

その顔は笑っているが、とても妖しく、不気味な顔をしていた。

王馬「さつきからペラペラとうるさいねえ……」

摩利「な……王馬「ワタナベマリ、気が変わった。」……え」

服部「なんだ、またお前か。たとえお前が抑止力を持っていたとしても認めないぞ。上級生に対する態度、それに我々は生徒会のメンバーだぞ。分を弁えろ。」

王馬「んん？そんな事はどうだつていいんだよ。ブルームやらウイードやらよお……いつテメエ等が上つて言つたよ。」

服部「は……そんな事、試験の結果だ。結果はそのまま反映されるに決まっているだろう。現にお前はペーパーテストでの結果が最下位と聞く。この時点で上下関係が生まれているだろう。お前はそんな事もわからないのか？いや、わからないだろうな、最下位には。」

摩利「おい！」

真由美「その発言、分かって言ってるの？」

深雪「ッ！」

達也「深雪？」

深雪がキレた事は確かだ。

確かに王馬という人間は素行が悪く、傲慢で気に入らない人間だろう。だが、深雪にとつては違うのかもしれない。

服部副会長の皮肉のこもった発言に反応したのは確かだ。

他の者からしては『生徒会たる者が、そんな発言は許されない』と言った意味合いであるだろう。

だが、深雪は違う。『王馬、個人に対して』の意味だろう。

王馬「そんなに俺の事が嫌いかい？」

服部「当たり前だ。はつきり言つて目障りだ、虫唾が走る。」

当の王馬は何も気にしていない様子だった。

服部の述べる事全てを否定ではなく、相手にしていないなかった。涼しい顔で仕方なく聴き通しているようなものだった。

王馬「じゃあ、俺と闘たたかってみるかい？」

摩利「！」

真由美「！……王馬くん……」

達也「なっ……」

深雪「王馬さん！」

服部「は？」

王馬の発言に言葉を失ったのは服部だけではなかった。

真由美も摩利も、達也も深雪も他の者達も一瞬時間が止まった。全員の視線が集まる中、服部の身体がプルプルと震え始めた。

服部「思い上がるなよ！補欠の分際で！」

小さく悲鳴を上げたのは、あずさか。

上級生達は流石であろうか平静を保っていた。

達也は眉間に皺を寄せ、深雪は王馬を心配しているのか目を見開き口がわなわなと震えている。

王馬「そう怒んなよ、あーちゃんが泣いてんぞ？」

あずさ「！」

王馬の声によって我にかえるあずさ。少し頬を赤く染め恥ずかしそうに顔を両手で隠す。王馬は微笑気味に服部を見ている。

服部「何がおかしい！」

王馬「弱え犬ほどよく吠えるって言うだろ？あれだよ。」

服部「なっ！……貴様……ッ!!」

きつと今の服部の顔は般若のような顔になっている。

青筋を浮かべ王馬を睨みつけている。

摩利と真由美は王馬の発言に少し笑ってしまった。

だが、そんな事、今の服部には関係なかった。

許せなかったのだ。一年生に言われるのが、二科生に言われるのが、最下位に言われるのが。

王馬「別にフーキーンなんてのはどうでもいいんだよ…ただ、テメエの上から目線が気に食わねえんだよ。

どっちが挑戦者か試してみるかい？」

服部「……いいだろう。身の程を弁えることの必要性をたつぷり教えてやる。」

二人のにらみ合いは終わらない。

真由美も摩利もそれを楽しそうに見ている。

あずさにはその感情が分からなかった。

真由美「私は生徒会長の権限により、二年B組、服部刑部と一年E組、十鬼蛇王馬の模擬戦を正式な試合として認めます。」

摩利「生徒会長の宣言に基づき、風紀委員長として二人の試合が校則で認められた課外活動であると認める。」

真由美「時間はこれより三十分後、場所は第三演習室、試合は非公開とし、双方にCADの試用を認めます。」

模擬戦を、校則で禁じられている暴力行為、喧嘩沙汰としないための措置。真由美と摩利が敵かと形容して構わない声で宣言すると、あずさが慌ただしく端末を叩き始めた。

王馬「あんたからは何も感じねえな。」

服部「感じる機能すらも持ち合わせていないんだろな。」

—————

第三演習室に移動すると王馬は辺りを見渡していた。

それが終わると軽くストレッチをする。本人曰くこの試合自体がストレッチらしいが、かつこいいところで躓いたら変だろう、とのこと。

摩利「王馬、CADの使用は？」

王馬「そんなもん使わねえよ。」

服部「貴様は……」

服部はボソツと悪態をつく、王馬がCADの仕様を拒み摩利はそれに待ったを掛けるが、どうしても要らないというのでそのまま通すことにした。

達也と深雪は理由こそ知っているものの、口には出さなかった。どっちが勝つかより

も、王馬の強さが知りたい、それだけだった。

摩利「服部は当校でも五本の指に入る遣い手だ。どちらかと言えば集団戦向きで、個人戦は得意とはいえないが、それでも一対一で勝てる奴はほとんどいない。」

それだけを言うと言摩利はそのまま中央の開始線へ歩いて行つた。それからルールの説明が行われていたが、別に王馬は気にする必要も無かつた。

この勝負自体彼には明白だったのかもしれない。

服部は腕輪形態の汎用型CADを使用とする。

多様性に優れた汎用性、スピードでこそ特化型が上だが、そもそも相手はCADを使用しない。しかも一年と二年、一科と二科、彼の目には確信があつた。

服部は左腕のCADに右手を添えて、王馬は構えもせず突つ立っている、場が静まり返る。

摩利「始め！」

王馬と服部の公式な試合が火蓋を切つて落とされた。

服部の右手がCADの上を走る。

単純に、三つのキーを叩くだけとはいえ、その動作には一切の淀みがない。彼が本来得意とされる術式は、中距離以上の広範囲を攻撃する魔法。近距離戦は苦手としていく。が、それも『どちらかと言えば』の話であり、決して苦手というわけではない。

摩利、真由美、『十文字』この三巨頭から一步譲るかもしれないが他の生徒、教師にも引けをとらない。

そして起動式を展開し、魔法の発動態勢に入った。

狙いは一人、何も仕掛ける様子はない。

基礎単一系統の移動魔法。

魔法式に捉えられた相手は、十メートル以上を吹き飛ばされ、その衝撃で戦闘不能になる。

…が、

王馬「いい技持ってんじゃん♪」

服部「何ッ!？」

王馬はそれを掻い潜ってきた。いや、躲された？

何にせよ広範囲の魔法を避けるなど無理だ。

だが、王馬は易易とそれをやってのけた。

服部もそれには呆気にとられる、勿論他のメンバーもだ。

達也や他のメンバーからの見解は、王馬は近接戦を得意としているように見ている。ならば、中、長距離戦闘を申し込まれば勝つことはほとんど無い。

言ってしまうと、いくら服部が近接を得意とせずとも、自分の範囲内を作ってしまう



戦況だ。

だが、王馬はそれを避ける片鱗を見せた。…つまり、そうだ。

全員（（（（超スピードによる近接移行…））））

それから服部は王馬に向けて魔法を放つ。

だが、全てを避けてしまう。

王馬「おらおらさつきまでの威勢はどうした。」シユンツ

向かってくる魔法を次々と避ける。

かなり余裕があるのか、アクロバティックに…これはかなり侮辱しているということ

とみなしている。

戦場でバク転などして避けたり攻撃したりするのは映画などでは見たことあるだろ

う？だが、実際にそんなことすれば”死”あるのみ。

服部「なめやがって！」

放つても放つても躲かれてしまい勝負にならない。

この状況を良く思うはずがない。今、この状態は自分の距離である服部。だが自分の

得意とする距離でないのは面白くない、当然のはずだ。

摩利「想像以上だ…そんなに余裕が…」

上体を反らしノールックで避け、服部の近くまで行くとまた下がる。敢えて攻撃を仕

掛けないのはこの場の誰もが見て分かっていた。

服部「はあ…はあ…お前も攻撃したらどうなんだ！」

王馬「おう。じゃあいかせてもらうぜ！」シユンツ

達也「速い！」

ほとんどの者がしつかりと目視出来なかった。

服部でさえも、時間にして一秒にも満たない速度、かなり離れていた距離が一瞬にして縮まった。

服部が気づいたのは…

服部「ガツ…!?」ドスンツ

王馬の放った左ジャブ一発だ。

一応両腕で防御はしたものの地に足が着いていなかったのか大きく吹き飛び、壁にヒビが入る。

服部「何だ…この、馬鹿力は…」

再び戦闘態勢に入ろうとするが腕が中々上がらない。

ビリビリと痺れているのか、言うことを聞かない。

王馬はこちらを見て、へっ、と笑う。

服部「舐めるな！」タツ

王馬の嘲笑に感化され今度は服部が近接戦闘へと持ち込む。王馬程でら無かったがかなりの速度で懐に入り込む。

もちろんこれに気が付かないはずもなく…

服部「くっ…くっ…はっ…！」

ヒュン…ヒュン…シユ…

空を切る音しか聞こえてこない。

この状況は如何にも遊ばれているようにしかみえない。

上級生達は王馬の事を見直しつつあった。

あの態度に見合った強さを彼は持っている。

しかもまだ底を見せた様子はない、きつとウォーミングアップにも満たないこの試合、ここで勝利は決していたかもしれない。

深雪「…凄い。」

達也「パワー型か…？いや、スピードが異常に速い…」

深雪は呆気にとられ、達也は考察に入る。

放たれた左ジャブは、ジャブにしても威力が桁違いすぎる、それにしても速すぎる…

考察の沼に浸る達也は更に思考を深めた。

もう何十発と放たれた拳に蹴り、そして魔法。

いずれもかすりもしない。もはや、ただの扇風機でしか無かった。服部はだんだんと汗をかき、呼吸も荒くなってきた。

服部「くそ！」

もう一度力を振り絞り、高出力で魔法を放った。

先程放たれたものよりも高威力、そして広範囲。

摩利はここで待ったを掛けようとしたが王馬がそれを制した。

当の王馬はステップを踏むでもなく仁王立ちをしている。

深雪「お兄様！王馬さんが！まともに当たれば怪我では済まされません！」

達也「待つんだ深雪、あいつは何かを狙っているはずだ。」

心配する深雪とは逆に王馬の次の行動が気になっていた。

再び起動式を立ち上げ、王馬を捉え出力が高まっていく。

それでも尚動く事はない。

そして、放たれた：

摩利は間に割って入ろうかと考えもした。

真由美もこれはやり過ぎだと考えた。

深雪は王馬が心配で仕方が無かった。

それぞれの思惑が渦巻いた。

直撃まであと少し…

王馬「待ってたぜ…その技。」

ヒュン

そして直撃した…

摩利「な…何…何…何…?」

真由美「今の…は…?」

深雪「…王馬…さん…?」

鈴音「今のは一体…」

あずさ「…え…?」

達也（ツ?!…魔法を使っていない!!なのに何故!!）  
驚きの嵐だった。

魔法を喰らったものは壁に叩きつけられていた、

まだかろうじて意識は残っているか、相手を強く睨んでいる。重症、というわけでも無さそうだがこのまま続けければ間違いなく危険な状態になるであろう。

服部「な…なぜ…！」

服部は驚いた。

なぜなら、”叩きつけられたのは自分”だったからだ。

王馬「驚いたかい？自分の技でやられるなんてどんな気分だい？」

はつきりいうと服部の放った魔法は王馬に直撃した…はずだった。王馬に触れ、吹き飛ばかと思われたが何故か服部の元へと返されていた。

王馬は特別大きな動きをしたわけでも無い、それに魔法を使った形跡すら見られない。

生徒会メンバーも達也も深雪も何が起こったのか分からなかった。

そして王馬は倒れ伏す服部の元へと歩み寄る。

服部「何を…した…！」

王馬「ん？そのままそっくり返してやっただけだよ。もういいだろ？」

服部「ふざけるな！…俺はまだ…！」

王馬「まだ？そりや違うだろ…！」

王馬は脚を少し上げ服部を見下ろす。

摩利はここで止めておけば良かった。こんなのはただの死体蹴りだった。勝負は決まっていた。

王馬「あんた、もう終わってんだよ。」

ズチャ

服部「グツ…!?」ピク

顔面への踏みつけ、服部は意識を保てるわけもなく、そのまま気絶した。その証拠に痙攣を起こしている。

真由美の心配は杞憂でしかなかった。やり過ぎたのはどっちだ？無論、王馬の方だった。

踏みつける時のその顔は当たり前のような顔をしていた。

正に”悪魔”だった。

摩利「……あ、……勝者、十鬼蛇王馬。」

この場にいる者は啞然としていた。

達也も、ここまでは思っていないかった。

それに、魔法を発動させず圧倒、それに反射？どんな冗談だ。

魔法を制するには魔法のこの世の中に、彼は否定するかのようによに己の力だけで圧倒した。

王馬「どちらが挑戦者チャレンジャーか分かったかい？ハットリギョーブシヨージョーハンゾウ。」  
未だに見下すその視線は自分たちにも向けられているような錯覚を覚える。

深雪「…！」

深雪はまた一つ近づけたのかもしれない、あの夢の続きへと。

王馬「やっぱりあんたからは何も感じなかったぜ。」

男は全てを見下していた。



## 第5話 操流

摩利「…勝者、十鬼蛇王馬…」

そう言った彼女は今でも信じられない顔をしていた。

一科生と二科生という差は、縮めることはとても難しい事だ。それに、この高校の中でも五本指に入る強者、生徒会役員という肩書を持つ……それがどうだ？

簡単に倒されてしまったではないか…魔法も使わず、全力も出さず…

真由美「…そんな…」

真由美も驚いた表情だ。鈴音もあずさも。

それは達也とて例外ではない。

前々から異質な空気を放っていた王馬を危険視していたのは事実だ。彼が強いことくらいは想定していたとしても、ここまでになるとは想定していない。

それに、達也は服部の強さくらいには気がついていてた。

勝てないか、と言われれば嘘になるが、強者としては認めていた。

王馬「これでよし、と。」

服部は現在気絶している。

鼻からは血、それに何箇所か折れているかもしれない。

普通、ルールに則って禁止される行為だが、これに気がつけなかった摩利に責任が問われるだろう。

踏みつけさえ止めておけばここまでにはならなかったはずだ。だがそんな事よりも

： 摩利「王馬：お前は何をした？なぜ触れた筈のお前が吹き飛ばず、服部の方が吹き飛ばされたのだ？」

王馬が行った事に興味が湧いた。

彼は服部から放たれた魔法を避ける事もなく正面で受け止めたはずだったが、吹き飛ばされることなくその場に立っていた。

それに奇妙なことか、吹き飛ばされたのは服部の方であった。上手く視認出来なかったが、まるで魔法を反射されたような出来事だった。

王馬「魔法を利用したんだよ、それだけだ。」

摩利「なっ：じゃあお前は反射系の魔法を得意とするのか？」

王馬「反射、か。反射とはちよつと違いけどまあ：そんな感じだな：あと俺は魔法は使つて無えぞ。」

驚きの嵐は連発であった。

魔法を返すなら魔法でしかない。それは誰もが分かっていること。しかし、彼は魔法式を立ち上げる素振りすら見せずそのまま反射した。

訳の分からない状況に誰もが啞然とした。

王馬「分からねえなら試してみるかい？なあシバタツヤ。」

達也「！」

深雪「お兄様。」

王馬「ちようど相手が居なくなつたんだ。いいところにお前が居たぜ。それに、ワタナベマリの言うテストなんだろ？じゃあ俺と闘やる以外無えよな。」

彼の達也を見る眼は服部の時とは違っていた。

服部の時は気だるげそうな顔であつたが達也の時は、まるでやる気が入っている時の眼。

それに達也自身も感じ取れていた。今までよりも大きなプレッシャーを浴びせ続けていると。

達也はここで確信した。王馬に勝つには最初から全力、または封じられた力を解き放つしか無い、と。

また、それでも足りないのかもしれない、と。

もはや試合は”死合”へと変化しそうになっていた。

摩利「確かに、服部があれじゃあ無理だな。達也君、出来るか？」

達也「…ええ。分かりました。それに先程の技に興味がありましたので喜んで受けさせていただきます。」

摩利「…分かった。では少し時間を「必要無えよ、さつさと闘ろうぜ。」…！…王馬！  
いくら圧勝したと言えど体に疲れが溜まっているかもしれないだろ。」

王馬「あんなの準備体操だよ。…シバタツヤは、強いな。」

達也「！…その言葉、そっくり返すよ。」

これより急遽行われる事になった模擬戦。

普通なら服部が二人まとめて相手をする予定だったが、予定が狂わされたため”王馬VS達也”へと変更になった。

達也は普通なら勝つ気でいかなかったが、こればかりは集中して闘わなければいけなかった。

少しでも気を抜けば呑み込まれるのは自分だと、殺されるのは自分だと思い知らされた。

深雪は兄を優先して、応援するかと思われたがそうでもなかった。ならば王馬を応援しているのかというところという訳でもない。複雑な心境であった…

摩利「ルールは先程と同じだ。続行不可能となった時点で試合終了とする。」

それぞれが配置につき、構える。ギャラリーは先程よりも盛り上がりつつある様子だった。

真由美「ねえ、どっちが勝つと思う、リンちゃん。」

鈴音「達也君と答えたいのですが、王馬君のあれを見せられると悩みますね。広範囲魔法を避けるなど普通は出来ることじゃないので、それに彼の”素”の強さ。底が見えません。」

真由美「なるほど。深雪さんはどう思う？」

深雪「お兄様の強さは私が一番良く知っています。……ですが、王馬さんは”同等か”  
或いは……”」

真由美「……そう。」

深雪は眉間にしわを寄せ、心配をする。

それは王馬に対してではなく達也に対してである。

達也は強い、それは深雪が知っていることだ。

しかしどうだ、絶対的であつた兄に並ぼうとしている存在が居るではないか。

深雪は現在、手を合わせてもいない状況で二人の強さは五分五分と見ていた。

摩利「双方とも準備はいいな？それでは……」

摩利が手を挙げる。両者は戦闘態勢に入る。

摩利「はじめ！」

摩利の声が轟くと仕掛けたのは達也の方だった。

王馬に勝るとも劣らない超スピードで直様死角をとる。

そして特化型であるCADを構え、魔法を放つ。

…が。

達也「…！…居ない！」

王馬はそこに居なかった。

自分は王馬よりも速く動き、音も立てずに死角へと移動した。…しかし、それはもう気づかれていた。

王馬「速えじゃねえか！」ドゴツ

達也「ぐっ…！」ザザザ…

今度は逆に達也が死角から攻撃されていた。

服部に当てた左ジャブ、達也はなるほどな、と思った。

服部のオーバリアクションかと思ったが、これほどの威力ならば吹き飛んで当然だ。

王馬「効いたかい？」

達也「まだまだ…」

そして達也はまた高速移動を行う。今度は魔法を使って、だ。きつと素での動きでは先ず彼に攻撃を当てられない。

ならば、もつと速く移動するだけのこと。

王馬（魔法か…さらに速くなりやがったな…）

達也はこのまま距離を空けた戦闘にすることにした。

達也自身術を会得しているが、通用しそうにないことを既に悟っていた。

だがここで達也にさらなる試練が与えられる。

達也（あの構えは…）

摩利（この場に来てやつと構えたか。なら、達也君を相手として認めたとということなのか？だが、魔法を使うような素振りは見せないな。）

真由美（あの構え、ボクシング？それにしても、上体が浮いているような…）

深雪（…ッ！ここに来てやつと戦闘態勢！お兄様、御気をつけて！）

王馬はこの場に来てやつと構えをとった。

ボクシングというには上体を起こしている、そう、彼のとつた構えは“キックボクシング”に近い構えだ。

達也（注意をしなければ…）

達也は王馬の背後をとり特化型を向ける、そして魔法を放つ。

王馬「速くなっても一緒だぜ！」スルツ

王馬はそれを回避し、達也を目で捉えていた。

達也（これで気づかれているのか!?!）

ならばと不規則な動きをし、王馬を攪乱するように動く。

そして特化型を放つ。それを二度繰り返し返した時…

王馬「へ…ちよこまかとうるさいねえ。」ダツ…

達也「何っ!?!」

達也の目前まで迫ってきていた。王馬は服部との模擬戦の時も構えをとらず高速移動をしていた。

ならば構えをとって移動を行えば、その倍以上は速くなる。素の能力で達也の世界に追いついてこれていた。

そして…

王馬「…」シュツシュツシュツ…シュツ

達也「ぐっ…」ガスガスガス…ドゴツ

左ジャブを二発そして右ボディからの左ハイキック。

達也と王馬の身体能力の差は、かなりある。

若干王馬のほうが大きい、だが、その体からありえない程のスピードで攻撃してくる



ため、対処の仕方が難しかった。そのうえ一撃は重いときた。

達也「ちっ…!」

王馬「逃げてても無駄だぜ。」

シュツ…スルツ…ドスンツ…ドガツ…ドゴツ…ドガンツ…

達也も王馬が魔法を使つてこないため悪手を強いられていた。達也は『グラム・デモリッション術式解体』を使うことが出来るが使いようがなかった。

武器を使わなければ魔法も使用しない、自分の体術では通用する可能性が低い。

かなり詰んでいた。

するとここで達也は余裕を見てバックステップで王馬との距離を空けた…ここで達也に試練と好機が与えられる。

達也「ぐはっ!」

摩利「何っ!?!」

真由美「嘘!」

深雪「拳は当たっていないはず…なのに何故!」

達也がバックステップで王馬の攻撃を躲したが、その際に王馬は一回だけ拳を突き出した。そして、達也に攻撃がヒットした。

ギャラリー達は原理が分からなかったが、天才か、達也はこの一撃で原理が分かった。

達也「お前、拳にサイオンを纏ったな……」

王馬「頭良いねえ。もう気づきやがったか。」

人間の体内には想子が保有されており、それを消費し魔法師は魔法を使用する。これは「魔法力」とも呼ばれ、これが多いほど大規模な魔法を使用することが可能である。想子とは消費して使うものだが、王馬はそれを攻撃として扱った。

彼らしいといえそうなるが、こんな事、普通はあつてはならない事だ。

王馬「反撃しねえとまじで終わっちゃうぞ！」

達也「ぐっ！」

一度踏み込んだだけで目前までやってくる。

そして両手に纏ったサイオンを放つ……いや、殴る。

達也はかろうじてそれを避け、転機を伺う。

ジャブ、ストレート、フック、ボディ、アッパー、ローキック、ミドルキック、ハイキック。

色々な攻撃を繰り返して来る、しかもその間5秒未満。

王馬は未だに涼しい顔をして腕を、脚を振り続けている。

達也「くそっ……」

直撃とはいかないが、掠ってしまう。

恐ろしいのが掠っただけなのに、大ダメージを受けたような感触。だんだんと蝕むような痛みが襲う。

そして攻撃の嵐は止まない。

王馬「あんた本当に終わっちまうぜ！」スツ

王馬の左ハイキックが達也の顔面に近づいてくる。

そして生徒会メンバーは達也の負けを確信しかけていた。

唯一深雪だけは挽回の余地があることを祈っていた。

そして左ハイキックが直撃……するかと思われた。

達也「待っていたぞ……」

達也は左手に持ったC.A.D.を王馬に向け、魔法を放った。

王馬「！」

すると王馬の両手足を纏っていたサイオンが弾け飛んだ。

達也「ふん！」ガシッ

達也は王馬の脚を掴み、そのまま背負投……これに賭けた。

王馬を地面に叩きつけるがすぐさま起き上がってくると、

顔面にモロ、右ハイキックが直撃した。

達也「ガハッ！」ゴロゴロゴロ

王馬「いやあ、あんたそれを使うんだな。油断してたぜ。」

王馬はなんてことのない表情をしながらまた立ち上がる。

達也は右ハイキックを喰らい、地面にゴロゴロと転がっていく。

先程、王馬の纏ったサイオンが弾け飛んだのは達也の行った術式解体のせいだ。

圧縮したサイオンの塊をぶつけ、対象の術式を吹き飛ばす対抗魔法。

かなりの高等技術であり、戦闘において使用するものは少ない。

生徒会のギャラリー達もこれには驚いていた。先程から王馬が目立っていたため分

かりにくかったが、達也も充分、規格外の間人だという事に気がついた。

だが、それでも深雪の顔が晴れることはなかった。

あれからかなり時間が経った。サイオンを纏い、達也が打ち消して、それを何度繰り返しただろうか。それでも形勢逆転という訳にはいかなかった。

そしてしびれを切らしたのか、吹っ切れたのか、達也はいつの間にか近接戦闘へと移行していった。

両手にデバイスを持ち、魔法を放つ、そして避けられる。

何度繰り返したのかも考えられなかった。

達也「ふ……！……くっ……！」

達也は久方ぶりに勝負を楽しんでいた。

戦いとは楽しむ余地もなく、待っているのは“生”か“死”のみだ。彼は圧倒する力こそ持っているものの、楽しむ力なんてのは持ち合わせてはいなかった。

真剣に戦って、妹を守り抜いて今日を生きる、それだけだった。だが、そんな達也は今笑っている。

王馬（楽しいかい…シバタツヤ。）

この男も例外では無かった。

達也「はっ！」

王馬「…」

また、王馬の纏っていたサイオンは弾き飛んだ。

そう、術式解体だ。そして動きが読めてきた達也は王馬の右ストレートをぎりぎり躲す。そして特化型へとチェンジ、撃ち出させるのは達也の魔法であった。

だが…

王馬「惜しいな…もうちよつとだったぜ。」

それをミリ単位で躲す。

…が。

達也「そつちは惜しいがこつちは確実だ。」

王馬「…何。」ガクツ

ここにきて司波達也に勝機到来か。

特化型を向けたがそれは端から囷だ。

狙いは、魔法を回避して体制が不安定な王馬への一撃。

ここで、達也の体術が活躍する時がきた。

達也「はっ！」

自分の持つている力を振り絞り、サイオンを右手に集中させる。王馬と同じ事をして返す。

そして狙うは顔面、射程距離まで遠くとも近くもない。

ベストな角度と距離。

よりダメージが出せる位置にいた。

そして一気に突きだす。

王馬「へっ…」ニヤツ

駆け引きに敗れたのは…

摩利「な！あの動きは！」

真由美「ボクシングじゃないの!？」

鈴音「まさかあれは…」

あずさ「何が起こったんですか…?」

深雪「…そんな…お兄様が…」

驚愕する理由…それは…

達也「へ…」ガクンッ

達也が駆け引きに敗れたからだ…

王馬「残念だったねえ…シバタツヤ。」

男の顔は笑っていた。

まず状況を整理しよう。

達也と王馬は魔法とサイオンのぶつかり合い、近接での勝負をしていた。序盤では王馬が近接での圧倒劇を見せていたものの、達也はだんだんとスピードに追いついてこれるようになっていた。

そのため、スピードでは互角の位置にまでたどり着いていた。だが、パワーでは王馬が勝っていた。

そして、達也の仕掛けた駆け引き、体術、複数デバイス操作、術式解体、と、出せるものは全て出し尽くした。

体術で渡り合い、複数デバイス操作で惑わせ、術式解体で無効化させた。それを口ポットのように正確に、丁寧に繰り返した。

一瞬、王馬の打った右ストレートに微々たるブレがあった。それを狙って術式解体でサイオン無効化、攻撃を躲す、そして放たれたのは特化型からの魔法…この二つを囿に使い、真の目的は達也自身の右ストレート。

王馬に当たったかと思われたが、左手で受け止められていた。達也はダメ元で更に力を加える事にした。

押せるだけで良かった…そのはずが達也の膝は地についてしまった。

完璧な作戦だった…周りが見ても明らかだった…だが…

それでも王馬には技があった。

達也「なにをしたっ…」

王馬「知りたいかい？ いや、あんたなら察してんだろうけどよお…」

達也「っ…！」グググ

この時、司波達也は最悪な判断をした。

頭に血が上っているのか、久しぶりの追い詰められたため、焦っているのか…どれも分からないが取った行動は不正解。

さらに力を加えてしまった。



達也「なんだと…」ガクツ

王馬「頭に血が上ってんぞ…」

王馬は不動だったが、達也だけが動いている。

王馬を中心とし、逃げられないかのように。

達也は力を乱されていた。

達也（こいつ！キックボクシングじゃないのか！…この技は“合気道”の技に違いない…！）

そう、達也は“意図的に力を乱されていた”。

生徒会メンバーも、深雪も、何が起こっているのか分からなかった。優勢に見えた達也が、いつの間にか逆転されている不可解な光景に…

達也「ならば…」

王馬「おつと止めときな…そしたらためえ暴走するぞ？」

達也「ツ！…気づかれたか…」

達也はもう一度サイオンを攻撃手段として使おうとしていた。サイオンで爆発させ、一旦距離をとる、それも見破られていた。

達也（わずか数ミリ…たかが数グラム…

たったそれだけが…！）

達也の推理によると、王馬の技は、自分が攻撃を仕掛けるのを見計らってほんの数グラム：数グラムだけを加重して、自分の力の流れを数ミリずらしている、のだと言う。その結果…

達也（力の流れは乱れ、暴走する!!）ガタンッ

少しでも力を加えてしまった達也は仰向けに、地に叩きつけられた。それでも達也の右手は王馬の左手から離れることは無かった。もしあそこで違う判断をしていれば、王馬に触れなければ、勝機はあったのかもしれない。そしてここで達也は新たな出来事に気がついた。

服部が放った魔法を返されたのも反射では無い、自分と同じく流れを操られたのだと理解した。

達也（十鬼蛇王馬：お前は、力の潮流を支配下に置いているのか…：体術の浅い俺がたどり着ける領域では無かったのか…）

既に勝負は決していた。

達也は本気を出せば殺傷能力の高い魔法を扱う事が出来る。だが、これはそれをやるための闘いではない。

次第に摩利の声が響いていた。これ以上は危険だと察知したのだろう。達也は初めて悔しいと感じたかもしれない。

こんなに楽しく、心躍りハラハラする闘いは滅多に出来ることではない。

達也は一言王馬に告げた。

達也「…参った。」

勝負は決した。

—————

深雪「お疲れ様です、お兄様、王馬さん。」

達也「ありがとう、深雪。…こんなに昂ぶつたのは初めてかもな…」

王馬「…へっ…アンタ本当はまだ隠してんだろ？俺にはバレバレだぜ？」

達也「そういうお前もまだまだ隠しているだろう。」

王馬「まあな。でも、アンタ強かったぜ、ありがとなシバタツヤ。」

達也「ああ…こちらこそ。」

達也はまだ力の感覚が乱されていたのか右手で体を起こそうとはしなかった。左手で重い体を起こし立ち上がると、

王馬と握手をする。この戦いによつて達也から見て王馬の評価はかなり上がっただろう。相変わらず危険人物というレッテルを貼り続けているが、”悪質な事など考えていない”というのは分かりきつた。

こいつはただ”強者との戦闘を好み、自分を信じて止まない”存在という事がわかっ

た。

達也（天上天下唯我独尊…という奴かな…）

対する王馬も達也に対する評価は上がっていた。

はつきり言うとう王馬は達也の事を”互角かそれ以上”の存在として認知している。

まだまだ他の魔法がある事に王馬は気づいていた。

ならばなぜ達也は敗けたのか？と疑問符を浮かべるかもしれないが、王馬のし掛けた技、力の流れを支配する技は、まず初見で見抜ける者は0と言ってもいい。

それほどに巧妙で、見抜く事が難しい技だ。

言ってしまうえばこれは”負けイベ”の様なものだ。

勝負に敗れはしたものの一度の手合わせで達也はこの技について既に見抜くことが出来ている。それに王馬も気付いている。そのため、王馬は達也に対して”強者”である、と認めていた。

あ、だが服部は見抜けていないため、評価は下がっていた。

真由美「王馬くん、あの技についてなんだけど…」

王馬「あ？さっき言っただろ。」

あずさ「あれだけじゃわかりません。」

王馬「ちっ…めんどくせえな。」

摩利「お前はキックボクシングスタイルで闘い、サイオンを身に纏い攻撃をしていた。サイオンを魔法に使うのなら分かるが攻撃に繋げるとは……まあこれも凄いことなんだが……最後の技が気になってな。」

王馬「やだよ、さつき言ったじゃねえか。」

深雪「王馬さん……私も知りたいのですが……ダメですか？」

模擬戦が終わると早速質問攻めときた、王馬はあまり質問されたり、受け答えたりするのが好きではない。

それに、自分の技の原理なんて話したくないのは普通だ。

王馬「はあ……シバミユキが言うなら別にいいけどよ。」

摩利（え、甘くないか？）

真由美（私たちが下なの!?!）

あずさ（も、もしかしてあのお二人って……）

鈴音（意外ですね……）

達也（深雪ならいいのか……）

深雪「ありがとうございます！」

それから王馬は、服部と達也に使った技の原理を説明した。『攻撃を利用した攻撃であつて反射とは全く異なるもの。』相手の攻撃の軌道を変え、そこに自分の力を加えるこ

とによって相手の攻撃を乱す、という技。

体術で言えば”合気道”に近いだろう。だが、違うのは”魔法”も乱してしまうところだ。

摩利「それじゃあ相手の魔法に、自分の魔力を少し加えている、ということか？そして軌道を変える……実質反射じゃないか……滅茶苦茶だぞ。」

真由美「まさかボクシングスタイルからあんな技が出るとは思わないじゃない。脳筋系かと思つたら技巧系なのね。」

王馬「筋肉だけじゃあ足りねえからな。」

鈴音「訂正しなければなりませんね。ですが、あなたの素行が悪い事は確かです。」

あずさ「これでCADを使つてないんですよね……」

王馬は上級生達と仲良く会話をしていた。

それを見ていた深雪は少々機嫌が悪かった。

達也はそんな原因を知るはずもない。

深雪「……お兄様、どこか怪我をしているところはありますか？」

達也「ああ、無事だ。問題ない。」

深雪「それは良かったです。……それにしても王馬さん、強いですね。あのお兄様が負けるなんて……たしかにお兄様はあれ以上の魔法を使えますが、それは王馬さんも同じ

ようですね。」

達也「…そうだな。あいつは強い。」

全員が二人の強さを認めていた。

学年の五本指に入る実力者を圧倒し、高校生とは思えないような戦闘能力を有しており、まだまだ底が見えそうにない。

摩利「二人共、合格だ。是非とも風紀委員に入ってくれ。」

真由美「これで暴力問題が起きても安心ね！収穫収穫！」

達也「ありがとうございます。」

王馬「フーキーーンか…一体どんな奴等が居るんだろうねえ…」俺達のおまけ「は。」

深雪「もう…ですが、改めておめでとうございます。お兄様、王馬さん。」

摩利「確かにあんな試合を見せられたらおまけかもしれないな。」

微笑気味に摩利がつぶやく。

改めて王馬と達也は風紀委員に加入する事ができた。

王馬は風紀委員の職務についてはどうでもよかった。

ただ、強者と闘う事だけを楽しみにしていた。

王馬「楽しくなりそうだ…」

またも男は不敵に笑った。

深雪「そういえば王馬さん。生徒会長を下の名前で呼んだのはなぜですか？」

王馬「だってあいつの上の名前、何て読むのかわからねえんだよ。」

深雪「七草と書いて”さえぐさ”ですよ。もう下の名前で呼ぶことは無くなりましたね。」

王馬「おお……怒ってんのか？」

深雪「怒ってません！」

王馬「なんだよ、怒ってんじやねえか。」

深雪（本当にこの人は……でも、何故か放っておけない気持ちになるのは何故でしょうか……私の敬愛すべき存在はお兄様なのに……）

深雪の気持ちとは一体……？

そして、忘れられた服部であった。



## 第6話 禁句

翌日、心地よい朝だ。とはいっても今日も自身の師である九重八雲との朝練（地獄の模擬戦）から始まる。

深雪は正座をしながら見ている、ような……いつもなら達也だけを視線で追っていたが、何処か儂げな視線を送っている。迷いさえも考えさせるその瞳に、達也も気づかないはずがなく声を掛ける。

だが、『心配ありません、私は無事ですよ。』としか返ってこない。この答えに引つかりを感じてしまい、体術の稽古に集中出来なかった。決して深雪のせい、という訳ではないが何か引つかかかってしまう。

集中出来なかった証拠に、顎に平手、鳩に肘が入ってしまった。おまけに背負投げ。……今日は完敗だった。

普段ならここで『お怪我はありませんか、お兄様？』と、声を掛けてくれるのだが勝負が決した事にも気づきはしなかった。……あれ、嫌われたかな……涙が出るよ。

そしていつものように、深雪の作った軽い朝食を八雲と食べる。相変わらずの美味さだ、そう伝えても『ありがとうございます……』それだけだった。晴れない表情は八雲に

も見破られており心配されても『大丈夫』の一点張りだった。有耶無耶な状態のまま八雲から話を持ち出された。

八雲「どう？あれから変わったことはあるかい？君の話してた友達の事とかさ。」

達也「そうですね、彼と模擬戦を行いました。なぜか風紀委員に任命されて、そのテスト……と。そこで一戦交えたのですが……」

八雲「へえ、君がねえ……で、勝敗は？まあ、言うまでもないか！「負けました。」……何だつて？」

達也は昨日起きた出来事を洗いざらい話した。

どれを話しても信じられない顔をしていたが、実際事実だ。体術では自身があつたが、足元にも及ばなかつた事を話すと少しピリツとした空気になった。

八雲「信じられないけど君が言うならそうなんだろうねえ……ふくん……」

達也「はい。……それと、前回彼の名前について聞いてきましたよね。字は『十』、『鬼』、『蛇』で”トキタ”っと読むみたいです。キラキラネームみたいです。」

八雲「ツ!?……そうか。」

その顔を達也は忘れることは無いだろう。

八雲がここまで取り乱したような顔をするのは初めてかもしれない。達也も初めて見たかもしれない。

改めて”一般人”では無いという事を頭に刻みつけた。

達也「なにか知っているのですか？ だったら教えてください。深雪のためにもお願いします。」

それでも八雲は口を割るような事をしなかった。

ならば、と思いつき達也は思いつきり圧を浴びせた。だが、見向きもせずただ考え事をしている。どうやっても教えてくれなさそうなので折れたのは達也の方だった。

八雲「達也くん、君は普通の人間よりも物事を知りすぎているんだ。それこそこの世のトップクラスに入るほどの知能を持ち合わせているよ。良いことも悪いことも、君は知っている。君はすごいんだよ。」

達也「だったら尚の事……でもね?」……

こちらを……達也と深雪をしつかりと見て八雲は話した。

その声色にいつものおちやらかな感じは無かった。

八雲「本当に知らなくて良い事もあるんだよ?」

達也「……!」

深雪「……!」

二人はいつもの八雲では無いことに気がついた。

いつもなら笑って誤魔化したり、軽く冗談を叩いたりなど優しい顔を見せていたが今

の八雲は違う。

とても警戒しているような気を放っていた。

二人は「そうですか……」とため息混じりの声で呟いた。

それからは無言の空間だった。話しかけようにも話しかけれない。時間だけが過ぎていった。

達也と深雪は高校に行かなければいけないため達也はすぐに着替えて支度をする。

深雪はすでに制服に着替えているため、達也を待つのみであった。

ザッザッザッ……

王馬「ここかい？やたらと強え坊主が居るつてのは。」

三人は同時に驚いた。特に深雪と達也はなにかいけないものでも見てしまったかのような顔になっていた。

八雲は先程よりも警戒心を高めている、が、顔は取り繕った笑顔でいた。

達也「王馬！なんでお前がここにいる！」

怒気……いや、達也も警戒しているため、少し荒ぶったような言い方になる。

深雪「なぜ……なぜここが？」

深雪は怯えている……とは違うが只々困惑していた。

高校で会うなら分かるが、まさかここで会うとは思つてもみなかつただろう。

王馬「噂つてのは風に乗つてくるもんだぜ？」

深雪「そんな滅茶苦茶な……」

理由にしては滅茶苦茶すぎる、司波兄妹はそう思いながら王馬を凝視していた。一方、八雲はという顔色ひとつ変えずに王馬を見ていた。

疑問に思う点が多いのだが彼の発言を辿つてみると自分に要件があることは間違いないのだろう、と思う。

八雲「もしかして君が十鬼蛇王馬くんかな？」

王馬「ああ、そうだ。しっかしシバタツヤにシバミュキも居たなんてな……通りで”型”が成つてると思つたぜ。」

達也「……ッ」

できれば秘密にしておきたかつたのだが早々とバレてしまう。意図の読めないこの男が今後何を話すのか分からないため口止めをしておきたいところだ。

八雲「いやあ聞いたよ。君、ものすごく腕つぶしが強いんだつてね。まさか達也くんが負けるなんて思いもしなかつたよ。……で、君は何が狙いかな？」

王馬「狙い？……狙いねえ……アンタをぶちのめしに来たつて言えばいいのかい？」

八雲「ほお……」

強調されたその言葉には一切、冗談交じりといったようなものは存在しない。本気<sup>マジ</sup>だ。

八雲「じゃあ道場破りってことかい？」

王馬「ま、そうなるわな。」

ポケツトに手をつっこみ、堂々と歩いてくるその姿は、高校生が出来るものじゃなかった。

八雲にはそれが伝わったのか構えをとりそうになっていた。だが、再び取り繕うかのように笑顔をつくり、王馬にこう告げる。

八雲「いいよ。相手になつてあげよう。」

王馬「話の早え奴じゃねえか。なら早速：「ただし。」：あん？」

八雲は後ろにひとつ飛びすると上空から数十人程の小僧が出てくる。しかも、王馬目掛けて。

王馬「！」サツ

いち早く気づいた王馬は八雲と同じく後方へと飛ぶ。

八雲「僕のところまで辿り着けたらね？」

これは八雲のテストみたいなものだ。

八雲は既に十鬼蛇王馬という人物が興味深い。

自身の弟子、司波達也に勝利し『十鬼蛇』<sup>トキタ</sup>の名を持つ。この二つだけで十分過ぎた。だからといって最初から手を合わせる訳にはいかない。

見極めのテストと判断した。

王馬「へえ…焦らすねえ。ま、いつか。朝の体操には丁度いいや。」ザ…

王馬は昨日と同じくキックボクシングスタイルへと構えをとる。だが達也は知っている。この構えから合気じみた技を使ってくることを。

「ハアッ!!」シュッ

王馬「へ。」スッ

「こっちだー」シュッ

王馬「よっ…と。」スッ

一斉に飛び掛かれて尚、焦ることもなく。顔色一つ変えそうにない。達也も深雪も黙ったまま見ている。それは八雲とて同じこと。

八雲（あの構えはかなり攻撃型なのかな？まあそれはいいとして、数十居ながらも冷静に捌く…か。こりやちよつと強いかもしれないねえ。）

王馬「よっ、おつと。さすがに数が多いな。」

拳も蹴りも不規則な技も全てを回避し、涼しい顔の王馬。

八雲の弟子達の方が息も絶え絶えになっていた。かといって攻撃の手を緩めるわけ

でもない。数十いてのコンビネーション。一人が攻撃するなら休息だって可能。常に攻撃の嵐であった。

「これならどうだ。」

王馬「あん？」

すると奇怪なステップをしたと思ったら4方向に配置し、王馬の逃げ場を潰していた。

「はっ！」

「くらえ！」

「おりゃ！」

「はあっ！」

四つの拳が王馬の頭部を捉えていた。

距離も遠くはなく、もはや時間の問題だった。

そして攻撃が直撃……………

スルツ…

「い」はあ…「ゴオ



「ぐがあ…」ドツ

「な…に…」ピキイ

「があつ…」バキツ

することはなかった。

八雲「!!」

達也「な…あれは…」

深雪「力を操る技…」

四人の攻撃が当たるかと思われたが、そうはならなかった。四人の攻撃は左右にずらされ隣に居る者の顔面にヒットしていた。しかも、元の威力よりも高く。

ドサツ…

王馬「お、一気にいけたね。まだまだ居るかい。」

四人はすでに戦闘不能か。その場に倒れてしまう。

小僧達はそれに臆することなく、王馬に立ち向かっていく。

王馬「おらよつと！」ドオン

「がはっ!」

「ぐあ…」

拳を振るえば数人を吹き飛ばし…

王馬「まだまだだ！」ザッ

「うがぁー！」

「ぐあぁー！」

蹴りをあげればまた数人が飛び上がる。

そして力を操るかのように、乱していく。

もはや、蹂躪にしか見えないこの状況に、八雲は何を思うのだろうか。

王馬「つし、こんなもんかな。…さて、準備体操も終わったし…おっさん、さつさと闘やろうぜ。」

八雲「いや、君すごいね！想像以上だよ！まさか怪我一つなく倒すなんてね。…でも、僕には及ばないだろうけど。」

王馬「言ってくれるじゃねえか。」

後方で観戦していた八雲だったが、ジリジリと王馬の方に歩み寄ってくる。その姿は老爺と言ってもよかった。

両手を腰で組み背を少し曲げている。

だが、放たれる闘気は達人の域だった。

そして数メートル程二人には距離が空く、そのあとは構えるとただジツとしているだけ。

王馬「……」

八雲「……」

二人は不敵に笑いながらただ見つめ合うだけ。

この空間には張り詰めたような空気が流れる。

緊張感はとてとてもとても、それに達也と深雪も眉を細めて、目がつり上がってしまっている。

時間にして一分、ようやく両者は動きだした。

王馬「！」 シュシュツ

八雲「……」 サツサツ

王馬「……よ。」 ザア

八雲「おつ……と。」 サツ

王馬の左ジャブと右ストレートを両手で捌いたあとは、直線状への蹴り上げ。間一髪で避けると次はフックやボディブローを絡めた近接戦闘への移行。

八雲は直撃とまではないかのようにぎりぎり避ける。

それもミリ単位ストレスで。

だが、余裕が無いという訳ではなくまだまだ範囲内といった感じだ。

一方王馬は、動かすのは両手足と目、常に八雲の動きを捉えていて、予測も行ってい

る。

王馬「おらあ！」ドオン

八雲「くつ…」ズザザ

不意打ちの前蹴りが八雲に当たるが肘で防がれる、だが威力を逃すのが精いっぱいだったのか次の行動が遅れた。

それに後ずさりもした。それを見放さなかったのが：

王馬「しゃっ！」ドンドオン

八雲「やるねえ！」ガツガツ

王馬は立て続けに左ジャブと右ストレートを放つ。

それを八雲が防ぐ。

このやりとりが数十回行われていた。

ときには八雲が攻撃を仕掛け王馬がいなす。

時間にしてどのくらいだろうか、だが、そう遅いものでは無かったか。達也でさえもこの戦闘速度が速いと判断していた。深雪は目を細めながらこの戦いを観ていた。

他の者ならばまず捉えることが出来ないだろう。

そして決着が着くまでそう長くはかからなかった。

八雲「ガラ空きだよ！」スッ

王馬「……！」一サツ

八雲の突きを即座に躲し右ストレートを放つ。

だが、それも受け止められてしまう。

八雲「さあどうするんだい？左手が空いてるけど？」

王馬「くっ……」

王馬は右手を元の位置に戻そうとするが八雲に強く掴まれ、それも叶わなかった。達也は流石師匠、というような顔をし、深雪は……いや、関係ないか。

とにかく王馬は苦渋の顔をしていた。

が……

王馬「へっ……」ニイ……

八雲「笑つちやつて……どうしたん……ッ!?」ガクッ

達也「出たか。」

深雪「出た！」

王馬の顔が気味悪い笑みに変わった理由。

それは敢えて狙っていたようにも見える、先程の苦渋の顔と関連するだろう。

八雲は突然膝を地についでしまう。達也はこれを知っている。実際に自分がしてやられた技である。

王馬「これでもくらいな！」ザッ

八雲「うお！」ガバッ

王馬の蹴りを腕でガードする。

八雲「いや〜参った参った！僕の負けだよ！」

八雲は負けを認めた。

ただの模擬戦に過ぎないが王馬の実力を認めたのはもちろんのことだ。

八雲「いや〜それにしても驚いたなあ…君…

二虎流にこりゆうの遣い手でしょ？」

王馬「ツ!？」

達也「にこ…りゆう…?」

深雪「流派なのでしょうか…?」

八雲の口から出た”二虎流”という言葉。

それはきつと王馬の使った「力を支配する技」と関係するのだろう。当の王馬は目を見開き、信じられないものを見てしまったような顔をしている。

達也と深雪も初めて聞く単語に脳を回転させているが分からずじまいだった。

八雲「いや〜でも驚いたなあ〜まさかもう一度手合わせする事になるなんて…あれ？でもおかしいねえ…？」

噂では二虎流は一代限りで失伝したって…」

ガシツ

達也「王馬!!」

深雪「王馬さん!!」

王馬は突然八雲の首を掴まえ、鬼のような形相になる。

次の瞬間、この寺の近くにいた小動物は一切姿を現さなくなったという…

王馬「テメーが二虎を、語るんじやねえッ!」

この広い空間に大きく響き渡り、達也も深雪も八雲も耳を防ごうとしたが、それよりも…王馬の怒鳴る姿に驚いていた。特に達也と深雪は短いとはいえ学校での王馬を知っているためか、八雲の倍は驚いていた。

そしてしばらく経った時。

あれから王馬はムシヤクシヤしながら八雲達の元から去っていった。達也と深雪は呼び止めることもできず、ただ眺めることしか出来なかった。

八雲はびつくりしたなあ：彼、なにか悪いことしちやったかなあ：と困り顔でいた。現在達也と深雪は電車に乗っていた。

これから学校であるためあの後足早に寺を出ていった。

深雪「お兄様、王馬さんのことですが：」

達也「ん、ああ：王馬か：」

二人ともなにか晴れない顔でいた。

王馬についての情報はまだまだ浅いのだがそれなりに興味のある二人。特に深雪の方は達也よりも：

しかしあの顔の王馬を見たときに何も言葉が出てこなかった。

深雪「二虎：とは彼に関わることなのでしょうか：それに二虎流というのも：」

達也「きつとそうだろうな。安易に口に出してはいけないことなんだろう。俺達と同じように色々と厄介な問題を持っているのかもしれないな。」

深雪「：はい。：：：：私、この気持ちは何なのか分からないんです。お兄様以外の男性に、ここまで興味を持つなんて。それに初めて会った様な気がしないんです。」



達也「…それは、どういう意味だ。」

深雪「いえ、その…もしかしたら夢かもしれませんが。」

達也「夢…か。それならありえるかもしれないな。」

とにかく何を話そうにも話題は王馬の事に関してだった。

まだまだ一日は長いというのに…嫌な雰囲気だ。

## 第7話 本部

王馬「…」

学園に着いたあと王馬は一人で過ごしていた。

今朝のあれが頭の中にこびり着いていた。

廊下を歩いている時も、教室で一人佇んでいる時も、どうも頭から離れない。

王馬（なんであのハゲが知ってんだよ…俺はアイツを知らねえし会った事も無え…）

王馬（まあいいや…アイツは邪魔だ。それより…）

王馬は切り替えすぐさま別のことを考えようとしていた。

そして思い出したのがあの日の模擬戦じゅうりんでの事。服部と達也と闘った後、彼等は当初の予定であつた委員会本部に向かつた時の出来事。

摩利「少し散らかっているが、まあ適当に掛けてくれ。」

王馬「以外に汚いんだな、俺は嫌いじゃ無いぜ。」

達也「直球だな。」

とても綺麗に整頓された生徒会室から直行すると、少しという表現に抵抗を感じてし

まうのだが、仕方のないことなのかもしれない。

王馬「いろんなモンがあんだな。」

摩利「風紀委員は男所帯でね。整理整頓はいつも口酸っぱくして言い聞かせているんだが……」

達也「誰もいないのでは、片付かないのも仕方がありませんよ。」

摩利「……校内の巡回が主な仕事だからな。部屋が空になるのも仕方がない。」

王馬「まあでも落ち着くな。シバタツヤも思わねえか？」

達也「逆だな。それはそうと委員長、ここを片付けてもいいですか？」

摩利「なに……？」

達也「魔工技師志望としては、CADがこんな風に乱暴に放置されている状況は、耐え難いものがあるんですよ。サスペンド状態でほったらかしになっている端末もあるようですし。」

摩利「魔工技師志望？あれだけの対人戦闘スキルがあるのに？」

達也のセリフに摩利は本気で首を傾げた。その横で王馬は船を漕いでいる状況だった。

達也「俺の才能じゃ、どう足掻いてもC級までのライセンスしか取れませんから。」



摩利「なっ…じゃあ今までどうやって！」

王馬「…まあ殴って蹴って絞めて…だったな。」

摩利「呆れた…はあく…お前、会長には知らせているんだろいな？」

王馬「サエグサの事か？まあ知ってんだろ。ていうか、何をそんなに慌ててんだよ。かわい顔が台無しだぜ。んん？」

摩利「な／＼／＼ば、バカ／＼／＼年上をからかうな!!」

達也（まあそういう反応になるだろうな…俺たちだつてそうだったんだから。）

達也たちが森崎駿と一揉めあった時、帰り際での出来事だった。柴田美月達が驚いていたのを覚えている。

ほのか『ええ!?それってどういう事ですか!?!』

雫『…じゃあ貴方どうやって…』

美月『ありえませんか!!普通!!』

エリカ『じゃあどうやって魔法使ってるの!?!』

女子達は王馬にゼロ距離と言つていくくらいに近づいて質問する。遠くで見っていた達也とレオも同じで目を見開いていた。深雪はどうだったかは忘れたが、きつと驚いていただろう。

王馬「そんなに珍しいモンかねえ…」

摩利「お前異常だぞ。CADあってこそその魔法なんだ。それを使わずして、なんてまあ、お前がどういった魔法を使うのかは知らんが。………因みにどういった系統だ？」

王馬「あん？気になるかい？」

摩利「それはそうだろう。同じ風紀委員ともなるのだから。なおさらな！」

達也「それは俺も気になるな：お前と手合わせして完膚なきまでにやられたんだ。」

王馬「よく言うぜ。ピンピンしてる癖によ。」

達也「…うるさい。」

ニヤツと笑う王馬は達也を誂っておもしろいのだろうか。

二人のやり取りを羨ましそうに横から見ている女子一人。

摩利「そんなことはどうだっていい！」

王馬「カツカすんなよ。別に秘密にする気は無えけどよ…まあ………」

教えるだけ無駄つてのがあるからな？」

その言葉に二人は眉をピクリと震わせる。

王馬の放った言葉は紛れもなく挑発行為。そう、例え上級生だろうと見下す。それが彼だ。

摩利と達也は怪しげに微笑む。

摩利「なるほど……言つてくれるな。」

達也「ほう……それは楽しみだな。」

王馬「へへ……まあそういう事だ。いずれ魅せる時が来るかもな。」

男の魔法がどんなものなのかは不明だが、強大であることだけは確かなはず。王馬が

魔法を使うほどの強敵は現れるのだろうか？

摩利（王馬、お前はまだ知らないのだろう……私達の強さを……）

達也（王馬、例え一度負けたと言えど俺はお前よりも強い……）

二人は闘志を燃やす。

王馬（……こりやあ、楽しみだな。）

そしてこの男も。

真由美「……ここ、風紀委員会本部よね？」

階段を降りてきた真由美の開口一番がこのセリフだった。

摩利「いきなりご挨拶だな。」

真由美「だって、どうしちゃったの、摩利？リンちゃんがいくら注意しても、あーちゃんがいくらお願いしても、全然片付けようとしなかったのに。」

王馬「なんだ。やっぱリアンタが原因じゃねえか。」

摩利「手伝おうともしなかった者が口出しするな！それに、事実には断固抗議するぞ、真由美！片付けようとしなかったんじゃない、片付かなかつたんだ！」

王馬「言い訳してやつだな、シバタツヤ。」

達也「俺に振るな。」

真由美「女の子としては、そつちのほうがどうかと思うんだけど。」

真由美が斜に睨むと摩利は咄嗟に顔を背けた。

真由美「別にいいけどね……ああ、そういうこと。」

固定端末のメンテナンスハッチを開いて中を覗き込んでいる達也の姿を目に留めて、

真由美は納得顔で頷いた。

王馬「♪♪」

椅子にドツと座っている王馬に対しても「そういうこと……」と、納得いった様な顔になる。

王馬「終わったかい？」

達也「ああ、お前が何もなかったおかげでこんなにも早く終わったぞ。」

と、皮肉を込めて王馬に言うのと別に気にしていないように「ふくん。」と一言。達也はため息をついた。



達也「委員長、点検終わりましたよ。」

摩利「ご、ご苦労だったな。」

鷹揚に頷いてみせる摩利だったが、心なし、こめかみの辺りが汗ばんでいるようにも見える。冷や汗で。

真由美「ふーん…摩利を委員長、つて呼んでるつてことは、スカウトに成功したのね。王馬君も。」

達也「最初から俺に拒否権は無かったように思いますが…」

王馬「…？イーソチョー？…ワタナベマリはワタナベマリだろ？」

真由美「ま、王馬君は相変わらず、か。それにしても達也君はおねーさんに対する対応が少しぞんざいじゃない？」

…とりあえず達也が真由美に言いたかったのは、自分に姉はいないということだった。それを言うのとドツポにはまりそうな気がしたので、実際口にはしなかったが。

王馬「確かにシバタツヤはサエグサに対して冷てえな。なんかあったのか？」

真由美「三年生に対して名字呼びとは何だコノヤロー。それならフルネームでいいわよ、全く。」

王馬「んじゃあ、そうさせてもらうぜ。」

達也「会長、念のためにといいますか、確認しておきたいことがあるんですが。」

真由美「んっ、何かな？」

達也「会長と俺は、入学式の日が初対面ですよね？」

それにしても馴れ馴れしくありませんか？、という意味を込めて放たれた達也の言葉に對して真由美の目は丸くなった。が、それが段々元の大きさに戻り、更に細められていくにつれて、邪な、としか表現しようのない笑みがその蠱惑的な顔を覆った。自分がないでもない悪手を売ってしまったことを達也は悟った。王馬は興味無さげに聞いていた。

真由美「そうかあ、そうなのかあ……ウフフフフ」

小悪魔、という言葉がピツタリの笑顔だ。

真由美「達也くんは、私と、実はもつと前に会ったことがあるんじゃないか、と思っているのね？入学式の日、あれは、運命の再開だったと！」

王馬「！……そうだったのか、シバタツヤ。」

達也「いえ、あの、会長？」

真由美「遠い過去に私達は出会っていたかもしれない。運命に引き裂かれた二人が、再び運命によってめぐり合った、と！」

王馬「そうなのか、おめでとうだな。シバタツヤ。」

達也は本気で陶醉しているのならアブナイ人だと思う。そして、王馬は本気で信じ込

んでいるのなら今すぐにも誤解を解く必要がある。

真由美「…でも残念ながら、あの日が初対面ね、間違いなく。」

王馬「…なんだよ違いのかわよ。」

達也「ま、まあそうだと思います。」

真由美「ねっ、ねっ、もしかして、運命感じちゃった？」

とてもあざといこの小悪魔。達也は彼女の意図が全く読めないでいた。

王馬「アンタは本当に楽しそうだな。」

真由美「あら？王馬くんは楽しくない？」

王馬「さアな、俺には別に運命なんてモンは信じちやいねえからな。」

真由美「ツレないね。王馬くんだつて分かんないわよ？私達は遠い過去に会つていたかもしれないし、例えばこう…『私は囚われの身で、そこを颯爽と現れて救つてくれたのが君。…でも私が名前を聞いても貴方は何も言わず去つていく……そして、それ以来二人は出会う事が無いのよ…』と、まあこんな感じかな？」

達也「…どんな過去ですかそれ。」

摩利「真由美ほどの力があつて、どこをどうやったら囚えることなんて出来るんだ？」

真由美「二人ともヒドイ!!私だつてか弱い乙女なのに!!」

早速否定される真由美は、小動物のようにプンプンと怒つてみせる。それに対して二

人は「やれやれ……」といった表情になる。

王馬「……」

黙り込んでいる王馬に対して真由美達は不思議に思う。普通なら「そんな訳ねえだろ……」なんて言うと思ったが一言も発さず、ただ真由美をジツと見ているだけだった。

真由美「ど、どうしたの王馬くん？もしかして本当にそうだとか？だ、大丈夫！今の作り話だから!!」

王馬「……そう、だよな。」

なにかボソツと呟いた王馬に一同は首を傾げるが、王馬はすぐに顔を上げる。

王馬「いや、ただの考え事だ。あの日初めて会った、それだけだ。」

真由美「そ、そう。」

摩利「まあ……当然だな。」

達也「お前の方こそ謎だらけだな……」

王馬「まあ、仮にそうだったとしたら俺がその運命の相手つてのになんのか？まあ、貰つてやってもいいぜ。」

摩利「なっ……おま！」

達也「すごい度胸だな……」

二人はとても驚いていた。真由美は……

真由美「え／＼…ああ、…：…そう…」プシュッ  
顔を赤くして、脳がショートしていた。

この王馬のヤンチャ勝りのような口説き方。  
ガキつぼさが残るが、効果は満点だ。

王馬「アンタが少しずつ分かってきた様な気がするぜ、サエグサマユミ」

真由美「え、なに？ 攻略する気？」

摩利「攻略って…ゲームか。」

達也「はあ…あいつの言動は分からんな。もちろん会長も。」

実は真由美が降りてきた理由は、今日はもうすぐ生徒会室を閉めるということ伝えるためだった。そのついでに達也や王馬の様子を見に来た、という次第だが、ついの方がメインになっていたのは気の所為ではあるまい。

入学式が終わったばかりで、色々と忙しかったのが一段落したところらしい。「じゃあ、お先にね」、と手を振って、真由美は生徒会室へと引き揚げていった。

明日からは各クラブ一斉の『新入部員獲得競争』で忙しくなり、風紀委員会の出番も増えるということで、達也と王馬、摩利の間でも今日はこれで切り上げよう、という話になった。すると委員会本部に二人の男子生徒が入ってきた。

「ハヨースッ」

「オハヨーございませー！」

威勢のいい掛け声が部屋に響く。

「おっ、姐さん、いらしたんですかい。」

王馬「なんだア、テメエ等……」

王馬はその二人の男子生徒をにらみつける。別に摩利に対してそういう態度だったから……とかではない。決してない。ただ単に、彼の気分を少々害したから、というとても理不尽な理由だ。

「委員長、本日の巡回、終了しました！逮捕者、ありません！」

「……もしかしてこの部屋、姉さんが片付けたんで？」

変わり果てた？室内の様子を訝しげに見回していたごつい方の男が、睨みつけている王馬の方へ歩いてくる。

体重もそれほどではないはずだが、のっしのっし、という形容が似合う歩き方だ。

「つてえー！」

スパアン！という子気味いい音と共に、男が頭を抑えて蹲っている。摩利の手には、硬く丸めたノート。

摩利「姐さんつて言うな！何度言ったら分かるんだ！鋼太郎、お前の頭は飾りか！」

鋼太郎「そんなにポンポン叩かねえくださいよ、あ……いえ、委員長。ところでそれらは？新入りですかい？」

摩利「……こいつらはお前の言う通り新入りだ。一年E組の司波達也、同じく十鬼蛇王馬。生徒会枠でウチに入ることになった。」

鋼太郎「へえ………ん？二人？二枠もですかい!？」

摩利「……ああ、気にするな。それとも何か問題が？」

鋼太郎「い、いやいや……まあ、それにしても二人揃って紋無しですかい。」

鋼太郎は興味深げに二人のブレザーを眺め、次に王馬の身体付きを見回す。

「辰巳先輩、その表現は禁止用語に抵触するおそれがあります！この場合、二科生と言うべきかと思われませう！」

眼の前にいるこの男、『辰巳鋼太郎』は、一切態度は変えようとはしない。

摩利「お前たち、そんな単純な見たと足下をすくわれるぞ？ここだけの話だが、さつき服部が足下をすくわれたばかりだ。」

だが、ニヤニヤとからかうように摩利から告げられた事実には、二人の表情は急に真剣味を増した。

鋼太郎「……服部が……一体どつちに……」

王馬「おお、呼んだかい？」

鋼太郎「!!」

鋼太郎の眼の前にはニヤツと笑う王馬が居た。

睨み合いにも見える状況で、横から摩利が告げる。

摩利「ああ、正式な試合で完膚無きまでにな。」

「なんと！入学以来負け知らずの服部が、新入生に敗れたと？」

摩利「大きな声を出すな、沢木。ここだけの話だと言っただろう。」

どうやら相手は風紀委員会の先輩であるらしい。

王馬「心強いんじゃないか？あんたらよりも強い俺等がフーキーン会に入るってんだ。」

達也「おい、王馬……」

鋼太郎「おお、こりゃあ逸材だな。ふたりとも……」

摩利「意外だろ？」

王馬「ん……」

摩利「この学校はブルームだ、ウィードだとそんなつまらない肩書きで優越感に浸り、劣等感に溺れるヤツばかりだ。正直言つてうんざりしていたんだよ。だから今日の試合は、チョツとばかり痛快だったんだがね。」

幸い、真由美も十文字もあたしがこんな性格だつて知ってるからな。生徒会枠と部活



連棒は、そういう意識の比較的少ないヤツを選んできている。優越感がゼロってわけには行かないが、きちんと実力が評価できるヤツらばかりだ。：残念ながら教職員棒の三人までそんなヤツばかり、とは行かなかつたがここは居心地の悪くない場所だと思ふよ。」

鋼太郎「三ーCの辰巳鋼太郎だ。よろしくな、司波、十鬼蛇。腕の立つヤツは大歓迎だ。」

「二ーDの『沢木碧』だ。君を歓迎するよ、司波くん、十鬼蛇くん。」

鋼太郎、沢木が次々と握手を求めてくる。その顔には全く、侮ったり見下したりする色が無い。

王馬と達也も悪くない、と感じた。

王馬は挨拶を返し、沢木の手を握り返す。が、何故か離れない。

沢木「十文字さんというのは、課外活動連合会、通称、部活連代表の、十文字会頭のことだ。」

王馬「あん？」

沢木「それから自分のことは、沢木と苗字で呼んでくれ。」

手にかかる圧力が、王馬に苛立ちを思い立たされる。

キシキシ、と軋みを上げそうな握力に王馬は：

沢木「!?」ガタツ：

鋼太郎「お、おい！」

摩利「おい、バカ！」

達也「なっ…」

沢木は地に伏した。王馬とは手が離れていない。ということはその言う事だ。

達也（あの時の…アレか。）

王馬の使う武術、操流によって力を乱された。

王馬「悪い悪い、なんて言わなくても良いよな？」

沢木「っ！」

王馬「別にテメエなんざを頼ろうなんて思わねえよサワキミドリ。」

沢木「チツ！」

王馬から手を離し、悪態をつく。

沢木「くれぐれも、名前で呼ばないでくれ給えよ…」

王馬「ああ？呼ぶ機会なんて未来永劫無えから安心しな。」

ヒヤヒヤするようなこの状況に鋼太郎は意外性を感じた。

沢木がここまでの悪態をつくのも、目の前の男、十鬼蛇王馬という男の微量とも言える力、服部が敗れるのもなるほどな、と感じた。

鋼太郎「大したモンだぜ、沢木の握力は百キロ近いつてのによ…」

王馬「近いただけじゃ無理があるぜ？せめて越えてもらわねえとな。」

上手くやっていけるのだろうか、と達也がはあ…と重いため息をついた。

王馬（そんな感じだったか…）

王馬は窓の外を見ながらただ浸っていた。

レオやエリカ、達也と美月の声も聞こえぬまま。

…王…

馬…

王馬…さん…！

王馬…くん…！

王馬「…なんだお前らか…」

エリカ「なんだじゃないよ!!アタシ等がずっと話しかけてんのが無視だし!」

美月「ずっと上の空でしたよね!!」

レオ「なんだ、気分悪いのか?」

達也「お前ともあろう者が、意外だな…」

四人とも王馬の席に集まって心配…?している様子だった。

王馬「なんだよ…うるせえな。」

エリカ「なんでも何も、クラブ活動だよ!」

王馬「くら…ぶ…?」

レオ「ハア…だめだこりゃ。」

話をちゃんと聴いていなかった王馬は、皆から呆れられている表情。

達也「俺たちは風紀委員に選ばれたんだ、しっかりしてもらわないと困るぞ。」

王馬「…ああ…そうだったな。」

達也「…やっぱ朝のアレか…」

九重八雲との手合わせから王馬がおかしい。

二虎流…二虎…武術と、名前か…?達也も色々と考えてみるが、分からない。

それに、深雪も酷く心配していた。

達也「王馬、俺たちは生徒会室に行くぞ。」

王馬「ああ…そうだったな。」

王馬は立ち上がると達也と共に教室を出ていった。  
エリカ「：なんか今日の王馬くん変じやない？」

レオ「朝からあんな感じだよな。」

美月「何も無ければいいですが：」

皆も王馬を心配していた。

王馬「ここだったな。」

達也「ああ。」

二人は生徒会室の前に立っている。

王馬は達也の手に握られている物に目を移す。

王馬「何だそれ。」

達也「深雪が作ってくれた弁当だ。」

王馬「ふうん、シバミユキが、か。」

達也「やらんぞ。」

王馬「ケツ：」

そんなやりとりをしたあとに二人は生徒会室へと入っていった。

## 第8話 会議

場所は生徒会室。

あのあと、二人が入室した直後に深雪も生徒会室へと入ってきた。少し時間差を置いた理由は言わずとも分かるだろう。二科生二人と一科生一人、何も起きないはずがなく：

というわけだ。達也は深雪の作った弁当をじっくりと味わいながら、王馬は料理なんて出来るはずもなく肉料理を、深雪は当然二人の横に居る。今ここに鈴音とあずさはおらず、真由美と摩利が仕切っている。

真由美「勧誘が激しすぎて授業に支障を来たすことも。それで、新入生勧誘活動には一定の期間、具体的には今日から一週間という制限を設けているの。」

摩利「この期間は各部が一斉に勧誘のテントを出すからな。ちよつとしたどころじゃないお祭り騒ぎだ。」

密かに出回っている入試成績リストの上位者や、競技実績のある新入生は各部で取り合いになる。

無論、表向きはルールがあるし、違反したクラブには部員連帯責任の罰則もあるが、陰

では殴り合いや魔法の撃ち合いになることも、残念ながら珍しくない。」

達也「CADの携行は禁止されているのでは？」

摩利「新入生向けのデモンストラーション用に許可が出るんだよ。一応審査はあるんだが、事実上フリーパスだね。」

その所為で余計にこの時間は、学内が無法地帯化してしまう。」

真由美「学校側としても、九校戦の成績を上げてもらいたいから。新入生の入部率を高める為か、多少のルール破りは黙認状態なの。」

摩利「そういう事情でね、風紀委員会は今日から一週間、フル回転だ。いや、欠員の補充が間に合って良かった。」

真由美「いい人達が見つかって良かったわね、摩利。」

二人がそうして微笑む。嫌味を込めているのか、達也たちを見ている。そこで二人は異変：というわけではないが、口さみしさのような感覚を覚える。

真由美「あらあらあら？王馬くんどうしたの？いつもだつたらすぐに横から口出ししてくるのに。」

摩利「そういえば元気が無いな。お前だつたら『殴り合い』の時点で食いついて来るかと思っただけだな。どうした？怖気付いたか？…フツ…安心しろ。早くもお前はこの学校でも上位の実力を持っているんだ。不安要素なんて無いと思うんだがな。」

二人がそう言つて王馬を励ます……？が、王馬は眉一つピクリとも動かさない。これには、みんなが驚いていた。深雪と達也はなんとなくだが原因は分かっていた。

深雪「お、王馬さん。何も心配しないでください。あなたはお兄様にも実力では劣らなかつたことを証明してくれましたし……」

達也「俺が基準なのか……まあ、王馬。何が原因かは知らないが、出来るだけサポート……必要なさそうだな。」

二人もどうやつて王馬に話しかけようか迷つているところに、王馬はやつと口を開いた。

王馬「……まあ、気にしても仕方ねえよな。」フツ……

そういうと王馬は少しだけ笑みを作り、自分は大丈夫だと伝える。それを見て皆は「なんだ、いつもののか……」と安心する。

王馬「俺の心配をするより自分の心配をした方が身のためなんじゃねえのか？……まあ、今のところお前が負けるなんてのは思えねえけどな。」

達也「……フツ……言つてくれるな。まあ、いつものお前に戻つたんならそれでいいさ。」

王馬「ああ？俺は俺だぞ。」

深雪（ふう、良かった。）



真由美「なあんだ、いつもの王馬くんか。さっきの表情もおねーさん好きだったのになあ〜」

深雪「……ゴゴゴ……」

真由美「じよ、冗談だよ！ 冗談！ アハハ！ 王馬くんは手が掛かりそうで大変だなー！ アハハ……」

深雪「……ニコオ」

真由美「…………」

摩利「……最難だな、真由美。」

部屋が少し冷たくなったことはさておいて、話を続ける。

摩利「二人は早速、即戦力になるな。期待しているぞ。」

達也「ハア、分かりました。放課後は巡回ですね。」

王馬「当たり前だ、十分期待しといてくれや。」

摩利「授業が終わり次第、本部に来てくれ。」

達也「了解です。」

摩利の言葉を、達也は大人しく受入れた。王馬は大人しく……？ なのかはどうかは知らないが、受入れてくれた。

潔いと言うべきか、諦めがよいと言うべきか、微妙な達也だ。彼の隣では深雪が真由

美に指示を仰いでいた。

深雪「会長……私たちも取り締まりに加わるのですか？」

深雪の言う「私たち」とは、生徒会役員のこと。表面的な人当たりの良さとは裏腹に、対人関係には少し気難しいところのある妹がこの生徒会には早くも溶け込んでいるのが窺われて、達也は微笑ましさを覚えた。

王馬「シバタツヤはシスコンってやつだな。」

達也「黙れ、喋るな、口出しするな。」

真由美「アハハ……コホン……巡回の応援は、あーちゃんに行ってもらいます。何かあった時の為に、はんぞーくんと私は部活連本部で待機していなければなりませんから、深雪さんはリンちゃんと一緒にお留守番をお願いしますね。」

深雪「分かりました。」

深雪は神妙に頷いてみせたが、少しがっかりしていることが達也には見て取れた、それは王馬にも。

王馬「へっ……そうガツカリすんなよ。俺のおこぼれくらいは相手すりや良いさ。」

真由美「あのね王馬くん話聞いてた？」

摩利「聞くはずないだろう真由美。」

達也「お前の耳は飾りかなにかか？」

まあ、一同はそういった反応になるだろう。深雪は好戦的な性格ではないが、実力的には問題ない。もしかすると新たに組み込んだ拘束系の術式を試してみたいのかもしれないが。

深雪「王馬さんのバカ!!」／／／

当の深雪は顔を紅くしながら王馬に否定の言葉を放つ。それを聞いた王馬は王馬で困っている。

王馬「それはそうとよ、あーちゃんは戦えんのかよ。」

真由美「それがビックリ！彼女の魔法は凄いものよ！」

暗に、あずさでは頼りないなという意見は三人が一致していたものだった。それはそうだ。彼女は内気で、男性の怒声にも瞳に涙を浮かべてしまうほど臆病だ。

真由美「外見に騙されるのは分かるなあ：でもね、人は見かけによらないのよ。」

王馬「へえ：あいつがねえ：」

真由美「ちよつと、いや、かなりかな？気の弱いところが玉に瑕だけど、こういうときにはあーちゃんの魔法は頼りになるわよ。」

摩利も似たような苦笑いを浮かべていた。

摩利「そうだな。大勢が騒ぎ出して収拾がつかない、というようなシチュエーションにおける有効性ならば、彼女の魔法『梓弓』の右に出る魔法は無いだろう。」

王馬「アズ…サ…弓…？」

現代魔法は技術であり、多くの魔法が定式化され共有されている。もちろん、非公開の術式も存在するが、大多数の魔法が公開されデータベースに登録されている。それらの魔法は通常その系統と効果で識別されるが、独創性の高い魔法には固有の名称が与えられる。

達也「梓弓…？正式な固有名称じゃありませんよね？系統外魔法ですか？」

摩利「…君はもしかして、全ての魔法の固有名称を網羅しているのかい？」

彼の質問に答えはなく、代わりに摩利から呆れ声の反問が返ってきた。

王馬「なんだ？そんなに凄え事なのかい？」

真由美「凄いところじやないわよ！…達也くん、実は衛星回線か何かで、巨大データベースとリンクしてるんじゃない？」

真由美は本気で目を丸くしているが、王馬はこれっぽっちも分からない、といった顔をしている。その顔を見て真由美は二度、目を丸くした。

超能力研究を端緒とする現代魔法は、魔法という現象を「火が燃える」とか「風が吹く」とか、その見掛け上の性質ではなく、作用面から分析し分類している。

即ち、

？加速・加重？

? 移動 ・ 振動?  
? 収束 ・ 発散?  
? 吸収 ・ 放出?

以上、四系統八種類である。無論、分類には必ず例外があつて、現代魔法学においても四系統八種に分類できない魔法が認められている。大きく分けて三つのカテゴリーに分類されており、? 無系統魔法?、? 知覚系魔法?、? 系統外魔法?

真由美「達也くんお察しのとおり、あーちゃんの『梓弓』は情動干渉系の系統外魔法よ。一定のエリア内にいる人間をある種のトランス状態に誘導する効果があるの。」

王馬「戦いには不向きって事だな…? それなら知ってるぞ。」

摩利「そうだな。確かに直接の戦闘では扱い辛いものとなるな。意識を奪うわけではなく、意思を乗っ取るものでもない。相手を無抵抗状態に陥れることまでは出来ない。

だが、個人ではなくエリアに対して働きかける魔法なので

、精神干渉系の魔法には珍しく、同時に多人数を相手として仕掛けることができる。興奮状態にある集団を鎮静化させるにはもってこいの魔法だよ。」

達也「……それは第一級制限が課せられる魔法なのでは?」

真由美「大丈夫よ! だって、あーちゃんが独裁者の片棒を担ぐことなんて、想像できる?。」

達也「無理矢理協力させられる、というケースもあり得ますが。」

真由美「それこそ無理無理。あの子は道端で少額カードを拾っても涙目になっちゃうくらいなんだから。そんな罪悪感で押しつぶされちゃいそうな心理状態で、魔法がまともに使えるはずないでしょう？」

深雪「ですが、精神干渉系の魔法に対する法令上の制限は、中条先輩のご性格に関わりなく、適用されると思います……」

真由美「……えつと、大丈夫よ、美雪さん。学校外では使わせないから。」

王馬「あんた息詰まってねえか？」

真由美「うるさい！」

摩利「はあ……真由美、その言い方は著しい誤解を招くと思うぞ。中条の系統外魔法使用については、学校内に限ることを条件として、特例で許可を受けている。研究機関における使用制限緩和の抜け道をついた、いわば裏技だがね。」

王馬「うまくできてるモンなんだな。その『アズサ弓』ってやつは。」

達也「なるほど。」

深雪「そのような手段があるのですね。」

真由美「ええ、そうなのよ……」

午後の授業が終わり、気が進まないながらも風紀委員会本部へ向かおうとした達也と、授業なんかそつちのけだった王馬を、キーの高い声が呼び止めた。

振り向いた先には短すぎないショートカットの、スラツとした体型の少女。スレンダーというよりスマートといった方が彼女には相応しいだろう。

王馬「チバエリカか…」

達也「珍しいな、一人か？」

エリカ「珍しいかな？自分で思うに、あんまり待ち合わせとしか動くタイプじゃないんだけどね。」

言われてみれば思い当たる節もある、と達也は思った。

エリカ「そんなことより達也くんは王馬くんも、クラブはどうするの？美月はもう美術部に決めてるんだって。」

一緒にやらないかって誘われたんだけど、あたしは美術って柄じゃないし、面白そうなのトコないか、ブラブラ回ってみるつもり。」

王馬「クラブ…？」

目を丸くし、訳が分からないといった顔をした王馬を見て、エリカも同じく目を丸くする。達也は慣れた、という表現が合っているのだからかため息を付きながら額を押さえた。

エリカ「ちよ、普通学校行事の醍醐味と云えばクラブ活動でしょ！ま、まさか、クラブ活動も分かんないって言うの!？」

王馬「あー…別に面白そうじゃ無えから気にしてもなかったな。」

その発言にエリカは呆れ、達也と同じくため息をついた。

王馬はそれを見て、どうかしたか？と言いたげな顔を二人に向ける。

王馬「あー…なんかよお…レオンハルトが”サンガクブ”ってやつに入ったみたいだぜ。」

エリカ「あ、あく山岳部ね。似合いすぎだつての。」

達也「確かにな…」

エリカ「うちの山岳部は登山よりサバイバルの方に力を入れてるんだつて。もうなんと言うか、ハマり過ぎ。」

王馬「サバイバルか…それなら俺も得意だけどな。」

達也「そうなのか…?」

エリカ「なんか意外つて言うか、それっぽいというべきか…じゃあ、山岳部に入るの？」

王馬「別に…メインでやろうなんて思わねえよ。」

エリカ「あ、そうなの？」



達也「それに、俺たちは早速風紀委員会でこき使われることになってな。」

エリカ「…あ、そうなんだ。…じゃあ邪魔になっちゃうよね。ごめんごめん…」

王馬「別に良いんじゃないやねえのか？ 確か、ジユンカイってやつをやるんだろ？ ただの散歩みてえなモンだろ。」

達也（もう少し真面目に取り組んでほしいんだがな…）

エリカ「…うーん…ま、いつか。じゃあ、教室の前で待ち合わせね！」

そう言いながらエリカは再び気丈に振る舞う仕草をし始めた。その笑みが演技だといふのが本人は気づいてたとしても、二人は…

森崎「何故お前達がここにいる！」

それが再開の第一声だった。

王馬「よお、調子はどうだ？ CAD玩具はちゃんと直したかい？」

森崎「大変だったんだぞ！ 貴様という奴はあく!!」

言葉だけでなく、今にも掴み掛からんとするその勢いは、一喝によって制される。

摩利「やかましいぞ、新入り！」

摩利に一喝されて、森崎駿は慌てて口をつぐみ、更に、直立姿勢で固まった。

王馬「おー怖え怖え。」

達也「あまり無茶な行動はするなよ。」

摩利「この集まりは風紀委員会の業務会議だ。ならばこの場に風紀委員以外の者はいないのが道理。その程度のことは弁えたまえ！」

森崎「申し訳ありません！」

かわいそうに、森崎の顔は緊張と恐怖感に引きつっていた。摩利に連行されかけたのは、まだ一昨日のことだ。それでなくとも、生徒会長、部活連会頭と並ぶ権力者の叱責は新生生には荷が重い。生真面目な人間ほど、特に。

摩利「まあいい、座れ。」

森崎が腰を下ろしたのは王馬の正面。お互い、望まぬ座席配置だったが、三人が最下級生。因みに、達也は王馬の隣といった形だ。この配置になってまあ……森崎が王馬を一方的に睨んで、王馬はあくびをしながら摩利の方を見ていた。

摩利「全員揃ったな。」

その後、二人の三年生が次々に入ってきて、室内の人数が十人になったところで、摩利が立ち上がった。

摩利「そのまま聞いてくれ。今年もまた、あの馬鹿騒ぎの一週間がやってきた。風紀委員会にとっては新年度最初の山場になる。

この中には去年、調子に乗って大騒ぎした者も、それを鎮めようとして更に騒ぎを大

大きくしてくれた者もいるが、今年こそは処分者を出さずとも済むよう、気を引き締めて当たってもらいたい。

いいか、くれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすような真似はするなよ。」

ピリツ、とした空気がこの空間に漂う。それは三年生も二年生も、達也たち一年生も肌身に観じていること。

摩利「今年は幸い、卒業生の補充が間に合った。紹介しよう、立て。」

緊張を隠せず、隠そうともせず、逆にそれを熱意の表れとした感のある直立不動の森崎と、落ち着いた面持ちながら肩の力を抜き過ぎているような風情のある達也、そして、

髪型もあつてか獅子のような顔にも見える王馬：本人は至って威嚇をしているわけではないが、達也よりも力を抜き過ぎている。：しかし、それでも風情は逞しいモノだ。

摩利「イーAの森崎駿とイーEの司波達也：そしてもう一人、イーEの十鬼蛇王馬だ。今日から早速、パトロールに加わってもらおう。」

早速ざわめきが生じた、まあ達也と王馬のクラス名を聞いた所為でもあるが、人数の問題にあつた。

「待つてください：一人、多くないですか：？」

摩利「ああ：その事だが気にする必要は無い、上にはもう話してあるからな。：それに、人数が多ければ多いほど心強いものは無いだろう。：それとも何か問題があるか

「？」

「…いえ、別に。」

少々という表現は無理があるか、かなり、いやものすごく不満気味に仕方無く引き下がる。それを見た摩利は若干眉を歪めつつ、王馬達を見る。

摩利「三人とも使えるやつだ、私が保証しよう。」

それでも少しだけざわめきは止まなかった。

少し困ったような表情をしている摩利が、これでも駄目か…と言いたげに悔しげな表情に変わる。

するとそこに……

王馬「ふうくん……んで、ワタナベマリ、こいつ等が俺たちのオマケって事だな？」

王馬が早速問題発言を。

これには皆が喰い付いた、それは森崎も同じこと。

三年生や二年生は突然の事で理解が追いついていなかった。摩利も少し時間が止まり、引き戻される。

摩利「ちよ、おい！王馬……」

王馬「そんだけ俺<sup>二科生</sup>たちが癩に障るかい？……へっ、安心しな。ワタナベマリが言ったように俺たちはてめえ等よりよっほど使える。黙って見てりや良いんだよ。」

「貴様!!」

二年生の一人が王馬にとって掴みかかろうとするが、再び摩利の一喝でそれは止められた。

「こんな奴が使えらると思えません! 風紀委員どころか、この高校に汚名を付けてしまふのでは!!」

一人の男子が摩利の抗議する。それを聞いた摩利は両目を閉じ、一息ついて淡々と返答した。

摩利「フツ…そうだな、確かに素行が悪いし、言葉遣いも成っていない、そこは認めよう。」

しかし、汚名とは……それを決めるのはお前では無いのだよ?」

それを聞いた男子生徒はバツが悪そうな顔をして、「失礼しました。」と言い、席につく。もちろん、この場にいる生徒も同じく、バツの悪そうな顔をしていた。

達也（ヒヤヒヤさせるな…）

森崎（アイツ~~~~ツツ!!）

達也はホツ、と一息をついて、森崎は王馬に対して嫉妬していた。自分と同じく一年生にも関わらず、しかも二科生…その人がもう、先輩から気に入られているという状況だ。とても良い気分ではないのだろう。

摩利「はあ：他に言いたいことのあるヤツはいないな？ではこれより、最終打ち合わせを行う。」

巡回要領については前回まで打ち合わせのとおり。

今更反対意見はないと思うが？」

異議なし、という雰囲気でもなかったが、積極的に反対意見を出す者もいない。

摩利「よろしい。早速行動に移つてくれ。レコーダーを忘れるなよ。司波、十鬼蛇、森崎については私から説明する。他の者は、出勤！」

あれから摩利の説明を受けたところでとりあえず、という形で解散になった。：とはいえ、王馬は達也と居る事を好んでいるが：すると、背後から森崎に呼び止められた。

森崎「はったりが得意なようだな。会長や委員長に取り入ったのもはったりを利かせたのか？」

王馬「ヘツ：哀しいなあ、お前。シバタツヤがさつき、ワタナベマリと話してるときに羨ましそうに見てたからな？」

達也「そうなのか？」

森崎「なっ!?! 貴様だつてそうだ!! あんな大勢の中で調子に乗りやがって！」

王馬「C A D<sup>玩</sup>壊<sup>具</sup>されたからつてそうムキになんなよ。」

それを聞いた達也はクスツ、と笑みをこぼし、森崎はその逆の反応で般若の如く苛立つ表情になっている。

森崎「CADを壊したくらいで……ハッ！僕はお前らとは違う。一昨日は不意をつかれたが、次はもう油断しない。お前らと僕たちの格の違いを見せてやる。」

そう言いながらこちらに背を向けて歩き出した。

王馬も達也も、別に気にしていないような顔で森崎を眺めていた。

千葉エリカと待ち合わせていたにも関わらず、教室の前に彼女の姿はなかった。

王馬「居ねえな。」

達也「別に良いけどな。」

達也は携帯端末のLPSを立ち上げた。

敷地内の平面図と、その中をゆくり移動する赤い光点が表示される。端末の電源を切らない程度の配慮はしてくれているということだ。

まだそれほど遠くへは行っていない。

探しに来ることを完全に当てにされている。

表示を拡大して位置を特定し、エリカの端末が発している信号へ向けて、達也と王馬は歩き出した。

王馬「ストーカーって奴か？」

達也「違う、断じて違う。」

エリカ「お祭り騒ぎね、文字通り……」

ぼそりと独り言を呟くエリカ。そしてそんな自分に気付いて、独り笑いの衝動に吞まれそうになった。

彼女は元々、独り言が多い方だった。

だが、入学式からずっと、この癖は影を潜めていた。

エリカ（一人が珍しい、か……二人とも女の子を見る目がないなあ……）

中学生時代も、小学生時代も、彼女は一人で見ることの方が多い少女だった。

人間嫌い、という訳ではない。どちらかというと、愛想は良い方だ。誰とでも、すぐ仲良くなれる。

その代わり、すぐ疎遠になってしまう。

四六時中一緒にいる、いつも連れ立って行動する、ということができないからだ。

人間関係に執着が薄いからだ、自分では分析している。

比較的仲良くしていた友人からは気まぐれな猫みたいだ、とも言われた。

仲違いした友人から、お高く留まっていると言われたこともある。



まわりつく男の子は絶えなかったが、長続きた男の子もまた、いかなかった。自由に、気ままに、何の約束にも縛られず。

それが彼女のモットーだったのだ。

エリカ（モットーだったんだけどねえ……最近のあたしはチョツとおかしいかも……）客観的に見て、最近の自分さ彼等に付きまといつて居る気がする。王馬にかわいいなんて言われて、浮かれています自分が居る気がする。今まで寄ってきた男子だつてそうだった……けど、何か違つた。

だから自分は一緒に回ろうなんて言い出したのだろうか、一週間足らずだからその内飽きるかもしれない、が今回は何か違うかもしれない、とも思うのだ……

王馬「探したぞ。」

約束の時間から十分、校舎内から校庭へ、ちようど昇降口を出たところで、エリカは聞き覚えのある、あの日かわいいといった言つた声を聞いた。

エリカ「王馬くん、あ……それと達也くん。」

達也「俺はついで、か……」

エリカ「ああ、いやいや！語弊があつたね！ごめんね……」

王馬「探したのに居ねえからよ。」

エリカ「ごめんごめん。」

達也「とはいえだ、十分も銜合わせの時間を過ぎてしまった、悪かった。」

エリカ「あつ、うん……」

王馬「まあ、その待ち合わせ場所に居なかつたけどな。」

王馬のその一言にエリカはグツ、と言い、達也は少し笑った。

エリカ「王馬くんさあ、性格悪いって言われない？」

王馬「言われたこと無えなあ。シバタツヤはどうだ？」

達也「性格に文句をつけられたことはない。人が悪いと言われたことならあるが。」

エリカ「同じじゃん！てか、そっちの方が酷いよ！」

達也「ああ、違つた。人が悪いじゃなくて、悪い人だつた。」

エリカ「そっちの方がもつとひどいよ！」

達也「悪魔と呼ばれたこともあるぞ。」

エリカ「もういいって！……はあ……はあ、王馬くんは無いのね……」

王馬「鬼。」

二人「へ？」

王馬「鬼つてなら呼ばれた事あるぞ。ああ、あとワカメとか……」

二人（「二つ目は良いとして、二つ目は髪の話か……」）

エリカはがつくりと項垂れた。

## 第9話 劍技

五分で帰りたくなつた。

甘く見ていた、と達也は認めずにいられない。

誰に対して、というわけでもないのだが、正直なところ、「馬鹿騒ぎ」といつても所詮は高校のクラブ勧誘と高を括っていたのだ、彼は。しかし、そんな生易しいものではなかつた。

なるほどこれなら、取り締まりが必要だろう。むしろ、十人やそこらでは少なすぎる。校庭を埋め尽くすテントとテントの隙間に、人垣が築かれている。その人垣の向こうでは、脱出不可能となつた王馬とエリカがいた。

彼女の身ごなしもかなり機敏だつたのだが、数の暴力には抗しきれなかつたようだ。……対する王馬は、身ごなしは良いのだが、別に払い除けようともしない。

体格もデカく、背丈も大きい。まるで、周りの人間が小さく見えるようだ。

どうにかして、二人を救いたいのだがあんな人の瓦礫にわざわざ突つ込みたくはない。それに、王馬が居る。

困つた顔でも無いし、余裕がありそうだ。

エリカはとても目立つ美少女である。しかも、深雪が手を出すどころか手で触れるのも躊躇われるような美少女であるのに対して、エリカは火傷すると分かっている手を出してみたくなくなるようなタイプの美少女だ。

王馬はともかツコイイ。イケメン、男前、ハンサム……どれも違うようで合っているような、全てを足して割らなくて良いような。こちらは、女性からの支持が多く、王馬の周りを囲っているのはほとんどが女子生徒だ。別に、達也が地味な訳ではないが、隣が目立ちすぎている。

まあ、今起こっているのは二人にクラブの勧誘が起きいているということだ。二人が二科生という理由は何処へやら……もはや、外見でしか選んでいないのが丸わかりである。人垣の奥で何が起きているのか……

エリカ「ちよっ!?!…ヤメて!!」

彼女の肩を掴んだり、引つ張ったり、後ろから抱きついたり、胸を触られたり……と、挙げるとキリが無い。

それに、王馬に対しても女子生徒から厚く張った胸筋を触られている。男女問わずこれはセクハラ行為だ。

深雪「……何かイライラします。」

その同時刻に、とある美少女にイライラが募ったとか。

まあ、そんなことはさておき、この状況をどうやって打開するのが今するべきことだ。

達也は自分自身にどうするか、問うていたが、それも杞憂に終わる。大きな瓦礫が動き出した。

一人の男を中心として：

王馬「チツ、暑苦しい。おい、チバエリカここから離れるぞ。」ギユツ

エリカ「へ？あ、ちよちよ王馬くん!」

王馬はエリカのところまで移動し、周りにいる有象無象たちを払い除けてエリカを肩に担いだ。これには、達也もキョトン、となったが次第に目が合い、合図を受ける。

それを了承した達也は人の居ないところへと移動する。

王馬「掴まってるよ。」ダツ

エリカ「え、速ツツ……」

王馬はエリカを担いで、達也に誘導してもらう形になって移動した。後ろではガヤガヤとした騒ぎが起きていたが知らんぷり。一陣の風が、割くようにして吹いた。

やがて、達也に連れられて、王馬達は校舎の陰まで逃げおおせた。

担いでいたエリカを地面に落とすと、「もうちよつと優しく扱ってよ!」と言われるが、「注文の多い女王様だな。」と、王馬に一蹴された。

だが、エリカは事態の重さに今気づく。

髪はひどく乱れ、ブレザーが片側に大きくずれ、真新しい制服にあちこち皺が寄り、完全に解けてしまったネクタイが右手に握られている。

エリカ「見るなっ！」

王馬「ん？…どうかしたのか？」

達也「いや、あのだな…」

もちろんこの男にデリカシーという言葉が脳内には無いので、さらにエリカに近寄る。近寄られたエリカは顔を真っ赤にして、頭が、いや身体全体が沸騰しそうだった。

王馬「なんか隠してんのか？胸ンところで縮こまってよ。」

エリカ「隠してるわよ!!それよりも見たかどうか聞いてんの!!」

達也「王馬、エリカは女性だろう？色々隠したいことがあるんだ…分かってくれ。」

王馬「ふくん、めんどくせーんだな、女つてのは。」

なんとか達也によるアシストで難を逃れたエリカ。しかし、まだ事態が終息しているわけではない。

エリカ「見・た？」

王馬「何が？」

エリカ「見・た？」

王馬「白かったな。」

エリカ「ツツツ~~~~!!!!」

王馬が言った白い、という言葉はエリカの肌の色を指しているわけであつて、下着が、という意味ではない。

しかし、悪い意味で取ってしまったエリカは更に顔を真っ赤にし、声にならない声を出している。

達也「はあ…」

おまけに達也もこんな顔。

エリカ「ぼかつ!」

王馬に対してエリカは力が入っていないチヨツプをした。

受けた王馬は、少しだけ急変した。

いくらなんでも叩かれるのは嫌いだったのだろう。

「…テメエ」と、悪態をつけて不機嫌になった。

そのときの王馬の表情が少し怖かったのか、エリカはそそくさと達也を盾にした。

ちなみにその後は普通に接していたため、それほど悪い状況ではなかったのだろう。

三人が足を運んだ時、第二小体育館、通称「闘技場」では剣道部の演武が行われてい

た。

三人は小体育館の壁面高さ三メートルに回廊状に設けられた観戦エリアから、剣道部のデモンストレーションを見下ろしていた。

エリカ「…ふーん、魔法科高校なのに剣道部があるんだ。」

達也「どこの学校にも剣道部くらいあると思うが？」

エリカ「…意外。」

達也「何が？」

エリカ「達也くんでも、知らないことがあつたんだね。それも、武道経験者なら大抵知ってるようなことなのに。」

武道経験者、という言葉に達也は引つ掛かった。同じく武道経験者…？である王馬も知っていることなのだろうか。横を覗くと、演武を静かに見つめている。…いや、見下しているの方が正しいだろうか。

エリカ「達也くんって何でも知ってそうな雰囲気だから、意外だなくって。…王馬くんは？」

エリカも王馬を覗くように見つめると。

王馬「…あれ、本気でやりあつて無えだろ。」

エリカ「え……ま、まあ演武だからね。」



王馬「それなら見るだけ時間の無駄だ。」

そう言うのと王馬はどこかヒマそうな表情で虚空を見上げた。それに対するエリカも「そう、だよね……」と、呟いた。

エリカに教えてもらった剣道のこと。

魔法師やそれを目指す者が高校生レベルで剣道をやることはほとんど無いんだそう。

魔法師が使うのは『剣道』じゃなくて『剣術』、術式を併用した剣技のため。

魔法師になろうという者はほとんど剣術に流れてしまうそうだ。

レギュラーによる模範試合は中々の迫力だった。

中でも目に止まったのは女子部二年生の演武だった。

女性としてもそれほど大柄とは言えない、エリカとほとんど同程度の体格で、二回り以上大柄な男子生徒と互角以上に打ち合っている。

力ではなく、流麗な技で打撃を受け流している。

しかも、まだまだ余裕がありそうだ。

模範試合に相応しい華のある剣士だ、と達也は思った。観衆もほとんどが彼女の技に目を奪われていた。

しかし、ここにも例外はいた。

それもごく身近に。

彼女が、殺陣のように鮮やかな一本を決めて一礼すると同時に、不満げに鼻を鳴らす音が聞こえた。

王馬「へっ、雑魚相手に粋がってんのか。」

エリカ「同感、つまらないわ。手の内の分かつている格下相手に、見栄えを意識した立ち回りで予定通りの一本なんて。試合じゃなくて殺陣だよ、これじゃ。」

評論家が二人居たらしい。いや、この場合評論家というのは合っていないか。根本から否定する感じだ。宣伝の為の演武のため、仕方無いかと思われるが：

三人が観戦ゾーンから降りて体育館の出口に差し掛かったとき、勧誘の口上とは別種のざわめきが背後から伝わった。ハッキリとは聞こえないが、何事か言い争っているのは分かる。三人は、興奮の高まりつつある人の輪の中へ割って入っていった。

三人が目撃したのは対峙する男女の剣士の姿だった。

女の方は、ついさっきまで試合に出ていた：二人に言わせてみれば殺陣を演じていた女子生徒。

胴はまだつけているが、面は取っている。

セミロングストレートの黒髪が印象的な、なかなかの美少女だ。あの技にこのルックス、新人勧誘にはうってつけだろう。

王馬「……ヒトメボレってやつかい？シバタツヤ。」

達也「いや、そういうわけじゃなくてだな…」

エリカ「ふーん、達也くんってああいうのが好みなの？」

達也「…違う。」

エリカ「そっか…なんかつまんないな。」

達也「なんだそれは…」

エリカ「試してみただけ。ちなみに王馬くんもああいうのが好み？」

王馬「お前の方がカワイイんじゃないか？」

その一言にまた、エリカは頬を赤くさせた。

達也は心で天然たらしなんだろう、と呟いた。

まあ、それはさておき…

男の方はそれほど大柄ではない、多分達也より小さいが、全身がバネのような体つきをしている。

こちらは竹刀こそ持つてはいるが、防具は全くつけていない。

「剣術部の順番まで、まだ一時間以上あるわよ、桐原君！どうしてそれまで待てないのっ？」

「心外だな、壬生。あんな未熟者相手じゃ、新入生に剣道部随一の実力が披露できないだろうから、協力してやろうって言ってるんだぜ？」

「無理矢理勝負を吹っ掛けておいて！協力が聞いて呆れる。あなたが先輩相手に振るつた暴力が風紀委員会にバレたら、貴方一人の問題じゃ済まないわよ！」

「暴力だつて？おいおい壬生、人聞きの悪いこと言うなよ。防具の上から、竹刀で面を打っただけだぜ、俺は。」

仮にも剣道部のレギュラーが、その程度のことでは泡を噴くなよ。しかも、先に手を出したのはそつちじゃないか。」

「桐原君が挑発したからじゃない！」

切っ先を向け合つておいて、今更口論もなかるうに、とは思つたが、当事者同士が疑問に答えてくれるのは好都合だった。

エリカ「面白いことになってきたね……」

王馬「男女のイザコザつてやつかい？」

楽しそうに見ている二人がいた。

王馬「さつきの茶番より、ずっと面白そうなモンが始まりそうだな。」

エリカ「女子の方は試合を見たことあるのを、今思い出した。『壬生紗耶香』。一昨年の中等部剣道大会女子部の全国二位よ。当時は美少女剣士とか剣道小町とか随分騒がれてたわ。」

王馬「なんだよ、二位かよ……」

達也「なんで二位がそんなに……」

エリカ「チャンピオンはその……ルックスが、ね？」

マスコミなどで、そんなものだろう。

エリカ「男の方は『桐原武明』。こっちは一昨年 of 関東剣術大会中等部のチャンピオンよ。真正正銘、一位。」

王馬「お、今度は一位か……」

達也「全国大会には出ていないのか？」

エリカ「剣術の全国大会は高校からよ。競技人口じゃ比べ物にならないからね。」

剣術は剣技と術式を組み合わせた競技、ならば魔法が使えることが競技者の前提条件となる。

魔法学の発達により魔法を補助する機器の開発が進んでいるとはいえ、実用レベルで魔法を発動できる中高生は、年齢別人口比で千分の一前後。

成人後も実用レベルの魔法力を維持している者は更にその十分の一以下。この学内でこそ二科生は落ちこぼれ扱いだが、全人口比で見れば彼らもエリートなのだ。

王馬「始まるみたいだぜ。」

その声に、二人は中央にいる二人を見る。

桐原「心配するなよ、壬生。剣道部のデモだ、魔法は使わないで置いてやるよ。」

壬生「剣技だけであたしに敵うと思ってるの？魔法に頼り切りの剣術部の桐原君が、ただ剣技のみに磨きをかける剣道部の、このあたしに。」

桐原「大きく出たな、壬生。だったら見せてやるよ！身体能力の限界を超えた次元で競い合う、剣術の剣技をな！」

それが、開始の合図となった。

いきなり、むき出しの頭部目掛けて、竹刀を振り下ろす桐原。竹刀と竹刀が激しく打ち鳴らされる。

悲鳴は、二拍ほど遅れて生じた。

見物人には、何が起こっているのか分からなかったことだろう。

ただ、竹と竹が打ち鳴らされる音、時折金属的な響きすら帯びる音響の暴威から、二人が交える剣撃の激しさを想像するのみ。

…少数の、例外を除いて。

達也「女子の剣道ってレベルが高かったんだな。あれが二位なら、一位はどれだけ凄いだ？」

エリカ「違う……あたしの見た壬生紗耶香とは、まるで別人。たった二年でこんなに腕を上げるなんて……」

王馬「女が有利だな。」

二人「「え？」」

王馬「男は殺そうとまではしてねえはずだ。最初の一撃は受けられることを見越したブラフだ。

魔法を使わねえっていった上で、更に手を制限して勝てるってんなら、実力に差は無えはずだ。

力は上でも、技術がある：見りや分かると思うぜ。」

エリカ「すつご……王馬くんってこんな風に喋ることあるんだ……でも、概ね賛成。」

王馬「……ただ、このまま我慢出来るとは思わねえけどな。」

達也も同じく、王馬と考えが被っていた。同じ武道経験者である故か……いや、片方はまだ闇に包まれていたままだったな。

桐原「おとおおお！」

両者が真つ向からの打ち下ろし。

エリカ「相討ち？」

達也「いや、互角じゃない。」

桐原の竹刀は壬生の左上腕を捉え、壬生の竹刀は桐原の右肩に食い込んでいる。

桐原「くっ！」サッ

左手一本で壬生の竹刀を跳ね上げ、桐原は大きく跳び退った。

達也「途中で狙いを変えようとした分、打ち負けたな。」

エリカ「そうか、だから剣勢が鈍ったのね。完全に相討ちのタイミングだったのに……結局、非情になれなかったか。」

勝負あつた、と見たのは達也たちだけではない。

剣道部の面々は安堵の表情を浮かべている。

いつの間にかギャラリーの最前列に来ていた、剣道部とは別の道着の一団、剣術部の部員たちは、苦虫を噛み潰している。

壬生「真剣なら致命傷よ。あたしの方は骨に届いていない。素直に負けを認めなさい。」

凜とした表情で勝利を宣言する壬生。

その言葉に、桐原は顔を歪めた。

桐原「は、ははは……」

王馬「……変わったな。」

突如、桐原が虚ろな笑い声を漏らした。

負けを認めたのか？

そうは見えなかった。

改めて構え直し、切っ先を真っ直ぐに向け、桐原を鋭く見据えている壬生。



桐原「真劍なら？俺の身体は斬れていないぜ？壬生、お前、真劍勝負が望みか？  
 だったら……お望み通り、真劍で相手してやるよ！」

桐原が竹刀から離れた右手で、左手首の上を押さえた。  
 見物人の間から悲鳴が上がった。

ガラスを引つ掻いたような不快な騒音に耳を塞ぐ観衆。

青ざめた顔で膝をつく者もいる。

一足跳びで間合いを詰め、左手一本で竹刀を振り下ろす桐原。

片手の打ち込みき、速さはあつての最前の力強さはない。だが、壬生は、その一撃を  
 受けようとせず大きく後方へ跳び退った。

当たつてはいない。せいぜい掠めただけだ、

それなのに壬生の胴に、細い線が入っている。竹刀が掠つて、切れた痕だ。

竹刀に真劍の切れ味を与えているのは、振動系 ・ 近接戦闘用魔法『高周波ブレー  
 ド』。

桐原「どうだ壬生、これが真劍だ！」

再び壬生に向かって振り下ろされる片手剣。

壬生（嘘……いや、嫌だ！あんな事しなければ……）

しかし、無情にも剣はこちらに迫ってくる……

壬生（…いやだ……嫌ツ!!……）  
そして艶やかなしいその肌に触れた……

ガキンツツツ!!!

はずだった……

気付いたのは数秒遅れての事……壬生。

壬生「え……あ、あれ……？」

斬った感触が無かった瞬時での事……桐原。

桐原「な、なんで!？」

各部門たちも驚きの表情を、そして周囲は一気に冷めきつた。今、彼らの眼の前ではあり得ないことが起きていた。

エリカ「え、嘘……なんで!？」

達也「魔法を遣っていない!なに何故!？」

高周波ブレードとは、鎧を斬るのも容易い。

生身の人間がそれに触れてしまえば……解るだろう。

ならばこの人間は何なのか……？

この男は何なのか…？

中央に三人の人物が居た。

尻もちをついてしまっている少女、壬生紗耶香。

高周波ブレードを振り下ろしている男、桐原武明。

そして…

「おつかねえ事するなあ…ネエちゃん。」

高周波ブレードを受けてなおも、無傷でいる男。

王馬「女にムキになんなよ、チャンピオンがよ♪」

十鬼蛇 王馬…

## 第10話 金剛

刃物から身を護るとしたら何か？

同じく硬い物で対抗するか…？

遠距離に適した武器で交戦するか…？

はたまた抵抗せずに覚悟を決めるか…？

男がとつた行動は違った。

桐原「な、なんで…!？」

壬生「う、嘘でしょ…!」

自分自身が硬くなれば良いだけの事だ。

騒ぎが起きたのは少し前の事。

桐原武明と壬生紗耶香のいざこぎについてだ。

桐原武明は殺傷性の高い高周波ブレードを壬生に打ち下ろそうとした。しかし、肉が切れる感覚ではなく硬いものに当たつたような感覚が手をビリビリと刺激する。

眼前には、女ではなく男…しかも王馬ウィードが居た。

王馬「粹がなのは止せよ…キリハラタケアキ。」

これは今から少し、いやだいぶと言つていいかもしれないほど昔の話。まだまだ小さい頃の王馬と、もう一人の男が何やら戦闘：？を繰り広げている所。

男は肩まであるだろう髪を右側に束ねており、布を纏っている。あとは、筋骨隆々といったところだろうか。

「うーん…」

男は悩んでいた。

「まーだわかんねえのか？お前よお。」

王馬に対して。

王馬は男に対して刃物を突き立てていた。いや、突き刺していた、これも違うか…刺しているのに、刺さっていなかった。

王馬（クソがツ!!!何で刺さらねえ!?)

次第に刃物は折れてしまった。傍から見れば不思議な光景だろう。ナイフよりも柔らかい皮膚が、ナイフよりも硬いだなんて。

「だから無駄だったの。」

そう、この男こそが…

「今のお前じゃあ、俺には勝てねえって。」

王馬の後の師匠である…

「もつと強くなりてえだろ？だから教えてやるって言っただよ、二虎流をよ。」  
十鬼蛇とぎたにこ二虎である。

刃物が刺さらなかった悔しさにより、王馬は次に丸い物を拾い二虎にぶつける。

王馬「誰がテメーなんかにツツツ!!」ブンツ

しかし…

二虎「お？当ったりー♡」ガッ

「またも、身体に当てた物の方が碎けてしまった。」

王馬（コンクリがバラバラに!!）

二虎「君、イイ球投げるねー？ウチで二虎流やってみない？」

王馬（何なんだコイツの体!?!）

それでも煽られてしまう王馬はついカツ、となってしまう、素手で殴ろうとする。

二虎「あ、素手はやめときな。」

ズドドドドドドドドツ

王馬「!!」

殴ってしまったが、もう分かるだろう。

二虎「あーあーもー、だからやめとけつてのに。」

王馬の拳は逆に血まみれになってしまい、皮膚が剥けて、中の肉が見えてしまっている。苦悶の表情を見せる王馬に、二虎は少しだけ笑ってしまう。

二虎「なんでお前の手の方がイカレちまったのか？科学的に教えてやろう。」

二虎「問題。10キロの鉄と10キロの豆腐、同じ速さでぶつかった時痛いのはどっちだ？」

王馬「ぶつ殺すっ!!」

二虎「聞けよ。」

全く話にならない王馬に、今度は二虎が困ったような表情になってしまう。

王馬「くくくくくッッッ!!!」

二虎「…ま、つまり俺が言いたいのはだな、硬い方が痛えつてことだ。」

すると二虎は大きく出来ているコンクリの壁に向き直る。王馬はまだまだ、ヤジを投げ飛ばすが二虎には全く届かない。

二虎「いいか、よく見とけ。」ダッ

すると、二虎はコンクリの壁に向かって勢いよく走り出す。

二虎「衝突の瞬間…」

ドオオオオオオオッ

二虎「肉を締めるッ!!」

二虎が体当たりしたコンクリの壁は豆腐の如く、粉々に砕け散った。それを見た王馬は目を見開き、口が閉じないでいた。

二虎「どうだー? すぐえだろ? ん??」

二虎の声に、反応出来ないくらいにこの衝撃がまだまだ響いている。

二虎「全身の筋肉を一瞬で硬直させ、鋼と化した肉体を叩きつける。『二虎流・金剛ノ型』の基本技『不壊<sup>ブ</sup>』だ。」

二虎「どうだ? 二虎流、習いたくなってきただろ? んん??」

王馬「ツツツツ誰が習うかよツツツ!!!」

これが、この技の性質である。

そして現在…

王馬（また借りとくぜ…アンタの二虎流を。）

そして王馬は肩でタツクルをし、桐原を大きく弾き飛ばした。弾き飛ばされた桐原は5メートル程飛んだ。

暫くの間、沈黙が流れた…そして、怒鳴りつけるような声が聞こえた。

「おい、どういふことだっ!?!」



そしてそれを、達也がカバーするため横から割って入ってくる。

達也「魔法の不適用正使用により、桐原先輩には同行を願います。」

この言葉によって、またまたザワついた空気が流れた。

「誰だ、アイツ等」

「見たことあるよ」

「新入生じゃない？」

「見ろよ二科生だ……」

「補欠がでしやばりやがって……」

「でもあの腕章って……」

「そういえばあたし、二科生の新入生二人が風紀委員に選ばれたって聞いたよ？」

「マジかよ、二科生が風紀委員？」

このざわめきは、剣術部が陣取っている辺りから聞こえてくる。男女の別はなかった。二人に対して、特に王馬に対して非交友的な視線を送り、ざわめきがどんどん大きくなっていく。

「おいつ貴様っ！ふざけんなよ！補欠の分際で！」

王馬の胸倉に手が伸びてくるが……

「ゴハアツ!？」

平手で一蹴されてしまう。

これを見た達也は内心で「あちゃー…」と呟いてしまい、目を伏せた。

そう、これが火種となった：

「貴様——っ!!!」

次々と襲いかかってくる剣術部員達、しかも王馬目掛けてである。女子生徒の大半が悲鳴を上げて、その場から逃げ出している。

エリカ「ちょ！王馬くん!!」

エリカも王馬を心配して、近寄ろうとするが、剣術部員達がそうさせなかった。

王馬「腹ごなしにはちようどいいか。」

「調子に乗んなッ!!」

迫りくる上級生が拳を繰り出してくる前に蹴りを浴びせ、向かい側の方から迫りくる右拳を掌で止めて、勢いを保ったまま捻る。すると、濁いた音が響き膝から落ちてしまう。

達也は応戦しようかと考えたが、王馬に睨まれ、大群の中には飛び込まなかった。その側にエリカが近寄ってきて、「王馬くんを助けなさい！」と言われたが、応戦する必要は無いと答えると、眉を吊り上げ見たこと無いくらいに怒っていたが、「見ているとい

い、王馬の強さを」と、一言だけこぼした。

「ぐあつー!」ボキッ

「なんだとっ!?!」ヒュルッ

迫りくる拳や蹴りを躲して、反撃に転じる。

とても、綺麗と言つていいこれこそが 殺陣に見える。

しかし、この殺陣にはシナリオが無い。

エリカ「き、綺麗…」

達也「ああ…」

二人はただ見ているだけだった。

王馬「力が足んねえなッ!」シュッ

王馬の蹴りが上級生達の顔面にヒットしていく。

薙ぎ払うかのように振り抜かれるその脚技は、目で捉えられるものでは無かった。

剣術部達がどんどんと宙を舞つていき、闘いになつていなかった。

その中で、一人壬生紗耶香が王馬に応戦しようと、らんとの中へ駆け込む構えを見せた。

「待て、壬生。」

だが、同じ剣道部の三年生部員が、彼女の腕を掴んで止めた。

壬生「司主将……」

彼女の顔は後ろめたさでいっぱいだったが、この三年生、県道部男子部主将、司つかさぎのえ甲の手を振り払わず、引つ張られるままにその場を離れた。

これに、皆が気づくはずも無かった。すると、二人の横を通る大柄の男子生徒が居た。その者から発せられるオーラは強いもの。二人は、一瞬くすんだが、再び歩き始めた。

その場はまだまだ荒れた状態であった。

数は少なくなってきた剣術部員達、達也とエリカは未だにこの光景の釘付けになっていた。

王馬も疲れを感じさせず一撃で倒していく豪快っぷり、かつ軽やかできれいに、舞うかの如くあしらっていく。

すると、甲高い声が闘技場に響いてきた。

「おーいねえ！ケッコーやるじゃん！」

その声に反応した剣術部員達は一斉に、顔を青く染めた。ガチガチと鳴るように首を回転させ、中には涙目になっている部員も居る。

振り返った先には、とても大柄で王馬よりも遥かに上回る体格、身長……そして、特徴的な金髪で獲物を仕留めるかのような双目。

その男は王馬達のところへ歩み寄って来る。



名字は？と、思ったがそんなことは今はどうでもいい。

どうやら目の前ではもう一争いありそうな予感だ。

理人「そう、この俺こそが理人様だ！…すつとぼけてるつつうことは、まだまだ俺の見聞が広まってねえって事だなあ。」

この名にエリカは少しだけ表情を鈍らせて、一気に喧騒な顔になった。

エリカ「理人：確かこの学園で警戒されている人物の一人。」

達也「知っているのか？」

エリカ「少しだけどね：噂で聞いたことがあるんだ。ある日、この学園内で喧嘩が起きたんだって：確か、一年くらい前らしいんだけど、三年生が数十人と相手は一人…」

達也「…まさかその一人が。」

エリカ「…うん、確か今は二年生だったはず：なら彼しかない…」

一年前、この学園では大きな騒動が起きた。

理人が当時、二科生でこの学園に入学し：当時の三年生と揉め事を起こした。

きっかけは些細な事であった。理人は見聞広めと称した殴り込みを各部活動に申し込んでいた。

戦闘に向いた部も、そうでない部にも彼は殴り込みを申しした。三年生達は、軽くあしらおうとしていた、それが甘かった。彼は生まれ持った戦闘センスで格上の生徒達を蹴

散らしていった。これには、風紀委員が黙っていなかった。

結果的に言うのと彼の暴虐を止めることが出来た。

しかし、学園は彼を『特定危険生徒』として見張ることにした。そんな彼がまた…

理人「随分と暴れてくれたみてえだなあ…ま、これには俺も黙っちゃいねえぜ♪」

エリカ「もしかして、闘う気!?!」

理人「俺はよお、お前らとは違つてVIP特別扱いされてんだ。それが何故かわかるか？」

王馬「さあな。」

理人「それは俺が強いからだ、誰よりもな！俺は強え、だからここを退学にもなんねえ、結局ウデのある奴が上に上がれる。それが俺だ。」

王馬「へえくじやあ何だい、俺等は上がれねえつてのかい？」

理人「そのとおり♪俺みてえな真似して、特別対応してもらいてえみたいだが、そういう訳にもいかねえ。」

王馬「ん？お前だけ特別だつてのかい？」

理人「当然だろ？それに、お前を潰さなきやなんねー理由がもう一つある。」

王馬「ん？」

理人「俺は元剣術部だからなあ…いくら雑魚でも下つ端が敗られたつてんだ、後始末くらいはしてやんねえとなあ？」ダッ

刹那、理人が仕掛けてきた。

単純な行動であった右拳を振りかぶって突進、まあ右ストレートが妥当だろうか。とはいえ、巨体から放つそのスピードは明らかに違うものであった。

エリカ「同時に動いた!!」

達也「いや…先攻したのは…」

バチツ

理人「グツ…!…痛えな。」

王馬だった。

理人「オラアツツ!!」ドンツ

王馬「…!」

王馬は自身の攻撃が通用しなかったことに対して、一瞬だけ動揺した。その動揺から、遅れをとり理人の右拳が握られていることに気づけなかった。

達也「王馬の打撃に耐えた、のか…?」

しかし、王馬とてそう甘くはない。

理人の反撃に対してもしつかりと対応し、ガードで防いだ。

理人「チツ!防ぎやがった。」

エリカ「理人…打撃に当たりに行く事でタイミングをずらしたね…要するにダメージ



を軽減したわけだし。」

達也「ああ…型にとらわれない奇抜な打撃…」

王馬はキックボクシングスタイルで縦にガードを構えているのに対して、理人は横広くまるで獣を連想させるような闊い方だ。王馬は前に攻撃するのに対して、理人はヤケにフック、横からの攻撃が多い。…まるで何かを狙っているように見える。

王馬「…つと。」スッ

理人「ひっ…！」ガンッ

王馬が懐に入ったところでアッパーを放とうとしたが、平手でそれは防がれ、右肘が王馬の頭部に放たれようとしたが、ぎりぎりですそれを避けた。

エリカ「王馬くん…押されてない…？」

達也「ああ…現状、押され気味だな…それに、相手はストライカーとして、高いレベルに達していると思う。」

エリカ「このまま打撃戦が続けば、戦局はどっちが有利になると思う…？」

達也「このまま、か…それは難しいが現状は理人だ。」

エリカ「そ、それマズインじゃない…？さっきの達也くん見てたでしょ？あんなの喰らったらいくら王馬くんでも…」

達也「確かに、な…」

エリカ「それなら！事態が大事になる前に風紀委員とか呼んだ方が良いんじゃない。」  
達也「エリカ。」

エリカ「…な、なに？」

達也「あいつが風紀委員だ。もちろん俺もな。」

エリカ「！」

達也「確かに劣勢かもしれないが、あいつはそうヤワじゃない…と、思う。」

エリカと達也は中央で闘っている二人を見る。

やはり体格の大きい理人が王馬を押ししている。エリカは苦渋の表情を浮かべるが、達也は違った。

短い時間だけが信頼感を抱いているような気もする。

だから王馬がこのままで終わるとは思えない。

他の剣術部員達も目を覚まし、中央で起きている出来事に圧倒されていた、實力を持つ強者二人に。

そして王馬に敗れた桐原も目を覚まし二人を覗いていた。

桐原（…なんだよアイツら、バケモンかよ…）

彼らが見ている闘いは、バケモノ同士の闘いにしか映らなかつた。重く、鋭く、一撃一撃が深すぎる。

自分たちにあんな力があるのだろうか、まさに自分自身の不甲斐なさを感じるほどに……彼らが輝いて見えた。

あれからのくらしい経つただろうか、いや時間にしてみれば三分弱ぐらいだったと思う。それほど、時間も忘れてしまうほどに彼らの闘いに見惚れていた。

理人（コイツ……スピードが落ちねえ……！持久戦が端から狙いか……！）

理人に疲れが見えてきた。それもそうだろう、全て全力の一撃を放っては躲かれ、放つては躲かれ、を繰り返しているのだから。

理人（なら……！）ガシツ

理人が王馬を組み伏せようと両肩に手を伸ばした。

そして、グググツ……と押していく。王馬も一瞬何が起きたのか分からなかったが、理人が考えている事をバツチリと当てて笑みを浮かべる。

理人「ああん？何笑ってんだ……！」

ドンツツ!!

王馬は両手が塞がれた状態でハイキック、しかも縦に蹴り上げた。理人は当然反応出来るはずもなく、顎にクリーンヒット。達也とエリ力は驚き、というよりも王馬の戦闘センスに更に感心していた。

達也（あの状態から蹴り上げるか……）

エリカ「ナイスだ王馬くん！」

蹴り上げられた理人はまた反撃をしようとするが、頭上にまだ脚が残っていた事に気づく。そう、返しの蹴りがまだ残っていた。

理人「ぐはっ!!」ドスンッ

今度は顔面にモロに喰らった。いくら体格が大きいと言えどバランスを崩してしまい、王馬に馬乗りになれてしまう。そしてそこからは防戦一方の理人だった。

上から降ってくるのは拳の雨だ。王馬のハンドスピードには対応しきれずガードで防ぐしか無かった。

やがてこじ開けられて行き：

王馬「ガラ開きッ……！」ドオン

理人「ガアッ!!」グシャ

ガードをこじ開けていき、拳が理人の顔面に叩きつけられていく。音はグシャッ、グシャッ、と、肉を叩いていく音だ。理人も次第に白目を見開いていき、ガードも解かれ、無防備になっていく。

王馬は手を緩めず、どんどんと拳を振り降ろしていく。

縦に、横に、間髪入れずに落としていく。

この状況をエリカは楽しそうに見ていた。達也は、どこか安心出来ないような顔でい

た。剣術部員達は何を思うのか、その場から一切離れることが出来ないで見ていた。

エリカ「やった！完全に流れを掴んだ！」

「おいおい…理人が圧されてるよ。」

「アイツ強いぞ…」

やがてざわざわとした空気になりながらも、中央からの決闘に目を離さずに集中していた。

王馬（理人…力もある…センスも上々…なかなかのファイターだが、お前程度の相手は何度も倒してきてんだよ！このままだと勝負が決まっちゃうぜ…？）ドツゴツドカツ  
さあ…どう動く？

ドツ

ドツ

ドツ

ドツ

理人「…！」ニヤア

エリカ「イケる、王馬くんイケるよ！もう止め差しちやえ！」

エリカも、段々と気分が乗ってきたのか前へ前へと体を押し出して行った。達也はその事にあまり気にしていなかったが、何かがおかしい、と思い始めた。

王馬「オラ、もう終わっちゃうぜ!!」シユツ  
そして、止めが差され……

達也「……ッまずい！避ける、王馬ッ!!」

ザクツ

王馬は理人に止めを差そうとしたが、それは叶わなかった。突然、降ろそうとした右腕からは斬られる様な痛みが走る。

そして、辺りには血が舞う。

誰のものなのか？勿論、王馬から出た血だ。

王馬（……なんだあ？）

理人「ッ！」ゴオオッ

そして、今度は分かるように、理人からは右手を大きく振るのが確認出来た。しかし、

王馬はそれに一瞬気づけなかった。そして、またも掠る程度だが喰らってしまった。

エリカ「え…嘘、アレってさっきの！」

達也「また、遅れたか。」

王馬は馬乗りになっていた理人から跳んで、後ろに下がる。その瞬間、掠った部位からはまたも出血、勢いよくブバアツ、と鮮血が舞う。これにはエリカも口を手で閉じて、神妙な顔立ちになる。

エリカ「あの出血は打撃じゃないっ！あいつ、刃物を持って…！」

すると、辺りからはまたもガヤガヤと騒がしくなり始めた。

「出たッ！…レイザーズ・エツジだ!!」

「アイツまた使いやがるのかよッ…！」

「切り裂き理人だッ!?!アイツ死んじまうよッ!!」

「バラバラにされる前に逃げろーッ!!」

先程まで、敵関係であったが何故かこちらを擁護するかのよう注意を喚く。しかし王馬は傾ける耳もなく、目の前の立ち上がる男をしつかりと見る。

エリカ「レ…?レイザーズ・エツジ…?」

達也「切り裂き理人…か…」

王馬「…」

警戒するように理人を見ながら、掠った部位を触つてみる。痛み、その中でも切り裂かれたかのような痛みだ。

打撲に非ず正しく裂傷……

この瞬間、王馬と達也は理人の技の原理が分かった。

王馬「こそぎ落とした」な？……指先で肉を……」

そう言うのと理人は不気味に笑いながら、右手を前に構える。右手からは「血」、王馬と達也の考えは当たったようだ。

達也（やはりそうか……あの男が使った技……握力か。）

測ったかのように達也はふん、と鼻を鳴らす。それに気づいたエリカは「どういう事なの？」と、達也に教えを願う。

達也「握力は大きく分けて三種に分類される。一つ目は“クラツシュカ”、即ち握りつぶす力。二つ目は“ホールド力”、物を保持する力だ。三つ目は“ピンチ力”、指先の力だ……」

エリカ「……じゃあアイツは三つ目のピンチ力が凄いつて事？」

達也「そのとおり、人の領域では無い。きつと断崖絶壁も身一つでよじ登れるんじゃないか？」

エリカ「……それって、“超人的”じゃない？」



達也「ああ、そんな超人的な力を攻撃に利用したらどうなるか…想像に難くない。」  
エリカ「じ、じゃあ…」

達也「奴の指先が触れた部位は急所となる…肉といわず骨といわず…悉く削られてしまおう…」

エリカ「王馬くんが危ないよッ！あたし達で止めなきやッ！」

達也「…」

エリカ「…なんで黙ったままなの…？王馬くんが死んじゃうかもしれないんだよ…？」

達也「…その必要は無い。」

エリカ「無くなんか無いよ！いくら強くてもあんなのじゃ！」

達也「もうコツは擱んだようだぞ？アイツは。」

エリカ「…え？」

そのあとは「まあ見ている…」と、エリカを落ち着かせた。本人が落ち着いているかどうかは別として、エリカ自身も分かることになる。十鬼蛇王馬は更にその上に居るのだと。

王馬（野次の反応…この技を見せるのは初めてじゃねえな…）

理人「よそ見する余裕はねえぞコラアツ!!」

王馬「…」

理人「殴り合いじゃ敵いそうにねえが…削り合いなら負ける気がしねえなあ!」

王馬「…そうかい。」

理人「散々ド突いてくれた礼だ。細切れにしてやるぜ…!」

王馬「…そりやご親切に…」

理人「もう出し惜しみは無しだツ! レイザーズ・エッジの更にその先を見せてやるぜツ!」

すると、達也の眼に見えたのは理人を覆う異常な程の魔法量。これには達也も苦渋の顔になってしまうものの王馬を信じて、割込むのは止めとした。

そして魔力を右手と左手のそれぞれ五本指に集中させていき出来上がったモノは…

理人「これで、真・レイザーズ・エッジの完成だツ!!」ギユイイイインツ

王馬「こりやまた、ご丁寧に…」

王馬は、理人を本気にさせた。

しかしまだまだまだ焦る表情の無い王馬。

レイザーズ・エッジ…その威力はとてつもない物だが、王馬はこれを対処しきれぬのか…?

## 第11話 超人

王馬と理人の距離はおよそ5メートル位離れているだろうか、しかし理人が既に右腕を振りかぶっているのは何故か。達也とエリカは嫌な予感がしていた。

理人「オラアツツ!!」

ザンツ、という音がした。すると王馬の腕から血が噴出した。どうやら射程圏内だったらしい。周りの人間はその場からたじろぎながらも離れていく。

エリカは口を抑えて観ているだけであつた。

達也もこれはマズイか、と思い一步踏み出すがそれに反応した王馬がアイコンタクトで「手を出すんじゃない」と、伝えてきたためそれ以上は踏み込まなかつた。

王馬「…広いな」

理人「まだまだ攻撃は終わってねえぞツ!!」ザンツザンツ

斜め十字に、左右の手を振るっていくとガードしている両腕に十字の傷が出来上がり、血が吹きでる。

さらに猛攻は止まらない、縦横無尽に滅茶苦茶に両腕を振り回す理人。達也の眼に視えるのは魔法での斬撃だつた。原理は高周波ブレードと何ら変わらない、が発生速度と

処理速度が数段階も上。おまけに殺傷能力もこちらのほうが高いだろう。

空気を裂き、血肉を裂く。さすがに王馬も触れたくは無いものだ。

王馬（速えのはもちろんだが、何より滅茶苦茶な動きをしてやがる…）

現在進行系で王馬は理人の攻撃を上手く避けている途中だ。避けている、しかし、空気を切り裂く間隔が当たる。ヒヤツとして集中出来ない、しかし理人は動きを緩めない。

エリカ「速いし滅茶苦茶じゃん！こんなものどうすれば…」

理人の動きは滅茶苦茶だ、しかし王馬と達也はこの時点で分かったことがある。理人の動きのレパートリー、そして速度。

右手を振るえば、左手を振るってくる、そしてまた右手。

確かに付け入る隙は無い、がそれが逆に仇となった瞬間を見計らう。

素早く繰り出される斬撃から身をかくぐり、重い一撃を与える。これが王馬の作戦だ。

理人「逃げてるだけじゃ勝負になんねえぞッ！」ザンツ

王馬「見えてんだよその技はよお！」スツ

左手が天に上げられた瞬間を王馬は狙った。顔面に少し斬撃を喰らってしまったか鼻の上あたりから出血する。

しかしかすり傷だ。一撃を与えることに比べたら何ら問題ない。

王馬「オラッ！」ドゴッ

理人「グッ……！」

右ストレートに見せかけての右肘の打ち下ろし、それが顎に当たり、脳を揺らす。そして体制が崩れたところを左の脚を高く上げて踵で落とす。しかし、これを受け止められてしまい、次に感じたものは左脚からの痛み。

よく見ると左脚を扶かれていた。

理人「近距離も俺の庭だってことを忘れてねえか？」

王馬「……」サッ

王馬は後ろに大きく跳び、距離を空ける。

すると眼前には立ち上がった理人が右手を後ろに構えて、何やら力を込めていることがよくわかる。

そして溜め込んでいるのは力だけでは無い……

王馬の眼にも視えた。陽炎の様にもみえるその実態、魔力であった。

達也「退がれ王馬ッ！」

これにいち早く気づいた達也は右手を前に突き出して魔力の分解を測る。しかし、丁度の時点で右手が王馬に打ち下ろされた。王馬は普通に避けようと試みたが出来な

つた。

王馬「……！」

エリカ「え……」

王馬の数メートル後ろにエリカがいた。

それに気づいた王馬がエリカの元に猛スピードで走り出し、エリカに体当たりをした。次の瞬間……

ドオオオオオオオオオオンツツツ

爆発音がこの闘技場に響いた。そして土煙が立ち込めて、達也たちの視界を塞いだ。

やがて土煙は晴れて辺りが見えるようになった頃……王馬たちが見えた。

エリカ「痛たっ……チョツト、何すんの！」

急にタツクルしてきた王馬に少々怒りを露わにするエリカ、それを聞いた王馬はハア……とため息をついて、さつき自分達の居たところに指を指す。それに反応したエリカは唾然とした。

先程まで綺麗に整えられていた地は削り取られたかのような跡だけが残っていた。しかも、5本……一人しかいない。

王馬「おうおう派手なことするねえ……」

理人「ほう、女を護って避けるとは随分と余裕があったみてえだな！」

理人だ。もし当たっていたらと考えると想像したくない。今まさに殺す気でこの魔法を放っていた。

達也（一歩間違っていたら死んでいたぞ……）

達也も冷や汗をかいてしまうほど、今の魔法はまずかった。エリカは口をパクパクと  
していて慌てふためいていたが、王馬の声で元に戻る。

王馬「退がっときな」

エリカ「え……あ、うん……」

エリカの肌には一切傷がついていない、が彼はどうかだろうか。腕、胸、脚……ほとんど  
ボロボロではないか。それに、出血量も尋常ではない……エリカはもしや、を考えていた。  
彼が万が一死んでしまった場合……

エリカ（アタシのせいだ……）

先程の攻撃によって彼は直撃を免れているものの掠った傷が増えていたことが分かる。  
正確には左肩、衣服はボロボロで中の肌どころか肉が見えてしまっている。

すると、肩に何かが当たった。

それは達也が右手を差し伸べていたことの証拠だ。

エリカは突然のことで咄嗟の判断が出来なかつた、が少しして自我を取り戻し、達也の手を取りその場から離れる。

理人「余所見するとは随分と肝が据わってんなあ」

王馬「うーん……まあ余裕はあるかな」

理人「そこまでしてよく頑張るねえ……人間」

王馬「……？人間だア？何だそりや。それじゃあまるでお前が……」

理人「そのとおり。俺は人間じゃねえ……！」

達也「……」

エリカ「……どういうこと？」

人間ではない、理人自身がそう語る……確かに、この闘いかたそのものは人間ではない。言うなれば獣だ。しかし理人とて人の身であるため獣ではない……別の言い方があるとすれば彼は超人だ。

打って良し、投げて良し、削って良し……死角などほぼ無いにふさわしい。

理人「俺のピンチ力は鍛えて得たものじゃねえ。生まれながらに備わっていた天性の才能だ。わかるか……？スタート地点から既にツ！お前らその他とは領域が違うんだよッ！」



そうだ：俺は強え、そこらの奴らとは違うんだ。すべてはあの日から違うと判ったんだ：

初めて硬貨をちぎったのは十一歳の時：

そりやあもちろん苦労はしたさ、あん時の俺はな。

でもあれから数年経って、俺はさらにパワーアップした。

あん時は周りにいるやつが驚いてたっけなあ：

そして目覚めた：目覚めた俺は力で支配することを覚えたんだ。喧嘩が強けりや周りのやつらは寄って来る。魔法科第一高校ガッに行こうつとときに反対はされた：お前にやあ無理つてな。でもどうだ？俺は奴らよりも強かった。たとえ一科生ブルームじゃ無かうと結局は才能が違え：この超指力をもってすれば捨る、ちぎる、えぐる：何でも思いのままだ。そこに魔力が組み合わされば、俺の敵は居なくなる：！

鋼を断ち切るなんて容易い。

理人「：：一郎」

王馬「：：？」

理人「俺の本名：：中田ナカタイチロウ一郎つて言うんだよ。」

エリカ「ナカタ：：」

達也「イチロウ……」

衝撃の事実……というわけでも無いが、至ってシンプルな名前にその場の全員は固まっていた。

王馬「……いい名前じゃねえか……なんだって一郎が理人になっちゃったんだ？」

理人「おーそれぞれ！よく聞いてくれた……ま、話しまえば単純な理由なんだけどよ」

映画やアニメのヒーローって大抵本名を名乗らねえよな？かわりにヒーローネームを名乗ってよお……カッキーよなあ……ガキの頃から憧れてたんだよ……

理人「だから超人たる俺もヒーローネームを名乗ることにした。……理人……「人の理」を超えた俺が「理人」と名乗るんだ……中々洒落が効いてるだろう？」

なんというかまあ……子供じみている内容だったな、と達也は思った。しかし……しかし、だ。彼が超人であることは達也自身も認めている。横に居るエリカを見た。彼女なら笑ったりするだろうな、と思っていたがそうではなかった。顔は不安一色、王馬を心配しているのだろうか？

……きつと先程の魔法による攻撃で自身のかわりに王馬が身を挺して護ってくれたことに罪悪感を抱いているのだろうか……どちらにしろ分からないがさっさと終わらせてくれた方が彼女の為でもあるだろう。

エリカ「レイザース・エッジ：またあれを出してきたら今度こそ……」  
達也「……………いや……………それはどうかかな……？」

不安な顔で達也の方を覗き込むエリカ。

エリカの眼に映る達也は余裕があり気な顔。もう一度王馬の方を見ると、全くといっていいほど焦りが見えなかった。

理人「つーわけで俺はヒーロー……「ペラペラとよく喋る」……ああ？」

王馬「ヒーローってのは寡黙なもんだぜ？」グリッグルツ

自己紹介をしている理人にうんざりしていたのか王馬は首をぐりぐりと回してストレッチをしていた。その光景が理人には悪く映ったのか王馬を鋭くにらみつける。

王馬「超人？寝ぼけんじゃねえぞ、お前ごときが凌駕できるほど人間は甘くねえよ」

エリカ「ツ！王馬くん煽っちゃだめだつて！」

達也「こりや大胆に出るな……」

理人「言ってくれるじゃねえか……俺のレイザース・エッジに手も足も出ないくせに……」  
王馬「攻略法は見つけた」

エリカは目をまんまると見開き、えっ!?!と素っ頓狂な声を出してしまった。しかし、そんなことに顔を赤く染めることはなく、王馬のいう攻略法に興味を惹きつけられていた。

理人「な……」

王馬「実を言うとおお……技の仕組みに気づくと同時に思いついてたんだけどな。魔法を使って広範囲を削いで、まだまだ奥の手があるのかと様子を見てたんだが……話を聞いてりやどうやらこれで全部みてえだな。……残念……期待外れだよ」

その言葉と共に王馬は理人の元へととことこと歩みよつていく。周りに居た剣術部員は今度こそ、彼の死を覚悟していた。それだけではない……エリカもだ。

エリカ「ダメだよ！近距離はそいつの距離だから！」

しかしそんな言葉も振り払って王馬はどうとう理人の眼の前まで来てしまっていた。

二人の距離、近距離いや……零距离に近いか……

こう見ると王馬と理人の体格差が分かりやすい。

理人「……おい、分かってのか？ここは俺の間合いだぜ？」

王馬「ん？いやあく……そいつはどうだろうね……？」

エリカだけでなく他のメンバー達も避難を促す。無茶だ、死んでしまう、距離をとれ、離れる……他にもそろそろと出ただろうか。しかし達也は一切気にしない、なんなら先が視えていた。

王馬「ん？アンタのターンだぜ……？」

その言葉に刺激され、理人は大きく口を広げる。

見えたのは犬歯だ、そして邪悪なまでの魔法量、しかし男は動かなかつた。どう見  
たつて優勢なのは理人……しかし、ここで二人がある事に気づく。

エリカ（理人の方が……焦ってる……？）

達也（逆転……というわけでも無さそうだ……）

理人「言われるまでもねえ……刻んでやるよッ！」

理人の攻撃が王馬の眼前に迫っていた。エリカは反射的に目を瞑ってしまふ、しかし  
達也はフツ、と鼻で笑う。

それに反応したエリカが恐る恐る目を開く。その光景は……

理人「なん、だとお……！」グググ

エリカ（切れて……いない……！）

理人と王馬の手が交わり合う、少し変な表現になるかもしれないが眼の前で起きてい  
ることだ。

手を重ね、理人の指先からの攻撃を封じている。

王馬「お前の指の力……たしかに大したもんだ」

引きちぎるだけならばピンチ力だけで十分だろうが隙が大きすぎて実戦では使えね  
え。

最小の動作で切り裂くためには「指の力」と「加速をするための距離」が必要…

王馬「まあ…裏を返せば、距離を殺しまえればお前は豆腐も切り裂けねえってことだよ♪」

理人「ツ!!調子に乗ってんじやねえぞコラ!!」ジャキツ

理人は左手から攻撃を繰り出そうとするが…これが空振ってしまふ。大方予想はつくだろう。王馬の力を操る技によってバランスを崩されているのだ。

理人「クソツッ!当たらねえ!!」

王馬「お?やっぱお前には無理だったか…じやあ良いよ」

すると王馬は左手を離し、再び理人と距離を取ってしまう。

エリカ「ちよ、なんでチャンスなのに!」

達也「はあ…性格が悪いのはアイツの方だな」

遠くからそんな声が聞こえるが今の王馬には関係の無いものだった。王馬は闘いを楽しむ故、相手に全力の状態を出させた上で倒す…これが目的だ。だから離れた。

理人の戦闘距離に関して言えば遠距離から近距離まで対応しているものだ。レイザース・エッジに関しては近距離も遠距離も関係なく対応出来る。だから王馬は零距离に居た。

理人「…テメエ、ふざけてんのか…?」

王馬「ふざけてる？まさか、お前があまりにも可哀想だったから離れてやったんだよ」  
理人「ああ、そうかい…………お前は絶対殺す」ギョーンッ

その瞬間、達也とエリカに鳥肌が立つ程の魔力が感じ取られた。もちろんその源は理人からである。周りの剣術部員たちは数名が圧迫され気絶、意識が朦朧となっているものもいる。

理人「…魔法を使ったレイザーズ・エッジってのはよお、威力も上がるし範囲も広がる…………既にこの闘技場が木っ端微塵になるくらいには力が溜まってんだぜ？それをお前にぶつけんだ…」

王馬「…ふーん、そうは見えねえけどな」

理人「謝るなら今のうちだぜ、今なら見逃してやる」

理人の最後の優しさか、王馬に最後のチャンスを与える。それに王馬は…

嫌だね♪

理人をさらに煽った。

その瞬間理人の手が王馬目掛けて振り下ろされる。そして空気を割く甲高い男が鳴り響き烈風が吹く。

それはエリカ達の元にも届いていた。眼の前を腕でガードするかのように隠し、達也も例外では無かった。

そして、斬撃が王馬に目掛けてじわりじわりと近づいてくる。

エリカ「王馬くん、避け」

ギイイイイイイインツツツ!!!

王馬に直撃した。

エリカは眼の前で起きたことに耐えられなくなり、両手で口を塞ぐ。そんな中、横で達也も凝視していた。

あまりの威力により地面そのものが形として残っていないかった。土埃が舞い、様子が良く見えない。

やがて状況が把握出来るようになっていき……

達也は笑った。



理人「なん、だとお……」

理人は王馬を化け物でもみたかのような顔で見る。

辺りに居た生徒達も同じく、王馬を見る。

エリカも達也も……

王馬「言つただろ？ガツカリだつて」

レイザーズ・エツジによつて体は八つ裂きにされることは無く、理人の指は折れ曲がつていた。

しかも、王馬の胸板で。

エリカ「アレつてもしかしてさっきの……！」

先程、事が重大になる前に起きた出来事だ。

壬生と桐原が乱闘騒ぎを起こした時に王馬が仲裁に入った時に起きた出来事だ。普

通なら高周波ブレードによつて王馬の体は切り刻まれる筈だった。しかし、甲高い金属音が鳴り響きそれは阻止されていた。王馬の体に触れているのに、だ。

達也「直撃した時の音でそうじゃないかと思つたが、やはりそうだったか」

エリカ「え、気づいてたの？」

達也「ああ、それに最初から王馬が負けるとは思えなかつた。あの時魅せた謎の技、結界を張っている訳でも無さそうだ」

エリカ「……あとで教えてもらわなきゃ」

達也「……そうだな……それに、もうそろそろ終わりそうだ」

そう、王馬は魔法を使った訳ではない。単なる力技でもない。武術だ。

二虎流 ・ 金剛ノ型『不壊』

その技によつて理人からの攻撃を防いだのだ。

王馬の胸板からは一切の傷が見られず、摩擦熱が生まれたのか煙が立っていた。

理人「くつ、まだだ……ッ！」

何かを言おうとしたその時だった。理人の顎を王馬の脚が捉えていた。

王馬「まだ？ そりや違うな……」

理人は白目を向き、両膝をガクンと落とした。そして彼の瞳にはもう映っていないだろうが追撃が迫っていた。

王馬「もう終わつてんだよ！」

振り抜いた脚を理人の額に蹴り落とす。ゴシャツ、とした音が鳴り響き理人はその場に静かに沈んだ。

少しの間、沈黙が流れていた。生徒達は騒ぎもせず眼の前を見ていた。そして眼の前で起きたことに意識を取り戻し、理人を心配するでも、王馬を称えるでもなく、その場から逃げ去つていった。きつと彼等にとつて王馬が救世主では無く、さらなる化け物が

現れた、と自覚したのでろう。

エリカ「すごい…すごいよ、王馬くん！」

達也「ああ…」

仁王立ちをして理人を見下ろしている王馬は、体は血塗れ、制服も破れて使い物にならないだろう。しかし笑っていた。

王馬「やつぱり、思ったとおりだったよ……」

アンタからは何も感じなかったぜ…

エリカ「それより、どーするコレ……」  
達也「……きつと、俺等が叱られるだろうな……」

勝った事はいいが、後先の事は考えたくない達也だった。